

北野廃寺

発掘調査報告書

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊

1983

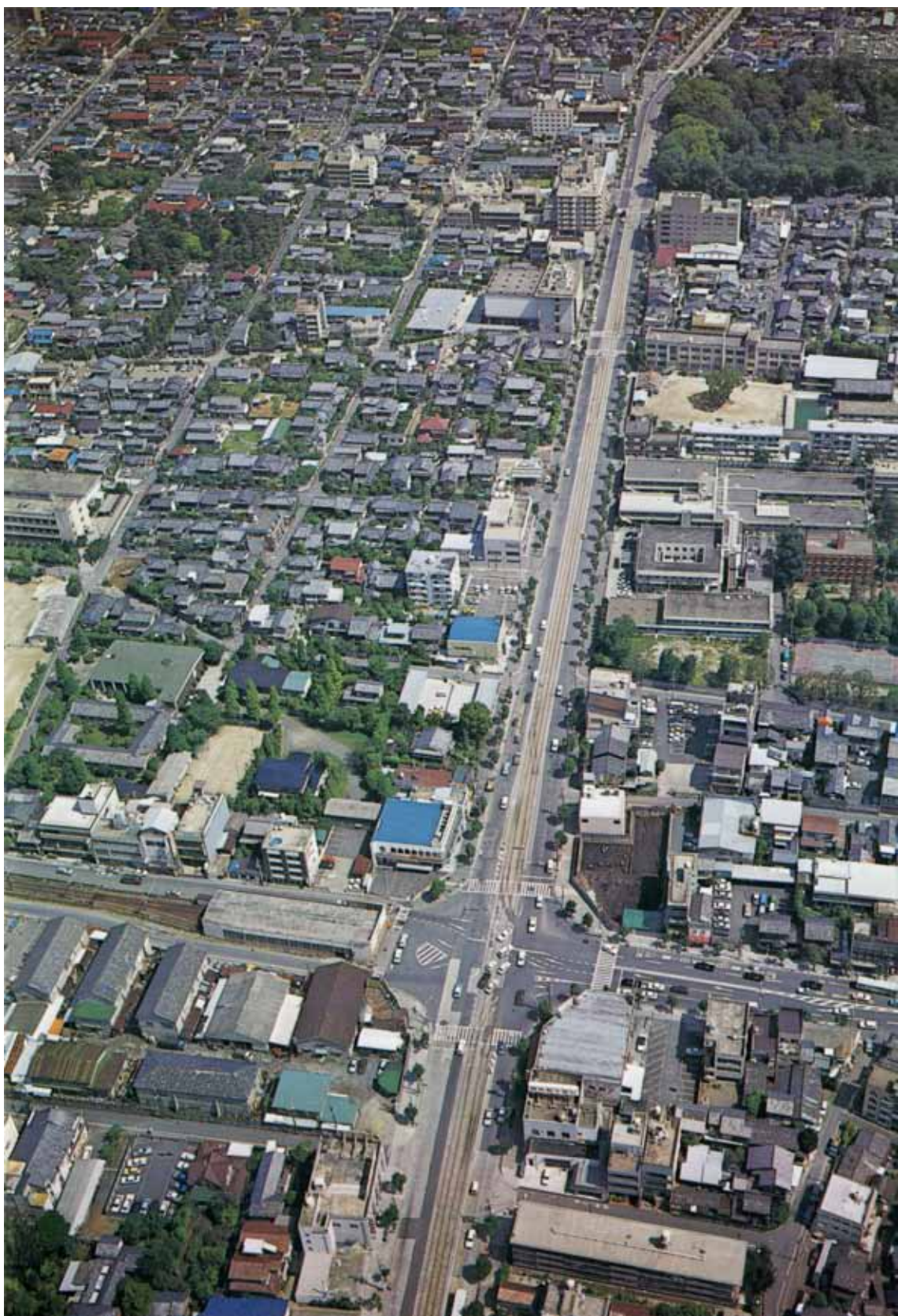
財団法人 京都市埋蔵文化財研究



1 「鳩室」墨書灰釉陶器段皿



2 二彩陶器五口壺小口縁部



北野廃寺周辺航空写真

序

この報告書は、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所が設立した初年度（昭和 52 年）に、北野廃寺と呼ばれる一部について、調査した結果である。調査地は京都市北区白梅町にあり、南北方向の西大路通と東西方向の今出川通の交差点の東北隅にあたる。

この遺跡地では、昭和初年の市電西大路の敷設に伴う調査で、多数の埋蔵品が採集されている。それらはおもに古瓦で、形式からみて平安京遷都以前のものが混じっていた。この結果、京都における平安京以前の仏寺は、北白川廃寺と、そしてこの北野廃寺がはじめて知られるようになったのである。

したがって、この遺跡についての学界の関心は高く、記録にでてくる野寺がこれに相当するのではないか。あるいは、秦氏の建立した広隆寺が、現在地に移建されたとすれば、その前身の寺がこれにあたるのではないかという説もでてきたのである。

この寺跡が、それらの説に相当するものかは、単に出土瓦で決定されるべきものではなく、遺跡そのものについて十分な吟味が必要であることはいまでもない。

しかし本格的な発掘調査は戦前・戦時中には遂にその機会はなく、戦後に持ち越されたのである。特に昭和 40 年（1965）代には、いくつかの調査の機会を得たにもかかわらず、遺跡として認められるようなものがあっても、それを建物と確定する広がりのある調査に展開することはできなかった。

ここに刊行するものは、その遺跡に対して、はじめて本格的に行った調査の報告である。検出した遺跡は複合したもので、予想通り平安京遷都以前にさかのぼるものが認められ、さらに中世までも寺が存続したことを知ることができた。遺物も、上流の者が使う、当時においてもすぐれた製品のものが多数出土している。ただ遺構としては、建物を示すものではなく、調査地が遺跡の中心部分ではないことを物語る。しかしこの調査は、北野廃寺を解明する重要なワンステップになるものであって、意義は深いと思われる。

ところで、このような調査を行い、京都の歴史のみならず、古代寺院の関連問題を解く鍵が得られたことは、調査に対して寛容な態度で承諾された京都信用金庫の惜しみない協力によるものである。関係の方々に深甚の謝意をささげるとともに、天候の関係もあり調査が長引いたことにも、忍耐強くその成果を見守っていただいたことにお礼申し上げるのである。

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

杉山信三

本文目次

第Ⅰ章 北野廃寺の環境	1
1 歴史的環境	1
2 白梅町にある遺跡（北野廃寺後）の調査	2
第Ⅱ章 調査経過	5
1 調査に至る経緯	5
2 調査経過	6
第Ⅲ章 遺構	11
1 遺跡の層序	11
2 平安時代以前の遺構	12
3 平安時代の遺構	16
4 室町時代の遺構	20
第Ⅳ章 遺物	23
1 土器	23
i 平安時代以前の土器	23
ii 平安時代の土器	33
iii 室町時代の土器	49
2 瓦甎類	53
i 軒丸瓦	53
ii 軒平瓦	57
iii 丸瓦	59
iv 平瓦	61
v 文字瓦	66
vi 甎	66
3 その他の遺物	68
i 鉄製品	68
ii 銭貨	70
iii 石製品	70

第V章 考察	71
1 土器の時代	71
2 土器の使用形態	80
第VI章 結語	86
付章	90
1 墨書土器銘「鵠室」の文献学的考察	90
2 北野廃寺に関連する文献史料	95
English Summary	101

図版目次

- PL. 1 遺跡 第3層遺構実測図
- PL. 2 遺跡 第2層遺構実測図
- PL. 3 遺跡 遺跡断面図
- PL. 4 遺物 SD38 下層出土土師器
- PL. 5 遺物 SD38 下層出土須恵器
- PL. 6 遺物 SD38 中層出土土師器
- PL. 7 遺物 SD38 中層出土須恵器 SD38 上層出土土師器
- PL. 8 遺物 SD38 上層出土土器 須恵器 SD37 出土土器 土師器・須恵器
SK34 出土土器 土師器・須恵器 SK35 出土土器 土師器・須恵器
- PL. 9 遺物 SK23 出土土器 土師器・黒色土器・須恵器
- PL. 10 遺物 SK21 出土土器 土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器
- PL. 11 遺物 SK20 出土土器 土師器・黒色土器
- PL. 12 遺物 SK20 出土土器 緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器
- PL. 13 遺物 SD13 第4層出土土師器
- PL. 14 遺物 SD13 第4層出土土器 土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器
- PL. 15 遺物 SD12 出土土器 土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器
- PL. 16 遺物 SK18 出土土器 土師器・緑釉陶器 SD14 出土土師器
- PL. 17 遺物 SD14 出土土器 土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・青磁
- PL. 18 遺物 第2層出土土器 土師器・緑釉陶器・二彩陶器・灰釉陶器・白磁・須恵器
- PL. 19 遺物 SK01 出土土器 土師器・瓦器 SD04 出土土器 土師器・青磁・陶器
SX08 出土土器 土師器・瓦器
- PL. 20 遺物 軒丸瓦
- PL. 21 遺物 軒丸瓦
- PL. 22 遺物 軒平瓦
- PL. 23 遺物 丸瓦
- PL. 24 遺物 平瓦
- PL. 25 遺物 平瓦

- PL. 26 遺物 平瓦拓本
- PL. 27 遺物 平瓦・丸瓦拓本
- PL. 28 遺物 鉄釘・鉄製品
- PL. 29 遺跡 発掘区全景
- PL. 30 遺跡 1 第3層遺構西部 2 第3層遺構東部
- PL. 31 遺跡 1 SI56 竪穴住居 2 発掘区南部土壇群
- PL. 32 遺跡 1 SD38 溝 2 SD38 断面
- PL. 33 遺跡 1 第2層遺構西部 2 第2層遺構東部
- PL. 34 遺跡 1 SK01 土器溜 2 SD04 溝出土土器群
- PL. 35 遺物 SI56 出土土器 SD38 下層出土土器
- PL. 36 遺物 SD38 下層出土土器 SD38 中層出土土器
- PL. 37 遺物 SD38 中層出土土器 SD38 上層出土土器
- PL. 38 遺物 SD38 上層出土土器 SD37 出土土器 SK34・35 出土土器
- PL. 39 遺物 SK23 出土土器 SK21 出土土器
- PL. 40 遺物 SK20 出土土器
- PL. 41 遺物 SK20 出土土器 SD13 第4層出土土器
- PL. 42 遺物 SD13 第4層出土土器
- PL. 43 遺物 SD12 出土土器 SK18 出土土器 SK22 出土土器
- PL. 44 遺物 SD14 出土土器
- PL. 45 遺物 SD14 出土土器
- PL. 46 遺物 SK01 出土土器 SD04 出土土器 SX08 出土土器
- PL. 47 遺物 軒丸瓦
- PL. 48 遺物 軒丸瓦
- PL. 49 遺物 軒平瓦・文字瓦
- PL. 50 遺物 鉄釘・鉄製品

表 目 次

Tab. 1	北野廃寺調査一覧表	4
Tab. 2	SD38 下層出土土器の構成	25
Tab. 3	SD38 中層出土土器の構成	30
Tab. 4	SD38 上層出土土器の構成	32
Tab. 5	SK23 出土土器の構成	34
Tab. 6	SK21 出土土器の構成	36
Tab. 7	SK20 出土土器の構成	38
Tab. 8	SD13 第 4 層出土土器の構成	41
Tab. 9	SD20 出土土器の構成	43
Tab. 10	SK18 出土土器の構成	44
Tab. 11	SD14 出土土器の構成	46
Tab. 12	SK01 出土土器の構成	50
Tab. 13	SD04 出土土器の構成	51
Tab. 14	SX08 出土土器の構成	52
Tab. 15	鉄製品一覧表	69
Tab. 16	土器法量表 (1)	72
Tab. 17	土器法量表 (2)	73
Tab. 18	土器法量表 (3)	76
Tab. 19	土器法量表 (4)	79
Tab. 20	軒瓦出土一覧表	88
Tab. 21	分類別瓦出土一覧表	89

挿 図 目 次

Fig. 1 調査位置図	5
Fig. 2 調査風景	8
Fig. 3 調査風景	9
Fig. 4 調査風景	10
Fig. 5 SI56 実測図	12
Fig. 6 SA55・SD38 実測図	13
Fig. 7 SD38 東西断面図	14
Fig. 8 SD37 断面図	15
Fig. 9 SK34 断面図	16
Fig. 10 SK23・SD13 断面図	17
Fig. 11 SD12 断面図	18
Fig. 12 竪穴住居出土土器	24
Fig. 13 黒色土器硯	39
Fig. 14 須恵器壺	47
Fig. 15 陶器	47
Fig. 16 甗	67
Fig. 17 石製品	70

例 言

1. 実測図の方位は、天測による真北を示すものである。
2. 実測図のLHはレベル高で、LH:0は標高61.35mである。
3. 遺構の略記号は、奈良国立文化財研究所使用の略記号に準じた。ただし、竪穴住居については任意の記号を使用した。
4. 本報告書作成にあたり、文案、編集、執筆は堀内がおもに行い、遺構・遺物の整理・製図は、山下俊弘、田原かづよの協力を得た。英文要訳は浪貝茂氏に依頼した。
5. 5ページFig.1の地図は京都国立博物館所蔵の縮尺1:1,000の北野図を複製して調整した。

第 I 章 北野廃寺の環境

1 歴史的環境

調査地は、京都盆地の西北部、標高 60m ～ 57m の緩慢に南北へ傾斜する湖成段丘の低台地に位置している。北には、衣笠山・大文字山が迫り、東には、鷹ヶ峰に源を発する紙屋川が南流している。もっともには双ヶ丘が望まれ、遺跡の景観は、南に最も開かれている。

現在、調査地周辺の一部には、東西に走る今出川通と、南北に走る西大路通が交差し、また、京福電鉄嵐山線の起点があり、京都西北部の交通の要衝となっている。このため、静かな住宅地であった当地域が近年急激な都市化の波を受けている。

北野廃寺の一带は、古墳時代に葛野県があり、律令制下には山城国葛野郡の一部に属し、渡来氏族である秦氏とも関連があり、京都の歴史にとっては重要な地域である。ここで、当地域周辺の歴史的環境を概観してみよう。

この地域の旧石器時代・縄文時代の遺跡・遺物の発見は少ない。旧石器時代遺物の発見例は、西大路通市電撤去の際に北野廃寺跡の一部から出土した有舌尖頭器、朱雀第六小学校での調査によるナイフ型石器などがある。縄文時代遺物の発見例は、本調査および西大路三条遺跡（チャート製石鏃）、衣笠氷室町遺跡などがあげられる。

弥生時代の遺跡は、北野廃寺の調査に伴って確認した北野遺跡、山ノ内遺跡などがあげられる。山ノ内遺跡では、近年の調査で溝などの、畿内第Ⅱ様式から第Ⅴ様式に属する遺構群を検出し、集落の存在が確認された。

古墳時代の遺跡は、当地域より以西の嵯峨野を中心とした古墳群があげられる。これらの古墳群は、京都盆地周辺に分布する古墳群、乙訓丘陵に沿った古墳や久津川一帯の古墳群が、古墳時代前期に成立したのに対し、すべて 5 世紀後半以降に属することが注目される。この時期には畿内各地の前方後円墳は次第に衰勢をたどるが、嵯峨野の古墳群においては、その逆であり、この地に存在した首長層の特異性をみることができる。嵯峨野には、天塚古墳、蛇塚古墳、清水山古墳、段ノ山古墳、仲野親王陵古墳など 5 基の前方後円墳が知られている。6 世紀にはいと、有栖川の扇状地を中心に近接して分布する大小の円墳群や、嵯峨野北辺の山麓一帯に密集した群集墳が形成される。これらの古墳群は、7 世紀

前半を境に築造は激減する。

古墳時代の集落については花園遺跡と常盤仲之町遺跡が注目される。前者は昭和 50・51 年 (1975・1976) の調査において竪穴住居 11 棟、掘立柱建物 2 棟などの 7 世紀前半頃を主体とする遺構群が検出され、集落の存在が確認された。後者においては、昭和 52 年 (1977) の調査で竪穴住居 24 棟、掘立柱建物 4 棟が検出され、ここにも集落の存在が確認された。

これらの古墳群の被葬者や、ここに生活を営んだ人々については、『新撰姓氏録』、『日本書紀』などの文献資料から、渡来氏族の秦氏をあげることができよう。秦氏は、農耕をはじめ、機織・金工・木工などのすぐれた手工業技術をもち、莫大な財力を蓄えたといわれている。新しい技術を導入し、葛野大堰を造って灌漑を行い、生産力を向上させ、地域の開発に貢献している。現在、人々の信仰の場であり、密接なつながりのあった神社が、嵯峨野にいくつか残っている。

飛鳥時代になると当地域にも初めて寺院が建立された。まず『日本書紀』推古天皇三十一年七月条にみられる蜂岡寺があげられる。この蜂岡寺の位置については、これまで諸説あったが、今回の調査地周辺に存在する寺院跡にあてるのが有力である。北野廃寺や檜原廃寺など、葛野一帯には飛鳥以降の寺院跡が分布している。

平安時代には、当地域一帯は禁野とされ、嵯峨天皇の嵯峨院 (現大覚寺)、後嵯峨上皇の亀山殿 (現天龍寺)、壇林皇后の檀林寺や藤原定家の山荘などの別業や大寺が営まれ、貴族たちの狩猟や遊びの場でもあり、文学の舞台にもなった。

このように、当地域周辺では、古墳時代後期の遺跡は多く多岐にわたるのに対し、旧石器時代から古墳時代前期や奈良時代については、不明な点が多く実体が明瞭でない。このことは単に資料的な問題なのか、遺跡の分布が疎な地域であるのか、今後の調査や資料の増加により明らかにして行く必要がある。

2 白梅町にある遺跡 (北野廃寺跡) の調査

北野白梅町付近で遺跡の存在をまず明らかにしたのは、昭和 11 年 (1936) 7 月にはじまった区画整理工事で発見された大規模な瓦の包含層^{註1}である。このことから寺院遺跡とみられ、これ以後、当遺跡は北野廃寺と呼ばれている。この時の状況について、まず藤沢一夫氏が「山城北野廃寺」(『考古学』第 9 巻-2 1938 年)として報告され、出土瓦が飛鳥時代 1 種から平安時代前期 12 種まで含むことから、この期間が遺跡の存続時期と考えられてい

る。またその性格について「ともあれこの葛野なる北野の寺は所謂葛野の秦寺であり、本廣隆寺としてのものであった。亦、この北野の寺は野寺法名常住寺なるものでもありえたように考えられるが、夫等の決定は今後の十分な検討に俟つこととしてもよいであろう」としている。また、この時の調査報告として時野谷勝氏の「北野廢寺跡」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第18冊 1938年）がある。

一方、文献資料からこの時期に野寺の位置と沿革に関する論文が2題提出された。一つは、福山敏男氏の「野寺の位置について」（『史迹と美術』1938年2月号）で、治安2年（1022）から治承3年（1179）の平野社行幸の御路筋などから復原して、北野紅梅町付近が野寺の位置であると考えられている。もう一つは足立康氏の「野寺移建説に就いて」（『史迹と美術』1938年4月号）で、野寺移建説に対して疑問をだされている。

昭和14年（1939）7月、北野白梅町交差点から南側の9地点の土砂採掘に伴って、多量の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦をはじめ、土器、瓦釘、塑像などが出土した。これらの遺物を整理された井本正三郎氏は「山城北野廢寺南遺跡の研究」（『考古学』1941年6月）で、北野廢寺の創立について「此の遺跡を本廣隆寺址とする説は、本廣隆寺は、九條にあり、此の遺跡は八條にある事實より當然成立せぬものである。其故、當廢寺は本廣隆寺とは別に奈良朝以前より存したことが知られる。（中略）このことは遺物の最古式のもの、飛鳥寺のそれに近いことを以て證明することが出来ると思ふ」とし、創立は飛鳥寺に近く、本廣隆寺とは異なる寺と考えられている。また野寺との関係については、常住寺一名野寺は奈良朝以前の寺院跡の上に、延暦13年（794）に創立された寺とされている。

これ以後の調査は、昭和33年（1958）年7月に京福電鉄の駅舎改築および整備に伴って京都府教育委員会文化財保護課の指導による京都大学考古学教室が調査を行った。その結果、顕著な遺構は確認されなかったが、多量の瓦類や土器などが出土している。昭和38年（1963）6月、上白梅町5番地の外人所有地の新築工事で、遺物包含層が確認され、坂東善平氏は「野寺址の一知見」（『古代学研究』第38・39号 1964年7月）で、出土地点から野寺址の西限遺跡と推測されている。昭和40年（1965）7月、北野白梅町交差点の北西の喫茶店改築工事に伴い、京都府教育委員会文化財保護課により調査が行われた。その結果、北野廢寺の調査で初めて瓦積基壇を検出、基壇の南側の瓦積みとされ、主要な建築遺構の存在が判明する。

昭和49年（1974）6月と翌年6月の西大路通における立会調査、および同年7月の白梅町交差点北西の娯樂店新築に伴う調査^{註3}などでも遺構・遺物が確認されている。

このほか、当遺跡で出土する飛鳥時代素弁十葉蓮華文軒丸瓦を焼成した窯の一つが、昭和38年(1963)3月、左京区岩倉幡枝町福枝での調査^{註3}によって発見された、通称“イナリ1号窯”であることが判明している。

	年月日	調査	調査主体	遺構	遺物	文献
1	1936. 8. 10	採集	藤沢一夫	古瓦包含層	軒丸瓦・軒平瓦・須恵器・土師器	「山城北野廃寺」(『考古学』9-2 1938)
	1936. 9. 8 ~ 16	発掘	京都府史蹟調査会	古瓦包含層	軒丸瓦・軒平瓦・香炉・須恵器	「北野廃寺跡」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』18
2	1939. 7.	採集	井本正三郎	古瓦包含層 焼土層	軒丸瓦・軒平瓦 土器・陶器	「山城北野廃寺南遺跡の研究」(『考古学』11-6 1941)
3	1958. 7.	発掘	京大考古学教室	なし	多量の遺物	
4	1963. 6. 16	採集	坂東善平	包含層	須恵器・土師器 青磁・緑釉・瓦	「野寺址の一知見」(『古代学研究』第38, 39号)
5	1965. 7.	発掘	京都府教育委員会	瓦積基壇	瓦	
6	1974. 6.	立会	六勝寺研究会	溝状遺構	瓦・土器	
7	1975. 6.	立会	六勝寺研究会	溝状遺構	瓦溜・多量の瓦	
8	1975. 7. 29 ~ 8. 27	発掘	六勝寺研究会	石列・溝・柱穴	瓦・須恵器・土師器・緑釉	『北野廃寺跡』六勝寺研究会 1978
9	1976.	立会	六勝寺研究会	なし	蒸仁京同范瓦	

Tab. 1 北野廃寺調査一覧表

註

- 1 梅原末治「京都市北野における廃寺址の発見」(『考古学雑誌』第26巻第10号)
- 2 六勝寺研究会『北野廃寺跡発掘調査報告』1978年
- 3 横山浩一・吉本堯俊「京都市幡枝の瓦陶兼業窯」(考古学協会昭和38年度大会発表要旨 1963年)

参考文献

『京都の歴史1』學藝書林 1970年

川井銀之助「常住寺一名野寺址攷」(『史迹と美術』58 1935年)・「紙屋川礎石に就て」(『史迹と美術』11-4 1940年)・「續紙屋川礎石に就て」(『史迹と美術』12-1・4 1941年)

中郷敏夫「野寺一名常住寺草創に付て」(『史迹と美術』63 1936年)

田中重久「野寺址発掘調査報告」(『聖徳太子御聖蹟の研究』1944年)

藪田喜一郎「野寺考」上・中・下(『史迹と美術』36-3・7・9 1966年)

第Ⅱ章 調査経過

1 調査に至る経緯

このたび、京都信用金庫より京都市北区北野白梅町 63、64 番地に所在する北野白梅町支店改築にあたり、京都市文化観光局文化財保護課へ埋蔵文化財についての問い合わせがあった。同文化財保護課では、当番地付近は遺跡台帳により京都市内で最古の寺院跡の一つである北野廃寺跡に推定される遺跡指定地域であり、改築にあたり地下遺構が破壊を受けるため、協議して事前の発掘調査を行うことになった。調査は、文化財保護課の指導のもとに、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

また調査の結果、重要な遺構を発見した場合は、その保存を配慮するように申し入れた。

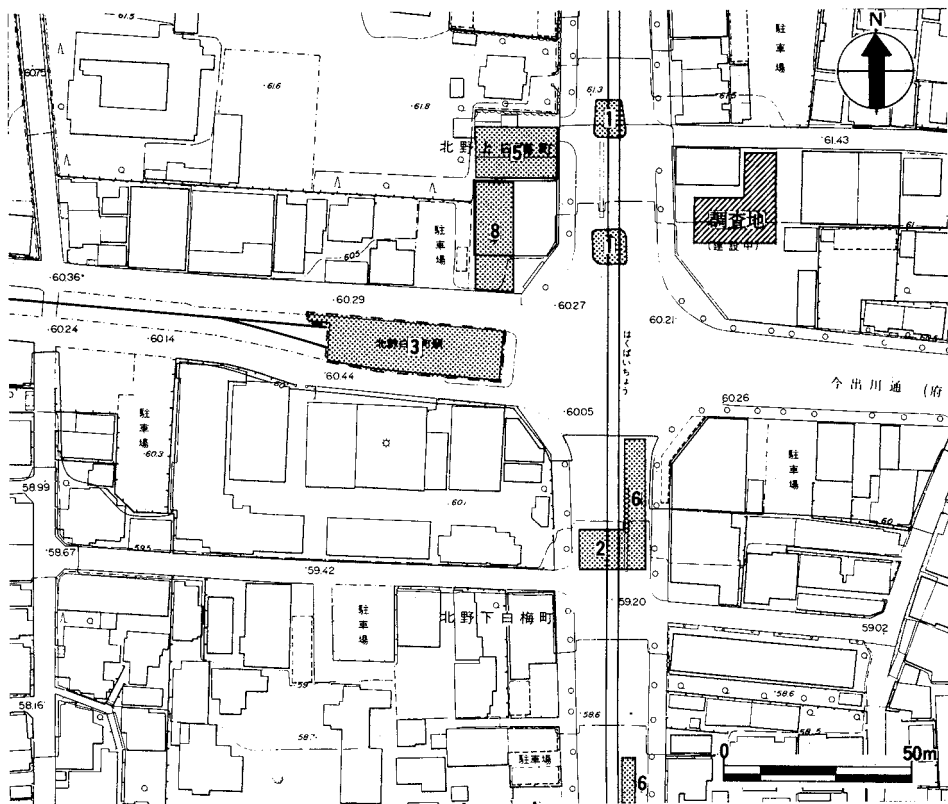


Fig.1 調査位置図 (1:2,000)

2 調査経過

発掘調査は、昭和52年(1977)3月7日から開始し、同年6月4日までの90日間実施した。この間、雨などによる作業中断、休日があり、実働60日間であった。

調査面積は、敷地面積895.45㎡のうち、南部分が既存の建物による大規模な攪乱を受けていたため、北側および西側を発掘調査の対象とし353.5㎡を測った。

発掘作業は、機械力による第1層(灰褐色泥土)の掘削・除去を終了した後に、第2層(茶褐色泥土)上面の精査を行った。その結果、室町時代の建物を2棟、L字状柵1列、南北溝1条、落込状遺構、土壌などを検出、同時に多量の遺物も出土した。これらの遺構は南北溝を境に、西側が建物、柵からなる地区と、東側が土器溜などの土壌群域に分かれていることが判明した。

遺構の清掃、写真撮影、実測の終了後、第2層(茶褐色泥土)の除去を人力によって開始した。除去終了後、調査区東南部に一時期の整地層と考えられる黄褐色砂泥を確認した。この層を除去した後、第3層(黒褐色泥土)上面において竪穴住居、築地状遺構、南北溝8条、東西溝6条、土壌、多数のピットなどの遺構を調査区全域にわたって検出した。

検出した遺構は、切り合い関係と遺物から判断して、数時期に分かれ、古墳時代から平安時代にかけての、同一面における重複した遺跡であることが判明した。

これらの遺構は出土遺物とともに、北野廃寺の歴史を明らかにして行く上で重要と考えられ、その保存を要望したところ、設計変更の配慮、新築された建物の床に主要遺構の地点表示、遺物の展示施設を設けるなど、数々の便宜をはかっていただいた。

なお、発掘調査中の日程、作業の詳細については、後掲の日誌抄に記述した。

調査担当

今回の発掘調査および整理作業に携わった財団法人京都市埋蔵文化財研究所の構成は以下のとおりである。

所長 杉山信三

調査部長 田辺昭三

課長 浪貝 毅（現文化庁記念物課）

資料部長 木村捷三郎

課長 江谷 寛

総務部長 松井克也

課長 村内義廣 西崎健次

職員 福西 喬 村木節也 吉田（現菅田）悦子 福島（現上村）京子

発掘調査担当者

調査員 堀内明博 平尾政幸 牛嶋 茂（写真担当）

補助員 岩崎哲志 西岡 敏 平田 哲 廣瀬俊幸 福井義彦（龍谷大学） 亀井義彦

山本峰夫 渡辺丈俊 植木礼子 江塚栄里子 亀井摩弓 田原かつよ 永瀬優理 民
谷百合子（花園大学） 坂口 晃 出口 勲 中村卓郎 山川弘美（立命館大学） 木
田清嗣 小島成元（大谷大学） 福本早穂 水野由子 和田いづみ（同志社大学） 石
丸文夫 清水恵三 福田貴久雄 水野春樹 滝本三和子 田坪令子

作業員 井口義勝 加藤令之 中川重次郎 野村清信 畑中元二郎 本田憲三 本田寿
正

整理作業

遺物の洗浄、注記、接合、復原などの整理作業については堀内が専従し、以下の諸君の

協力を得た。

亀井義彦 下浦 馨 山本峰夫 渡辺丈俊 江塚栄里子 亀井摩弓 木戸野里子 末松直
子 田原かつよ 永瀬優理（花園大学） 坂口 晃 出口 勲 中村卓郎 山川弘美（立
命館大学） 林 紗里（華頂短期大学） 田岡 斉（向南高校） 清水恵三 滝本三和子

なお、発掘調査および整理期間中に、西 弘海 小笠原好彦 原口正三 福山敏男 松

沢亜生 森 郁夫 畑美樹徳の諸氏に有益な助言、指導をいただいた。記して感謝の意を
表す。（敬称略・順不同）

調査日誌抄

1977・3・7～6・4

3・7～9 調査区の設定。敷地の南半分がもとの銀行の金庫室にあたっていて、すでに壊されていたため、調査区を敷地の北半分を設定、機械力により第1層灰褐色泥土（盛土）の除去を北部から開始。

3・10～12 北部調査区遺構検出開始。遺構検出面は茶褐色泥土で、南側へ緩やかに傾斜している。西部では茶褐色泥砂が主体となる。発掘区中央部において土師皿を多量に含む土器溜（SK01）を認める。また、北部北西隅にも土壙（SK02・03）と川原石、平瓦、甕などを含む土壙、および北東部で根石状のものを認める。

3・13 雨天のため作業中止、遺物の洗浄。

3・14 排水作業

3・15～16 北・中央部の遺構検出続行および土器溜の精査。中央部やや南寄り第2層が落ち込む段差を確認。しかしこの段差は調査区の西側で消滅する。

3・17 雨天のため外業中止、遺物の洗浄。

3・18 西部から遺構検出開始。北西隅で川原石および平瓦、土師器を含む土壙状の遺構を認める。

3・19 排水作業、SK01の土器溜の清掃。



Fig. 2 調査風景

3・20～22 西部遺構検出続行および中央部南寄りの落込の規模を追求、精査。

3・23～24 雨天のため外業中止、遺物の洗浄。

3・25～26 西部遺構検出続行。1間×3間以上の南北棟、桁行4間、梁行が北へのびる東西棟の建物遺構と、この2棟をL字形に結ぶ柵列を検出。ほかに土壙を認める。これらの建物の東側で南北方向の溝（SD04）を確認。

3・27 午前は雨天のため外業中止。午後から排水作業。

3・28 南北溝（SD04）を追求。この南側から多数の土師器皿、鉄釉天目茶碗が出土。

3・29 SK01およびその付近の清掃、写真撮影。

3・30～31 雨天のため外業中止、遺物の洗浄。

4・1 SK02・SK03およびその付近の清掃、写真撮影。

4・2～5 南北溝（SD04）土器溜の清掃、写真撮影。西側ピットの掘り下げ完了。SK01の実測。

4・6 北・中央部精査終了。SK01・SK02・SK03のほかに顕著な遺構はなかった。午後から雨のため外業中止。遺物の洗浄。

4・7 雨のため外業中止。遺物の洗浄、一時排水作業。

4・8 西部遺構検出続行。

4・9 雨のため外業中止、遺物の洗浄。

4・10 排水作業。西部遺構検出続行。南北溝SD04を境にして西部に遺構とみられるものが現われた。ほかに小穴を検出したが、建物にはまともなかった。

4・11 調査区全域の清掃。

4・12 遺構の清掃、写真撮影。撮影後実測の準備にかかる。午後から雨天のため外業中止、遺物の洗浄。

4・13 雨天のため外業中止、遺物の洗浄。

4・14～15 遺構実測終了。北側発掘区の北端で東西方向の落込が認められたため、調査区を北側へ拡張し、その性格を追求。

4・16 雨天のため外業中止。遺物の洗浄。

4・17～19 北端東西方向の落込（SK08）の南側肩を確認したが、北肩は調査区内では確認できなかった。この落込の埋土である第2層明茶褐色砂礫より火舎の完形と火鉢が出土。北部から第2層茶褐色泥土の除去開始。次の遺構検出面は黒褐色泥土でほぼ水平な面である。

4・20～22 第2層の掘り下げ続行。遺構検出開始。南北溝1条、東西溝3条を認める。発掘区南端の東西溝の西側は土壌が数回にわたって切り合う。ほかに南北小溝3条、土壌、小穴を検出する。

4・23～24 遺構検出続行。東西溝（SD12）を追求。南北溝（SD14）が合流しているのを確認する。

4・25 雨天のため外業中止。遺物の洗浄。

4・26～27 調査区域西端まで東西溝（SD12）が続いているのを確認。溝の底に小穴、土壌状遺構を検出。西南側遺構検出中に二彩片が出土する。

4・28 午前、雨天のため外業中止。午後、排水作業。東西溝（SD12）の掘り下げ。

4・29～30 調査区南部の土壌状遺構（SK21・SK20・SK22）を掘り下げる。これらの土壌の切り合い状態をみると、SK21・SK22が古く、これらが埋められた後にSK20、次にSD13が掘り込まれた

と考えられる。ほかに小土壌を認める。多量の土師器杯・皿、灰釉椀・皿、緑釉椀、須恵器瓶子を含む。

5・1 南北溝（SD14）の掘り下げ。この溝の北側上面に土壌（SK18）を確認。

5・2 雨天のため外業中止。遺物の洗浄。

5・3 排水作業。西側発掘区の遺構検出続行。

5・4～5 雨天のため外業中止。遺物の洗浄。

5・6～9 調査区遺構検出続行。西南部の土壌状遺構（SK19）の掘り下げを行う。SK19のすぐ南側でL字状に曲がる小溝を検出。

5・10～11 調査区遺構検出続行。調査区南側東西溝（SD13）の掘り下げ。砂、泥土の堆積が認められ、水が流れた痕跡があり。ほかに南北方向に並ぶピット列および小土壌を確認。南北溝（SD14）に土器、川原石、瓦などが一括して投棄された状況を確認。精査、清掃を行った後、写真撮影。



Fig. 3 調査風景

5・12 調査区東端で南北方向の落込を確認。底部に小径の川原石を敷きつめたような状態で検出。この落込を追求する。

5・13～14 東西溝（SD13）および南および（SD14）の掘り下げ続行。SD13の肩に切り込んでいるピットを確認。SD13の南側肩を確認するため、調査区

東南隅を一部拡張。

5・15 雨天のため外業中止。

5・16 調査区を拡張したが、SD13の南側肩は検出できなかった。SD13の掘り下げ終了後、底部に焼土・炭ガラ・土器片を含む土壌状遺構（SK23）を確認した。SK23には、燈明に使用された土師器杯・皿を多量に含んでいた。

5・17～18 西部調査区の精査。その西北寄りに堅穴住居（SI56）を確認する。その掘り下げ。貼床、カマド、周溝を検出する。調査区では堅穴住居の半分を確認した。

5・19～21 調査区全域の清掃、写真撮影。実測開始。

5・22 雨天のため外業中止。遺物の洗浄。

5・23～25 調査区東部南北方向落込の下層に、一時期古い南北溝（SD38）を確認。また北部調査区において東西溝（SD37）および土壌状遺構（SK34・SK35）を確認。切り合い関係から、これらの遺構はSD14より古く、SD38よりも新しいことが判明。

5・26 雨天のため外業中止。遺物の洗浄。



Fig. 4 調査風景

5・27 航空写真撮影。SK34・SK35は袋状の掘形をしており、発掘区南側で検出したSK36も同じよ

うな性格と思われる。遺物は少ない。一方、SD37の底からピットを2穴確認。これは以前検出したピットと掘形、埋土、規模がよく似ており、同時期のものと思われる。これらの遺構の掘り下げ終了。

5・28 SD38完掘後内部の清掃。

5・29 調査区北部東部間のSD38の最下層（砂礫）掘り下げ。

5・30 SD38をほぼ掘り終る。断面写真撮影、実測。

5・31 休日のため作業中止。

6・1 調査区の清掃、写真撮影。平面図作成のための割り付け開始。SD38の土層図を作成。

6・2 第3層遺構平面図作図開始。東壁土層図作図開始。調査区西部北壁、東西方向で幅1.0mのだけめ押しサブトレンチを設置。第5層は西に向かって落ち込んでいることを確認。

6・3 中央南北方向および東西方向断ち割り、土層図、平面図作図開始。

6・4 発掘区域内の断ち割り終了後、SK34のだけめ押し調査開始。東壁、南壁、西壁土層図作成終了。すべての土層図、平面図の作成が終る。本日で調査を終了する。

第Ⅲ章 遺構

1 遺跡の層序

今回の発掘調査で検出した遺構は、掘立柱建物、築地状遺構、溝、土壇などであり、調査区全面にわたって分布していた。これらの遺構は、いくつかの土層上面より掘り込まれ、異なった時期に造られたものである。ここで基本的な土層の状況について概略する。

まず第1層は、厚さ30cm～50cmの近世以降の盛土で、全体に東部が厚く、徐々に西に向って薄くなっている。厳密には、近世以降の盛土と近代以降の盛土に分けられるが、今調査では一つの層として取り扱った。第2層は、茶褐色泥土で、厚さ25cm前後とほぼ均一に堆積している層で、主に平安時代後期の遺物を多く含んでいる。第2層上面において、調査区中央付近で南へ下がる段が認められ、近世以降の削平によるものと考えられる。一方、第2層と第3層の間に、調査区東南部で厚さ5cmほどの黄褐色砂泥が認められた。遺物の出土量が少なく、年代は定めにくいですが、SD13廃絶後にその上を覆っていることから、平安時代後期までは下らないと考えられる。第3層は、黒褐色泥土で厚さ20cm～60cmと不均一に堆積している。調査区内においてはこの層に遺物はまったくみられなかった。黒褐色泥土の下は、厚さ50cm以上の黄灰色粘土の地山となる。黄灰色粘土上面には、小さな凹凸が認められるが、第3層と同じ黒褐色泥土が堆積し、また遺物の出土もないことから、自然に形成されたと考えられる。

検出した遺構と土層の関係から、遺構の時期を大きく二つに区分できる。まず第2層茶褐色泥土上面より検出した遺構群があげられる。これらの遺構の時期は、出土する遺物を考慮に入れると、室町時代のものである。ついで第3層黒褐色泥土上面より検出した遺構群がある。これらの遺構は相互に複雑に切り合っており、かつ同一面上で検出したために、層的に分類することは不可能である。したがって、これらの遺構を切り合い関係や出土遺物などを考慮して分類すると、古墳時代後期、飛鳥時代から奈良時代、平安時代と三つに大別することができる。なお、今調査においてこれらの各時期に伴う整地層は確認されなかった。

2 平安時代以前の遺構

北野廃寺創建以前の遺構としては、初めて古墳時代後期に属する竪穴住居1棟を検出している。加えて創建時の遺構と思われる築地状遺構1条、これに伴う南北溝1条、それらを切る東西溝1条、土壇3基などがある。これらは第3層上面から掘り込まれているが、平安時代の遺構に切られ、保存状態はよくない。

SI56

調査区西端北側で検出した竪穴住居であるが、調査区内では半分が認められただけで、全容は不明である。平面形は、南北5.1m・東西1.8m以上の隅丸方形を呈する。主軸方向はほぼ真北を示し、柱穴は南北に並ぶ2個を確認でき、柱間は2.54mである。覆土は茶褐色砂泥が凹レンズ状に堆積するが、上部はやや粘性に富んでいる。床面は暗茶褐色泥土に黄灰色粘土粒子が混じり、少し叩きしめられた貼床である。壁の残存状態は平均して20cm前後でやや外傾し、周溝は壁下に認められ、幅20cm・深さ5cmで北壁および東壁北側一部を除いてめぐる。カマドは北壁に位置し、一部を検出しただけであるが馬蹄形を呈

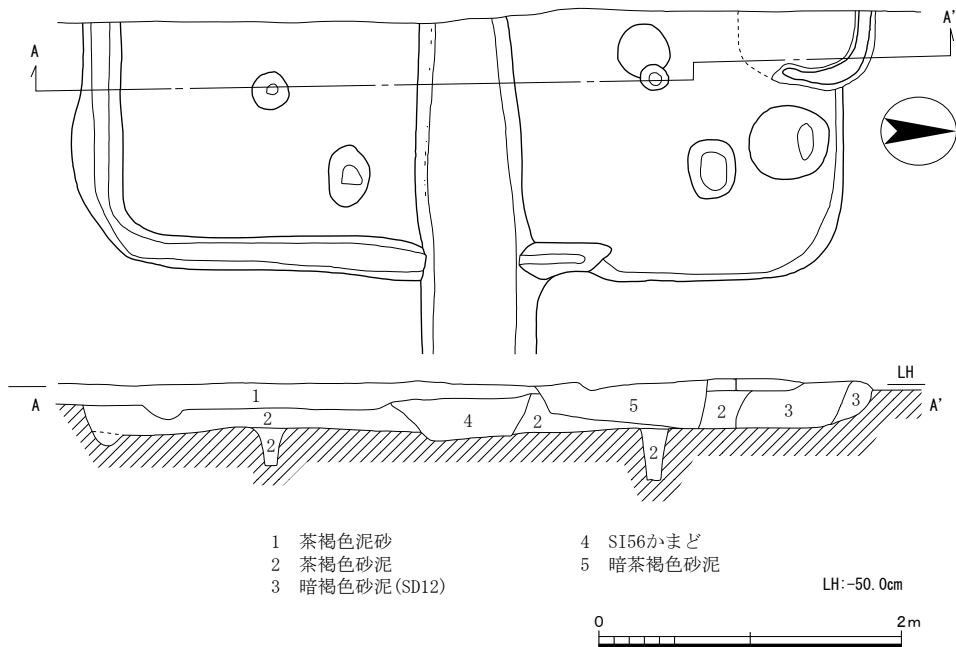


fig. 5 SI56 実測図 (1:50)

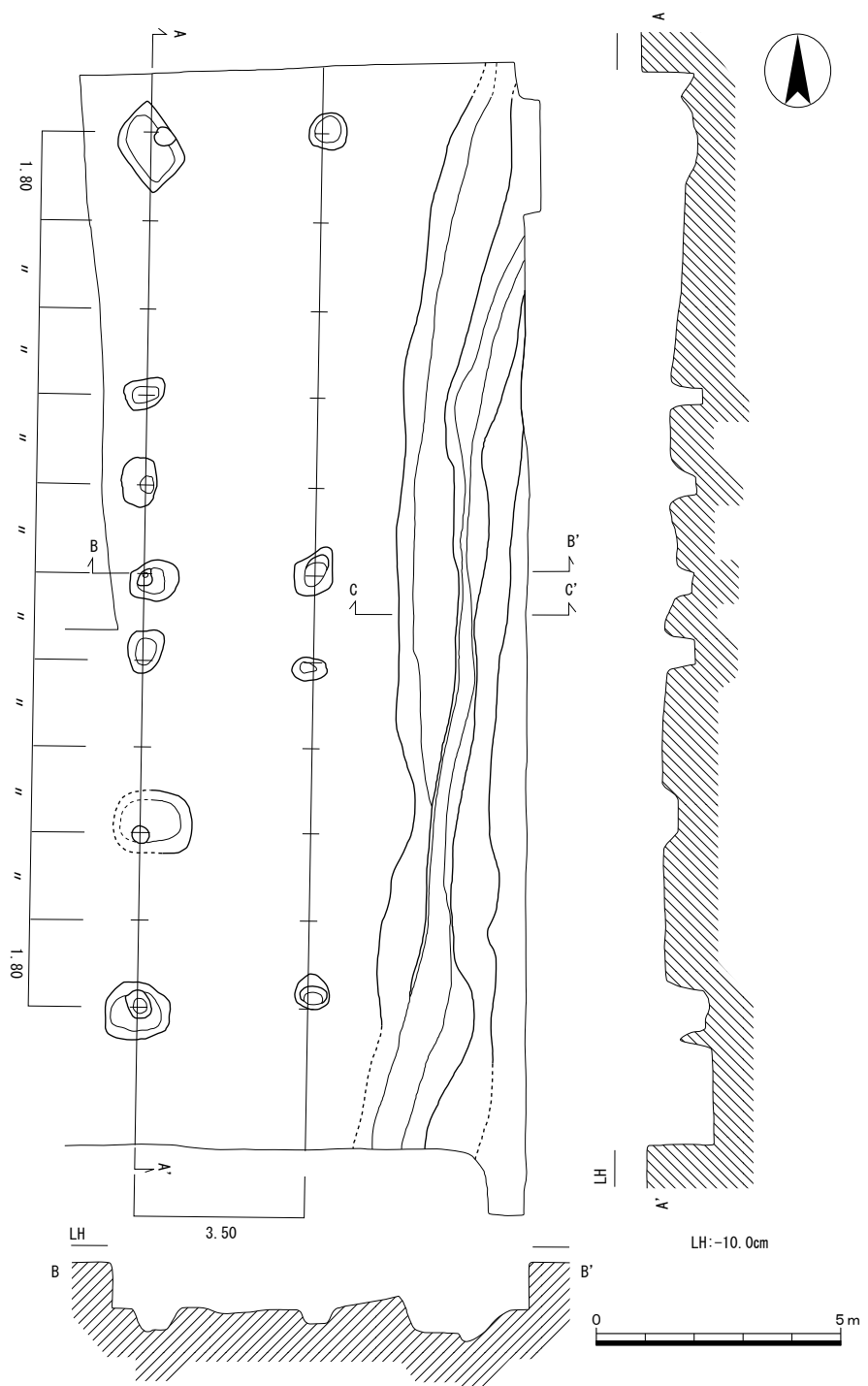


fig. 6 SA55・SD38 実測図 (1:150)

すると思われる。この東側で貯蔵穴状の小土壙を認め、土師器甕が出土した。覆土内から出土した土器は、土師器杯・高杯、須恵器蓋・高杯などである。

SA55

調査区東部で南北方向に検出した築地状遺構である。上面が後世に削平されており版築などは認められなかったが、築地本体の基底上に10間分(約17m80)の柱穴を確認した。棟の方向は、真北より49' 6" 東に振れ、柱間寸法は、梁行3.5m(12尺)、桁行1間が約1.8m(6尺)で、梁行寸法は桁行の約2倍である。柱穴は掘立柱で、掘形はほとんどが円形であるが、中に不定形を呈したものもあり、径0.7m～1.0m・深さは0.6mである。埋土は暗褐色泥土で、飛鳥時代の土師器や須恵器小片を包含している。SA55は一応築地と推定したが、梁行が広く、桁行が狭いことから単廊とも考えられる。

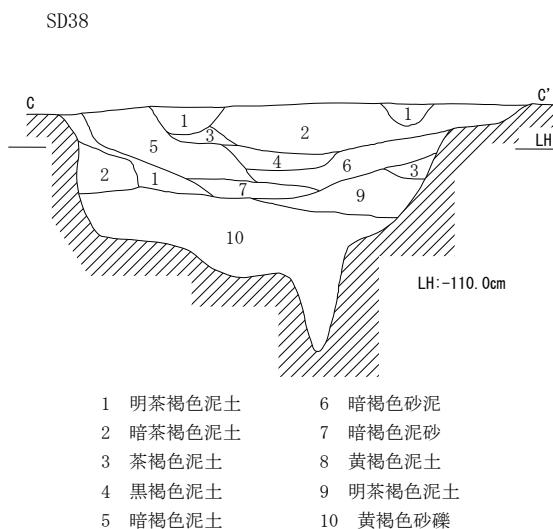


fig. 7 SD38 東西断面図 (1:40)

築地状遺構 SA55 の東側で検出した南北溝である。方位は、調査区北側で東に振れるが、SA55 とほぼ平行し南流している。北側および南側は後世の遺構に破壊され、残存状態は悪いが、幅は2.7m前後である。SA55 東側柱の中心から溝の中心まで3.1m、西肩までは約1.8m(6尺)で、この部分が犬走りと考えられる。深さは0.9～1.4mと一定でなく、またその形状はところによって異なるが、中央部から南では最下部がV字状を呈する。

堆積は大別して3層に分けられる。

まず、下層は、黄褐色砂礫が20cm～70cmと厚く堆積している。この層中

には間層がいろいろ認められず、一時期に堆積したと考えられ、多量の土師器、須恵器とともにやや少量の瓦が出土した。ついで溝の西壁部に黒褐色泥土・黄褐色泥土、東壁部に明茶褐色泥土・茶褐色泥土が認められ、中央部に暗褐色泥砂・暗褐色砂泥・泥土がレンズ状に堆積している。これらの層は、流水時に徐々に堆積したものである。特に暗褐色泥砂・暗褐色砂泥・泥土に、多量の遺物が含まれ、中層出土遺物として取り扱った。その

後、部分的に黒褐色泥土、茶褐色泥土が堆積し、溝の上面が廃絶時の埋土と思われる暗茶褐色泥土で覆われ、多量の瓦類が含まれていた。なお、上面で明茶褐色泥土の落込が認められたが、性格は不明である。

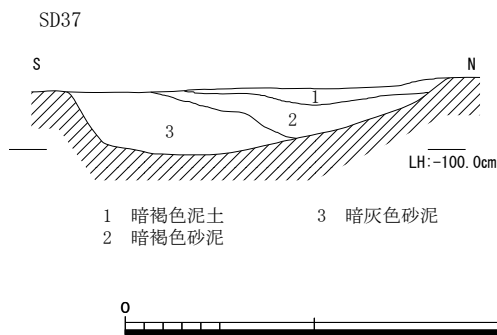


fig. 8 SD37 断面図（西壁）(1:40)

調査区北部で検出した SA55 および SD38 を切る東西溝である。発掘区では約 9m しか確認できなかったが、軸方向はやや西に振れ東流する。幅約 2m、深さ 30cm で、肩の傾斜が緩く浅い溝である。堆積は 3 層に分かれ、下層から暗灰色砂泥、暗褐色砂泥となり、暗褐色泥土によって埋められている。瓦、土師器、須恵器が出土しているが量は少ない。溝の構造や埋土から判断して、生活排水や浄水が恒

常的に流れていた痕跡はなく、雨水などが一時的に流れた溝と思われる。

SK36

調査区南端中央部で検出した土壌状遺構である。調査区で部分的にしか検出していないため全容は不明である。直径 5m 以上、深さ 90cm の不定形を呈する。底部はやや起伏があるが平坦であり、壁は内側に窪み、土を取ったような形状を示す。埋土は下層から黒褐色砂泥（黄灰色粘土粒子を均一に含む）、暗灰色砂泥（一部黄灰色粘土を含む）、暗灰色泥砂、暗褐色泥土と 4 層に分けられ、レンズ状に堆積している。暗灰色泥砂中に少量の土師器、須恵器、瓦片が含まれる。

SK35

SK34 のすぐ東側で検出し、SD38 を切る土壌状遺構である。調査区では遺構の全容を確認できなかったが、最大径 3m 以上の不定形を呈する。深さは 60cm で、底部は平坦で SK34 と同様の土取穴形状を示す。埋土は淡茶灰色砂泥、黒褐色砂泥、暗茶褐色泥砂と 3 層に分かれてレンズ状に堆積する。出土遺物は少量の土師器片、須恵器片、瓦片である。

SK34

調査区北端で検出した土壌状遺構である。SA55 を切り、SD14 に切られており、調査区ではその全容を明らかにできなかった。最大径 5m 以上の不定形を呈し、深さは約 80cm、底部は平坦で壁は土を抉り取ったように内側に窪んだ形状を呈する。埋土は、下層が黒褐

色砂泥（黄灰色粘土粒子を含む）と淡黄灰色砂泥が互層になり、その上に茶灰色砂泥、茶褐色砂泥、暗灰褐色砂泥がレンズ状に堆積している。各層から出土した遺物は、土師器杯・皿片、須恵器片、瓦片が少量である。

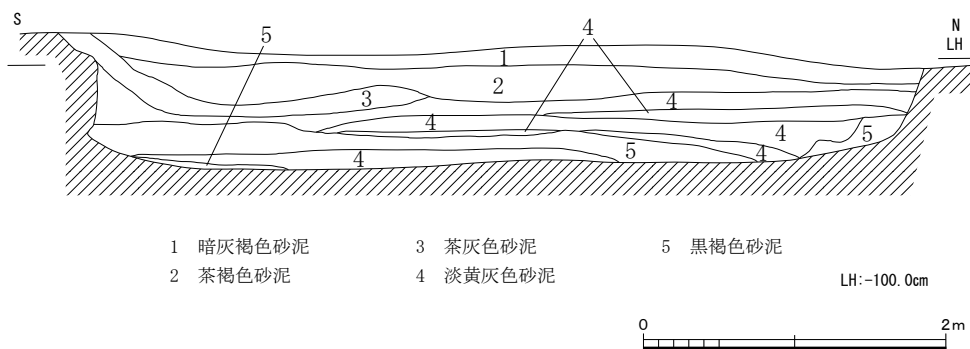


fig. 9 SK34 断面図（西壁）(1:50)

3 平安時代の遺構

平安時代の遺構は、平安時代以前の遺構と同様に第3層上面において検出し、溝（8条）、土塋（12基）などがある。伽藍を示す主要な遺構は認められなかったが、寺域内の区画を示すと思われる溝や多量の土器が出土した土塋を検出している。これらは複雑に切り合っているため、遺構の説明は関連する主要な遺構から先に述べ、その後にはほかの遺構を述べることとする。

SK23

調査区東南隅で検出した土塋状遺構である。SD13の南側肩を確認するためにトレンチの一部を拡張した際、底部で検出した。全容は不明であるが、径1.3m以上の円形を呈している。深さは0.4m以上で、底部は平坦である。底には暗茶褐色砂泥が15cmほど堆積し、黄灰色粘土粒子を均一に含んでいる。この層の上には、焼土・炭ガラを含む暗褐色砂礫土が上面まで堆積し、比較的保存状態の良い多量の土器が全体に含まれている。

SD13

調査区東南部で検出したやや西に振れて東流する東西溝である。調査区では南側肩を確認できなかったため、規模は不明である。幅3m以上、深さは80cmを測る。底は平坦で、暗茶褐色砂泥が10cmほど堆積し、その上に暗褐色泥砂が20cm認められ、多量の土器が出

土した。この層の堆積後、肩部に暗褐色砂泥（小礫が少量混じる）がたまり、その後明黄色砂泥がレンズ状に薄く堆積する。この層の肩に黄褐色砂泥が張り付いている。上面まで暗褐色泥土が 40cm の厚さで認められた。遺物の出土は少なく、廃棄する際の埋土と考えられる。

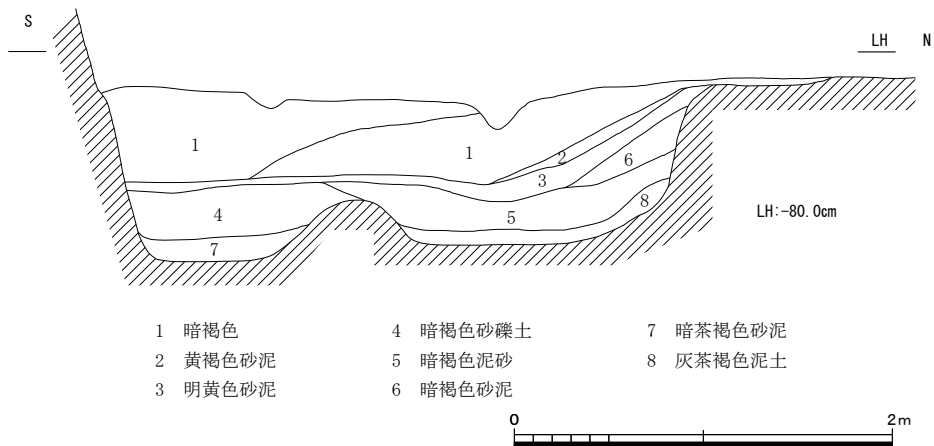


fig. 10 SK23・SD13 断面図（東壁）(1:40)

SK22

SK21 の北側で検出した土壌である。SD13 に切られて保存状態は悪い。直径 2m 以上の楕円形を呈し、深さは 40cm で、底は平坦である。埋土は灰褐色砂泥の 1 層で小礫を均一に含むが、遺物は少量の土器と瓦片だけである。

SK21

調査区南端で検出した土壌である。SD13、SK20 に切られ、遺構の保存状態は悪い。長径 2.2m 以上の楕円形を呈し、深さは 1.2m で、底は平坦である。埋土は 3 層に分けられ、底には厚さ 40cm の灰褐色泥砂（小礫及び黄灰色粘土粒子が混じる）が認められ、多量の土器、瓦などを含む。この後、暗灰褐色砂泥がレンズ状に 30cm ほど認められ、遺物が少量混じる。さらに土壌上面では淡灰褐色砂泥が認められるが、遺物をほとんど含まない。

SK20

調査区南端中央で検出した土壌である。調査区内で全容は明らかにできなかった。直径 2.4m のほぼ円形を呈し、深さは 60cm で、底は平坦である。埋土は 3 層に分かれる。下層は暗灰褐色砂泥で厚さ 15cm の堆積が認められた。この層中には、ほとんど遺物はみられないが、この上の 20cm ほど堆積している焼土および炭ガラを多量に含む暗灰褐色泥砂

からは「鶺鴒室」の墨書銘のある灰釉陶器の皿や多量の土器、瓦が出土した。土壌上面までは暗茶褐色泥土が認められたが、遺物はほとんど含まない。このことから暗灰褐色泥砂から出土した遺物は、一時的に廃棄されたものと考えられる。また SK21 を切っているため、これよりも新しい土壌である。

SK18

SD14 の北端上面において検出した土壌である。長径 2.5m・短径 1.5m の楕円形を呈し、底まで 25cm の浅い土壌である。埋土は暗灰褐色泥土で、底部付近は砂の混入がみられ、土器、瓦をわずかに含む。

SK16

調査区西部で SD12 に北側を切られた土壌である。長径 3m 以上、短径 1.3m の楕円形を呈し、深さは 15cm と浅く、底部は平坦である。埋土は暗灰褐色泥土の 1 層だけである。北端および南端の底部に少量の川原石・土器がみられる。

SD14

調査区中央部東寄りで見出した南北方向の SD12 に合流し南流する溝である。幅はほぼ等しく 2.1m あり、深さは 20cm と浅い。西肩は底より急に立ち上がるが、東肩は緩やかに立ち上がる。底部は平坦である。埋土は 2 層に分かれ、底には暗褐色泥土の堆積が 5cm ほど認められ、土器、瓦などを含む。この層の上に、上面まで明褐色砂泥が認められた。SD14 の北側および SD12 との合流付近の上面には、径 10cm 前後の川原石が多数みられたが、すわった石はないため、埋める際に投棄されたと考えられる。また土器や瓦をかなり含む。以上のことより SD12 と同様の性格をもつ溝と考えられる。

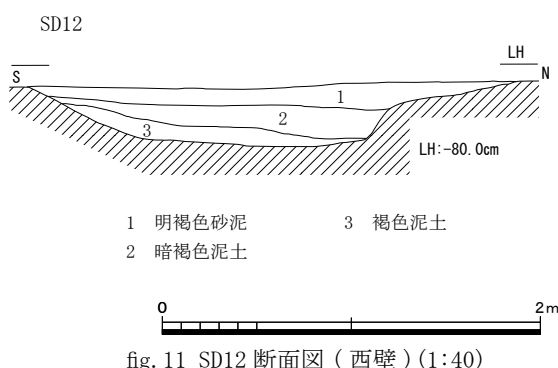


fig. 11 SD12 断面図 (西壁) (1:40)

調査区中央で見出した、軸方向が東西を向いた東流する溝である。幅は西端と東端とでは著しく異なる。西端では幅 60cm・深さ 20cm と狭く V 字形を呈しているが、東端では幅 2.2m・深さ 30cm で、北肩は底から急に立ち上がるが南肩は緩やかである。埋土は 3 層に分かれるが、西方

ではほとんど分層できず 1 層だけである。東の底には褐色泥土が 10cm ほど認められる。この層は粘性に富み、砂・小礫はほとんどなく、少量の土器・瓦を含むにとどまる。褐色

泥土の上には暗褐色泥土（やや砂を含む）が10cmほど堆積する。この層は全体に認められるが、西方では砂を多く含み、西端では砂泥となる。かなりの土器、瓦が混じる。上面までは明褐色砂泥が認められたが、遺物はあまり多く含まれない。中央部北肩に径20cmほどの川原石や自然石がみられたが、性格は不明である。また底にて不定形な土壌状遺構（SK26）を認めたが遺物は出土しなかった。以上から、SD12は恒常的に水が流れていた痕跡は認められず、雨水などを流す排水用の溝と考えられる。

SD32・SD31・SD15

調査区中央部で検出した南北方向の溝状遺構である。この3条の溝は、軸方向がほぼ真北を向き、幅30cm～50cmで、深さは20cmと浅い。SD15の埋土は、暗茶褐色泥砂で、底の部分は砂を多く含む。遺物は少量みられる。SD31の埋土は暗褐色泥砂で、この溝も底部付近では砂が多く混じるが、遺物はほとんど含まない。SD32の埋土は暗褐色泥土で、やはり底部付近では砂を多く含む。この埋土には少量の小礫と土器、瓦が認められた。

SD30

調査区中央部南寄りで検出した溝状遺構である。方位はほぼ東西を向き、幅70cmで深さ10cmと浅い。埋土は暗褐色泥土で、底部に近いところではやや砂を含む。少量の小礫、土器、瓦を含む。

SK29

調査区中央部西寄り、SK24の東で検出した土壌である。長径1.8m、短径1.2mの不定形で深さ15cmと浅く、底部は平坦である。埋土は暗茶褐色泥砂で少量の土器、瓦を含む。

SK28

調査区南西部で部分を検出した土壌状遺構である。形状は長方形を呈すると思われ、深さは20cmと浅い。埋土は3層に分けられ、底には黒褐色砂泥が5cmほどレンズ状に堆積する。黄灰色粘土粒子が少し混じるが、遺物はまったく含まない。この上に暗茶褐色砂泥が10cmほど認められるが、遺物はみられない。土壌の上面まで暗茶褐色泥砂が認められた。この層からの出土遺物は少量の土器、瓦である。

SK27

調査区南西部でSD17を切る土壌である。直径2.5m、短径1.8mの楕円形を呈し、深さは20cmと浅い。埋土は暗茶褐色泥土で、小礫を均一に含み、少量の土器、瓦が出土する。

SK25

調査区南西隅で一部分検出した土壌状遺構である。全容は不明であるが、径1.4m以上

の円形を呈し、深さは20cmと浅い。埋土は暗茶褐色泥土で、径5cm前後の小礫を多量に含むが遺物はほとんどみられない。

SK24

調査区中央部西寄り、SD12の南で検出した土壌である。長径3m、短径1.8mの不定形で、深さは1.0mと深い。埋土は大きく3層に分かれ、底部には暗褐色泥砂が30cmほど堆積している。この層は黄灰色粘土粒子を均一に含むが、遺物は出土していない。この上には暗茶褐色泥土が40cm堆積するが、遺物はみられない。上面まで暗褐色泥土が認められ、土器、瓦などをわずかに含む。

SK19

調査区南西部SD17の北側で検出した土壌である。径2m前後の方形を呈し、深さ10cmと浅く、底部は平坦である。埋土は暗褐色泥土で径5cmほどの小礫を含むが、遺物はほとんどみられない。

SD17

調査区南西部で検出したL字型を呈する小溝である。東西方向に長く、西端で折れ曲がり南へ下がる。軸方向はほぼ東西、南北を示し、溝幅は30cmと一定で、深さは10cmと浅い。埋土は2層に分かれ、底には褐色砂泥が薄く堆積しているのが認められ、遺物はほとんど含まない。溝の上面までは暗褐色泥土で覆われていて、小礫を均一に含むが遺物は少量の土器、瓦が出土しただけである。

4 室町時代の遺構

室町時代の遺構は、第2層上面で確認され、建物(3棟)、柵列(2列)、南北溝(1条)、土壌(9基)、落込状遺構、ピットなどを検出した。

SB54

調査区東南部で検出した1間(1.2m)×1間(1.4m)の方形の小規模な掘立柱建物である。棟方向は、真北よりやや東に振れ、柱穴は直径30cmの円形で、深さ20cmである。底部には径15cmの川原石がすわる。このSB54は東側にのびる可能性をもつ。

SA53

調査区東部南寄りで2間分検出した柵列である。この柵列の軸は大きく西に振れ、SB50、SB51、SA52とまったく軸方向は異なる。柱間寸法は1.5m(5尺)等間である。掘形

は径 30cm の円形で、深さは 10cm と浅い。

SA52

SB51 の東側中央部から東へ東西方向 5 間、北へ南北方向 5 間以上の逆 L 字形の柵列で、ほぼ真北を示す。東西方向の柱間寸法は、1.0m、1.0m、1.4m、1.2m、1.2m と不規則であるが、南北方向は 1.0m 等間で南端から 3 間目が 2.0m と広い。

SB51

SB50 の西寄り南で検出した 1 間×4 間以上の掘立柱の南北棟で、軸方向は真北を示す。柱間寸法は桁行 1.95m(6.5 尺) 等間で、梁行 2.3m(7.7 尺) である。柱穴の掘形は、直径 30cm の円形で深さは約 60cm を測る。埋土は暗灰褐色泥土である。SB50 の桁行が 4 間で終るとすると、西側の妻側柱列と SB51 の西側柱列と一致する。

SB50

調査区西部北で検出した掘立柱建物遺構である。調査区では南側の桁行方向 4 間分(7.8m)を確認したにとどまるが、北側へ梁間をとる東西棟と考えられる。軸方向はほぼ真北を示し、柱間寸法は、桁行 1.95m(6.5 尺) 等間である。掘形は径 30cm の円形で、深さは 60cm である。また東端部と西 1 間の柱穴は、抜きとり痕を確認した。これらの柱穴の埋土は暗灰褐色泥土である。

一方、4 間分検出した柱穴間の中央に径 20cm の円形の柱穴を確認したが、その軸線は SB50 と一致するため、この柱穴は建て替えられた跡とも考えられる。

SK11・SK10・SK09

調査区東南部で検出した土壌状遺構である。3 個の遺構は、各々径 1.0m 前後の円形を呈する小規模なもので、深さは 30cm～40cm と比較的浅い。埋土は、SK09、SK10 が灰褐色泥土、SK11 が灰褐色泥砂で、各々少量の土器を含むだけである。これらの遺構は近接しており、同じような形態、遺物の出土状態ではあるが、その性格は不明である。

SX08

調査区北部で検出した落込状の遺構である。部分的な検出のため形状は不明であるが、東西方向 9m 以上、南北方向 1.0m 以上で、遺構面から底まで 70cm と比較的深い。埋土は大きく 3 層に分かれ、底には暗灰色泥砂が 10cm ほど堆積する。この層は粘性に富み小礫を少量含むが、遺物はほとんどない。次に明茶褐色砂礫が 40cm 認められた。径 10cm ほどの多量の川原石と土器、瓦を含む。遺構の上面までは灰褐色泥土が認められ、小礫や遺物を少量含む。

SK07

調査区中央部南より、SD04の西側で検出した土壌である。径80cmで円形を呈し、深さは30cmのU字形を呈する。埋土は暗灰色砂泥で、少量の土器と多量の鉄釘を含む。

SK06

調査区中央部北より検出した土壌である。径1.2mのほぼ円形を呈し、深さ20cmである。埋土は暗灰色泥土で、土壌の上面には径10cmほどの礫が混入するが、遺物はほとんど含まない。切り合い関係から柵列SA52よりも新しい。

SK05

調査区西部北で検出した土壌である。径1.5mであるが不定形を呈し、深さは20cmと浅い。埋土は褐色泥土で、遺物も少量の土器、瓦を含むだけである。

SD04

調査区中央部で検出した南流する溝である。軸方向はほぼ真北を示す。幅は0.5m～1.0mと南側で広くなり、深さは40cm～60cmでU字形を呈する。底には、暗褐色泥砂の堆積が20cmほど認められる。遺物はほとんど含まない。この上に暗褐色泥土が上面まで堆積しており、遺物を含み、特に南側で多量の土器が出土している。出土状態などから判断して、一括に投棄されたものと考えられる。

SK03

調査区北端SK02の南側で検出した土壌である。形状は長径70cmの不定形を呈し、深さは15cmである。埋土は褐色泥土で、少量の遺物を含む。

SK02

調査区北端西で検出した土壌である。形状は長径1.7m、短径1.3mの不定形を呈し、深さは10cmと浅い。埋土は褐色泥土の1層だけで、少量の土器を含む。

SK01

調査区東部中央で検出した土壌である。形状は長径3.5m、短径2mの不定形を呈し、深さは10cmと浅く、底部は平坦である。埋土は灰褐色泥土で、この中に保存状態の良い多量の土器を均一に含んでいる。

集石遺構

調査区北部で5箇所ほど小規模な集石遺構が認められた。これらの遺構は、長径70cm、短径50cmの長方形を呈し、底まで非常に浅く、遺物は少量出土する。それぞれ径20cmくらいの川原石が10個前後あり、土壌墓とも考えられるが、その痕跡は認められなかった。

第Ⅳ章 遺物

今回の発掘調査により出土した遺物は、土器類、瓦甎類、鉄製品などがあり、多種多量なものである。これらの遺物は、飛鳥時代から室町時代にまで至るもので、主に溝、土壇、柱穴、整地土などから出土した。特に重要なものとしてSD38、SK23、SK21、SK20、SK18、SX08、SK07、SD04、SK01からの出土遺物があげられる。これらには、溝出土のものを含むが、それぞれの時期を示す比較的良好な資料と考えられる。

以下、土器、瓦甎類、その他の3節に分け、事実記載を述べることとする。

1 土器

土器は瓦とともに出土した遺物の中で多数を占めるもので、SD38、SD37、SK23、SK21、SK20、SK18、SD14、SD13、SD12、SX08、SD04、SK01などの遺構から多量に出土した。これらの遺物は、飛鳥時代から室町時代に属し、北野廃寺の創建およびその経過に関して、有力な手がかりを与える資料である。以下、北野廃寺創建以前の遺物として竪穴住居出土土器から遺構ごとに記述する。なお、土器の成形・調整の技法および器種分類については「平城宮発掘調査報告Ⅶ」（奈良国立文化財研究所学報第26冊、1975）に準じている。

i 平安時代以前の土器

竪穴住居出土土器 SI56(PL. 35)

竪穴住居より出土した遺物は、覆土上層より土師器杯CⅢ(1)、甕(4)、須恵器高杯(5)などがあり、張床面より土師器高杯(2)、甕(3)などが出土した。

杯CⅢ(1)は平たい底部と、内弯気味に外側へ開く口縁部からなり、口縁端部はやや内傾する面をもつ。内面は放射暗文がみられ、口縁部上半内外面をヨコナデする。底部外面は未調整で、淡茶灰色を呈する。小礫を含み、比較的堅緻な胎土である。口径11.0cm、高さ3.3cm。

高杯(2)は、脚部だけを残す破片である。遺存状態が悪いため、調整は不明瞭であるが、脚部外面は丁寧にナデる。淡赤褐色を呈し、微砂粒を多く含む胎土である。

甕(3・4)は、小形のものと同大形のものがある。3はほぼ完形であり、球形に近い体部

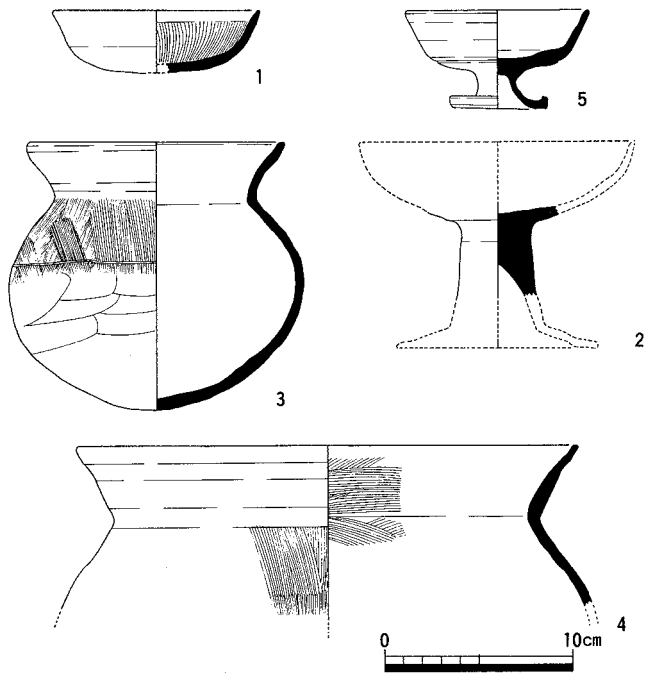


fig. 12 竪穴住居出土土器 (1:4)

の破片である。体部外面は縦方向のハケメを施し、体部内面は未調整で指頭痕を残す。口縁部内面は横方向の粗いハケメが残り、外面はヨコナデする。淡褐色を呈し、微砂粒を含む胎土である。口径 26.4cm。

須恵器高杯 (5) は、完形の無蓋短脚高杯である。杯部は杯 C と同じ形態で、底部外面はへら切りのままである。脚部はラップ状に外反し、端部は上方へ突出し平坦面を有する。青灰色を呈し、微砂粒を含む胎土である。口径 9.5cm、高さ 5.2cm。

SD38 下層出土土器 (PL. 4-6 ~ 33、5-34 ~ 71、35、36)

調査区東側で検出した SD38 からは、多種多量の土器が出土した。これを溝の層位により下層、中層、上層の 3 層に分け、各々の層から出土した土器を以下に述べる。

SD38 下層より土師器 139 個体以上 (約 69%)、須恵器 63 個体以上 (約 25%) が出土した。

土師器 下層出土の土師器には、杯 C I、杯 C III、杯 G、杯 H、杯 X、鉢、皿 A、高杯、甕 A、甕 B、鍋 A などがある。このうち、杯、鉢、皿、高杯などの浅い供繕形態の器種においては胎土、色調に関して大概に 4 つの群に分類することができた。

まず、淡茶灰色を呈し、やや軟質で、小礫を少し含み、密な胎土のものを I 群、茶褐色系を呈し、微砂粒を含み、硬質なものを II 群、茶褐色系を呈し、微砂粒を多く含む粗い

とやや外反する口縁部からなり、口縁端部は丸く終る。体部外面は縦方向のハケメを施した後、体部下半のみをへらケズりする。体部外面中央よりやや上に 1 条の凹線をめぐらす。体部内面はハケによる調整を行い、口縁部内外面ともヨコナデを施す。体部と口縁部との内面境には、明瞭な稜線が残る。淡茶灰色を呈し、比較的堅緻な胎土である。口径 13.4cm、高さ 14.1cm。4 は口縁部と体部上半部だけ

土師器		個体数	比率 (%)			
食器	杯 C { I III	16	24	11.5 } 17.3		
		8			5.8	
	杯 X { I III	4	11	2.9 } 7.9		
		7			5	
	杯 G	1	62	0.7 } 44.6		
	杯 H	1			0.7	
	皿 A	4			2.9	
	盤 A	1			0.7	
	鉢	6			4.3	
	高杯	14			10.1	
煮炊具	甕 A { I II	23			71	16.5 } 51.1
		48				
	甕 B	4			77	2.9 } 55.4
	鍋 A	2				
計	139		100.0			

須恵器		個体数	比率 (%)				
食器	杯 G { 身 蓋	9	4	14.3 } 6.3			
		4			6.3		
	杯 H { 身 蓋	12	13	19 } 20.6			
		13			20.6		
	椀	1	44	1.6 } 69.8			
	杯 B	1			1.6		
	高杯 { I II III	1			1	1.6 } 1.6	
		1					1.6
		2					3.2
	貯蔵器	壺 A			7	1	11.1 } 30.2
壺 C		1			1.6		
■		6			9.5		
平瓶		2			3.2		
甕		3			4.8		
計	63		100.0				

	土師器	須恵器	計
食器	62 (58.5) (44.6)	44 (41.5) (69.8)	106 (52.5)
貯蔵器	0	19 (100.0) (30.2)	19 (9.4)
煮炊具	77 (100.0) (55.4)	0	77 (38.1)
計	139 (68.8)	63 (31.2)	202 (100.00)

() 内はパーセント

Tab. 2 SD38 下層出土土器の構成

胎土のものをⅢ群、赤褐色を呈し、緻密な胎土のものをⅣ群に分ける。今回出土の土器群においてはⅠ群、Ⅱ群に属するものが圧倒的に多く、Ⅲ群とⅣ群は少量である。これに対し、甕や鍋類の煮沸形態の器種は、その胎土や色調から、淡褐色ないし淡茶灰色を呈し砂粒を含む硬質なもの、茶褐色ないし赤褐色を呈し、砂粒を多く含む軟質なもの2種類に分けられる。ここでは前者に属するものが圧倒的に多い。

杯 C I (12 ~ 15) は、やや丸い底と内彎気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部は内方に傾斜する面をもつ。内面は螺線と放射の暗文をつけ、外面は底部および口縁部下半をヘラケズリし、口縁部上半にヨコナデの後ヘラミガキを施している。Ⅰ群およびⅡ群に属する。口径 14.4cm ~ 15.8cm、高さ 5.7cm 前後。

杯 C III (10・11) は、杯 C I と同じ手法を施すものであるが、器面の保存状態が悪いため、

口縁部外面のヘラミガキが施されているかどうかは不明である。I 群およびII群に属する。
口径 11.0cm ~ 11.8cm。

杯 G(6) は、底部外面未調整で、内面と口縁部をヨコナデしたものである。口縁端部は丸く終る。色調、胎土は I 群に近いが、小礫を含まない。口径 9.4cm。

杯 H(7) は、器形は杯 G と同じであるが、底部外面を不定方向にヘラケズリする。色調、胎土は杯 G に類似する^{註2}。

杯 X (8・9・16・17) は、内面には暗文がなく、底部外面に不定方向のヘラケズリを施すもの(8・9・17)と、内面および口縁部をヨコナデし、器壁の薄いもの(16)とがある。前者は淡褐色の硬い胎土で、後者は淡灰褐色の微砂粒を含む粗い胎土である。

鉢(18) は、深い器形で口縁端部は内方に傾斜する面をもつ。内面は放射暗文を配した後、内面上半部のみ斜放射暗文をつける。口縁部外面は丁寧にヘラミガキし、色調と胎土はIV群に属する。口径 23.4cm。

皿 A(19・20) は、やや深い器形のもの^と浅いものがある。前者は、内面に螺線と放射の暗文をつける。底部外面はヘラケズリし、口縁部外面のヘラミガキは不明である。口径 24.6cm。後者は口縁端部がやや内側に肥厚する。内面は螺線と放射の暗文をつけ、底部外面はヘラケズリし、口縁部外面はやや粗いヘラミガキを施す。前者、後者ともII群に属する。口径 26.6cm。

高杯(21~24) は、円筒状の脚部をもつ高杯で、杯部内面には螺線と放射の暗文をつけ、口縁部内外面はヨコナデで仕上げる。杯部底部外面には、指頭痕が認められるが、脚部との接合時の成形と思われる。脚部外面は丁寧にナデを施し、内面にしぼり目が残る。裾は布をあて指先で押さえた痕跡をとどめる。色調と胎土は、21がIII群、22がII群、23・24がI群に属する。口径 15.8cm ~ 16.4cm。

甕 A(25~30) は、口径 12cm ~ 15cm までの小形のもの(25~27)と口径 19cm ~ 20cm の大形のもの(28~30)とがある。小形のもの、やや外反する口縁部と肩の張りが弱く長めの体部のもの(25・27)が多い。体部の調整は体部外面に縦方向のハケメ、外面下半にヘラケズリを加え、内面は横方向のハケメをもつもの(27)と、そのハケメにナデを加えるもの(25)がある。一般に、砂粒を含み、淡褐色ないし淡茶灰色を呈する焼成の良いもので、近江、山城系の甕^{註3}と呼ばれているものである。26は体部内面を縦方向にヘラケズリする甕で、暗褐色で砂粒を多く含む胎土である。河内系の甕^{註4}と呼ばれるものである。大形のもの、やや強く外反する口縁部となだらかな肩部をもつ体部とからなり、口縁端

部は内方に傾斜する面をもつもの(28・29)が多い。体部内外面をハケで調整するもの(28・29)やハケメの後ナデを加えるもの(30)がある。前者は淡褐色を呈し、後者は暗褐色で砂粒を含むものである。

甕B(31)は、口縁部と肩部の破片で、把手がつくと考えられる。調整・色調・胎土は25・27と同じである。口径20.4cm。

鍋A(32・33)は、それぞれ形態・調整が異なる。32はやや丸い底から緩やかに立ち上がる体部と、外反して弧をえがく口縁部からなり、口縁端部は上方に突出する。体部の調整は、内外面ともハケメを行う。淡赤褐色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土の土器である。口径29.2cm。33は、やや平たい底から緩やかに立ち上がる体部と、大きく外側に開く口縁部からなり、口縁端部は外方に傾斜する面をもつ。体部の調整は、内外面ともハケ目を施した後、外面下半にヘラケズリを加えるもので、色調、胎土とも、25・27と同じである。口径34.0cm、高さ14.8cm。

須恵器 下層出土の須恵器には、杯G、杯H、杯G蓋、杯H蓋、椀、杯B、高杯、壺C、■、壺、甕などがある。

これらの須恵器は、色調、胎土などから次のように識別を行った。青灰色ないし灰白色を呈し、3～5mm前後の礫を少し含み密で硬質なものをI群。青灰色ないし淡灰色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土で硬質なものをII群。青灰色を呈し、緻密な胎土で硬質なものをIII群とする。I群の中には黒色粒子を含むものがあるが、II群の中に多くみられる。

杯G(52～56)は、平たい底部と外側に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部は外反気味である。内面および口縁内外面をロクロナデし、底部外面はヘラ切り痕をとどめる。II群に属する。口径9.6cm～11.0cm、高さ3.1cm～4.1cm。

杯H(46～51)は、蓋を受けるための立ち上がりをもつ杯である。立ち上がりは、かなり内傾し低く、矮小化している。底部外面は、ロクロから切り離す際のヘラキリ痕をとどめ、調整を加えない。I群に属するものが多い。口径8.6cm～11.8cm、高さ2.8cm～3.3cm。

杯G蓋(41～45)は、内面にかえりもち、宝珠つまみをつける蓋である。かえりの先端は、口縁端部よりやや下方にのびる。天井部内面および口縁部内面およびロクロナデを施し、天井部外面は、ロクロヘラキリの後、ナデを行う。43がI群に属するだけで、その他はII群である。復原口径9cm前後、高さ3.5cm前後である。

杯H蓋(34～40)は、やや平らな天井部と垂直に下がる口縁上半部とからなり、口縁端部は丸く終る。天井部内面および口縁部内外面はロクロナデを施し、天井部外面はロク

ロヘラキリ痕をとどめる。色調・胎土はⅠ群に属するものが多い。口径9.4cm～11.5cm、高さ3.1cm～3.5cm。

椀(57)は、深い器形で、平たい底と垂直に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部はやや外反して丸く終る。底部内面および口縁部内外面はロクロナデを行い、底部外面はロクロによるヘラケズリを施す。暗青灰色を呈し砂粒を含むが緻密な胎土である。口径10.2cm、高さ6.1cm。

杯B(58)は破片で1点だけ出土した。杯部は、平たい底と内弯気味に上方へのびる口縁部からなる。高台は比較的高く、底部端よりかなり中央に寄ったところにハの字形に付される。青灰色を呈し、黒色粒子を含む堅緻な土器で、Ⅲ群に属する。復原口径13.6cm、高さ4.2cm。

高杯(59～62)は、それぞれ形態が異なる。59は短脚高杯の脚部だけの破片で、脚部中央に沈線を2条めぐらす。脚部内面にはしぼり目がみられる。60は口縁部がやや外側に開く杯部をもつ。短い脚部はハの字状を呈し、裾部で大きく外側に広がる。61はやや内弯して立ち上がる口縁部の破片である。端部は丸く終る。62は口径26.9cm、高さ5.5cmの非常に大きな杯部をもつ。杯部は平らな底部から緩やかに斜め上方に立ち上がり、口縁部が屈曲して斜め上方へのびる。口縁端部は内方に傾斜する面をもつ。脚部は破損しているために不明であるが、杯部の底部中央にその痕跡をとどめる。これは摩滅しており、脚部破損後も使用されたと考えられる。杯部の底部外面はロクロによるヘラケズリ調整を行い、杯部底部内面および口縁部外面をロクロナデにより仕上げる。暗青灰色で砂粒を多く含み、粗く硬質な胎土である。

壺C(63)は、1/3を残す口縁部と体部の破片である。短い口縁部は直立気味にのび、端部は丸く終り、やや肩の張る体部からなる。体部下半はロクロヘラケズリが施され、口縁部内外面および体部内面はロクロナデにより仕上げる。Ⅲ群に属する。

■(64～66)は、各々体部だけの破片であるが、その形状より小形のもの(64)とやや大形のもの(65・66)とに分かれる。前者は、やや肩の張る球形に近い体部で、体部外面には文様帯および沈線はない。Ⅱ群に属する。後者は肩の張る体部からなるが、文様帯、沈線がないもの(65)と、肩部および体部中央に2条の沈線がめぐり、刺突文によって文様帯を構成しているもの(66)がある。65はⅡ群、66はⅠ群に属する。

壺(67～71)は口縁部だけの破片が多い。口縁部はいずれも短いもので、外側にまっすぐへのびるもの(67・70)、やや内弯気味になって直立するもの(68)、外反した後、内弯

して直立するもの(69)とがある。口縁端部は各々内方に傾斜する面をもつ。71は肩の張る体部だけの大きな破片である。体部外面はカキメ調整し、内面はロクロナデを施す。(67・70・71)がI群に、(68・69)がII群に属する。

SD38 中層出土土器 (PL. 6-72 ~ 105、7-106 ~ 130、36、37)

SD38 中層より、土師器81個体以上(約58%)、須恵器59個体以上(約35%)が出土した。下層出土土器より須恵器の比率が高い。

土師器 中層出土の土師器は、杯C I・C II・C III、杯A I、杯X I・X III、皿A、皿B、高杯、鉢、甕A、甕Bなどがある。

杯C I (80 ~ 88) は、口縁端部がやや外反気味になり、内方に傾斜する面をもつものが多数を占め、87のように口縁部が直立し、端部を丸くおさめるものは少量である。内面には螺線や放射の暗文をつけるものが多いが、放射文に斜放射文を付け加えるものや、二段放射文を施すものがある。外面は、底部および口縁部下半をヘラケズリし、口縁部上半に粗いヘラミガキを施す。I群とII群のものがそれぞれ半数を占める。口径14.2cm ~ 17.4cm、高さ5.5cm前後。

杯C II (77 ~ 79) は下層では確認しなかったもので、器形は杯C Iと同じである。外面の調整は、a0手法、b0手法、b1手法などがあり、異なる手法をもつ。I群とII群に属する。口径12.6cm ~ 13.0cm、高さ4cm前後。

杯C III (72 ~ 76) は、口縁部が直立して、口縁端部が丸く終るものである。外面の調整はa0手法、b0手法が多数を占め、ヘラミガキを加えるものもある。I群とII群に属する。口径10.0cm ~ 10.8cm、高さ3.5cm前後。

杯A I (89) は下層では確認しなかった器形でほぼ完形である。平たい底部と底部からやや外側に開く口縁部からなり、口縁端部はやや内側に肥厚する。内面は二段の放射文と見込や口縁部中央に螺線文を加える。底部外面は密にヘラケズリする。口縁部外面はヘラケズリの後、密にヘラミガキを加える。色調、胎土はIV群に属する。口径18.6cm、高さ6.1cm。

皿A(90 ~ 93) はやや深い器形のもの(90 ~ 92、口径18.6cm ~ 19.6cm、高さ3.2cm前後)と口径の大きいもの(93、口径23.0cm、高さ2.8cm)とがある。前者は口縁部が内弯して直立し、端部が内面に傾斜する面をもつもの(90・91)と、端部が外方に傾斜する面をもつもの(92)がある。後者は口縁部が底部から斜め上方へのび、口縁端部は上方に突出して外方に傾斜する面をもつ。両者とも内面には螺線と放射の暗文を施し、底部外面はヘラケズリする。口縁部外面はヨコナデをするものとヘラミガキを加えるものがある。色

土師器		個体数	比率 (%)
食器	杯 C	I 13	16.1
		II 9	11.1
		III 9	11.1
	杯 X	I 1	1.2
		III 2	2.5
	杯 A	I 3	3.7
		皿 A 4	4.9
		皿 B 1	1.2
		高杯 8	9.9
		計 50	61.7
煮炊具	甕 A	I 3	3.7
		II 23	28.4
	甌 5	6.2	
計	81	100.0	

須恵器		個体数	比率 (%)
食器	杯 G	身 20	33.8
		蓋 10	16.9
	杯 H	身 9	15.3
		蓋 6	10.2
	杯 B	盤 2	3.4
		高杯 1	1.7
		高杯 2	3.4
貯蔵器	壺 2	3.4	
	甕 7	11.9	
計	59	100.0	

	土師器	須恵器	計
食器	50 (50.0) (61.7)	50 (50.0) (84.7)	100 (71.5)
貯蔵器	0	9 (100.0) (15.3)	9 (6.4)
煮炊具	31 (100.0) (38.3)	0	31 (22.1)
計	81 (57.9)	59 (42.1)	140 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 3 SD38 中層出土土器の構成

脚部外面は丁寧なナデを施し、内面はしぼり目をとどめる。色調、胎土は I 群、II 群を含む。復原口径 17.2cm、高さ 11cm 前後。

甌 (98～100) は、それぞれ口縁部の破片である。口縁端部はやや外反し、内方に傾斜する面をもつ円筒形に近い形態で、把手がつくと考えられる。その形態より小形のもの (98・99) と大形のもの (100) とに分かれる。前者は口縁部内外面をヨコナデし、体部内面はナデ、体部外面はハケメを施した後に下半をヘラケズリする。後者は、前者と同様な調整が認められるが、体部内面はナデではなくハケメが認められる。色調、胎土は I 群に属する。復原口径 14.6cm～20cm。

調、胎土は II 群に属する。

皿 B^{註5} (97) は、底部および高台の破片である。高台は非常に高く、ハの字形に付される。色調、胎土は I 群に属する。

高杯 (94～96) は、各々破片である。下層出土の高杯と比べ杯部はやや浅く、脚部も低くなり裾は外側へ開く。杯部内面は放射文と螺線文を施し、口縁部内外面はヨコナデする。

甕A(101～104)は、口径13cm前後のもの(101・102)と口径24cm前後のもの(103・104)とに分けられる。101は体部内面にハケメを施し、102では体部内面に縦方向のヘラケズリを施し、河内系の甕の特徴をもつ。103、104はいずれも口縁部の破片であり、淡褐色を呈し、砂粒を含む胎土である。

甕B(105)は、口縁部および体部上半のやや大形の器形の破片である。口縁部はやや内弯して立ち上がり、口縁端部は丸く終る。把手がつくと考えられ、近江、山城系の甕の特徴をもつ。

須恵器 杯G、杯H、杯G蓋、杯H蓋、杯B、皿、高杯、甕、壺片などがある。

杯G(116～120)は、下層出土の杯Gと調整、形態は共通するが、117のように斜め上方に開く口縁部をもつものもある。Ⅱ類に属するものが多い。口径10.0cm～11.7cm、高さ3.4cm～4.3cm。杯H(114・115)も下層出土の杯Hと共通する調整、形態をもつ。Ⅰ群に属する。口径10.2cm～10.6cm、高さ3.4cm。

杯G蓋(108～113)は、形態、調整の異なるものがある。下層出土の杯G蓋と共通する特徴をもつもの(108・110・112)と、かえりの先端が口縁端部より下方へ張り出さないもの(109・111・113)とがある。前者はⅠ群に、後者はⅡ群に属するものが多い。109は天井部外面にロクロナデを施したもので、色調、胎土もⅢ群に属し、黒色粒子を含む。口径10.2cm～12.0cm、高さ3.5cm前後。杯H蓋(106・107)は下層出土の杯H蓋と共通する特徴をもつ破片である。

杯B(121)は、やや高い高台をもつ破片である。

皿A(122)は、底部からやや内湾気味に立ち上がり直立する口縁部からなり、口縁端部は内方に傾斜する面をもつ。復原口径21.8cm。高杯(123)は、下層出土の高杯(62)と、形態、調整は共通し、脚部は杯部接合部より外れている。

甕(124～130)は、口縁部の破片が多い。口縁部の特徴から、直立して内湾気味に外方に開き、口縁端部が平坦面をもつもの(124)、斜め上方に開くもの(125～128)、大きく外反するもの(129)とがある。体部は、平行タタキの上に、横方向のカキメを施すもの(124・125)、縦方向のカキメを施すもの(126)があり、内面には同心円状の当板の痕跡を残している。色調、胎土はⅡ類に属するものが多い。口径16.0cm～28.0cm。

SD38 上層出土土器 (PL. 7-131～137、PL. 8-138～159、37、38)

上層から、土師器37個体以上(約31%)、須恵器81個体以上(約69%)が出土した。土器の出土数は、下層、中層と比べ少ないが、須恵器の出土数が、全体の半分以上を占める。

土師器		個体数	比率 (%)	
食器	杯 C { I III	1	2.7	8.1
		2	5.4	
	杯 A I 皿 A 鉢	1	2.7	21.6
		2	5.4	
	2	5.4		
	2	5.4		
煮炊具	甕 A { I II	5	13.5	70.3
		21	56.8	
	甕 B 鍋	2	5.4	78.4
		1	2.7	
計		37	100.0	

須恵器		個体数	比率 (%)	
食器	杯 G { 身 蓋	14	17.3	88.9
		8	9.9	
	杯 H { 身 蓋	3	3.7	
		2	2.5	
	杯 A	34	41.9	
	杯 B { 身 蓋	5	6.2	
6		7.4		
貯蔵器	壺 A	1	1.2	
	壺	2	2.5	
	甕	6	7.4	
計		81	100.0	

	土師器	須恵器	計
食器	8 (10.0) (21.6)	72 (90.0) (88.9)	80 (67.8)
貯蔵器	0	9 (100.0) (11.1)	9 (7.6)
煮炊具	29 (100.0) (78.4)	0	29 (24.6)
計	37 (31.4)	81 (68.6)	118 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 4 SD38 上層出土土器の構成

須恵器 杯 G (149・143)、杯 A IV (150～153)、杯 B (154～156)、杯 G 蓋 (138・139)、杯 B 蓋 (140・141)、長頸壺 (157)、甕 (158・159) などがある。杯 G は、下層、中層出土の杯 G と形態、調整は共通する。II 群のものが多く、口径 9.2cm～10.8cm、高さ 3.6cm～4.0cm。この杯 G と形態、調整が同じであるが、蓋を伴わず、やや器形の大きな杯 A IV がある。II 群に属するものが多く、口径 12.6～13.8cm、高さ 3.7cm～4.2cm。杯 B は、平たい底部とやや外側に開く口縁部からなり、端部は丸く終る。高台はやや外側に開き、底部外面はへら切り痕をとどめる。II 群に属する。156 は口径 17.2cm、高さ 4.5cm。杯 G 蓋は、かえりが縮小したものである。杯 B 蓋も形態、調整は共通するが、口径は大きく、高さは低い。つまみは扁平な宝珠である。長頸壺は、頸部中央に 2 条の沈線がめぐる。甕は小形と大形のものとがある。

土師器 杯 C I (133)、杯 C III (131・132)、杯 A I 片、皿 A 片、甕 (134～137) などがある。杯 C III は a 手法の土器で I 群に属する。口径 10.0cm～11.4cm、高さ 3.7cm。甕は、近江、山城系の甕の特徴をもつものが多いが、136 は外反する口縁部からなり異なる様子を呈する。

SD37 出土土器 (PL. 8-160 ~ 166)

土器の出土数は少なく、20個ほどで、土師器、須恵器の出土比率は1:3である。土師器杯C、皿A、甕などがある。皿A(160・161)は、口縁端部が丸く終るもの(160)と、内側に肥厚するもの(161)とがあり、いずれも内面に放射暗文が施される。口縁部はヨコナデ、底部外面は指先で押さえたままである。甕は、口縁部が外反する小形のものである。須恵器は、杯G、杯G蓋、杯A、鉢、甕片などがある。杯G(164・165)はⅡ群に属し、口径10.0cm～10.8cm、高さ3.3cm。杯G蓋(163)は、やや高い宝珠形のつまみがつく小形のものである。口径10.2cm、高さ2.7cm。鉢(166)は外上方へのびる体部と厚い円板状の底部とからなる。体部上半に沈線が2条、下半に1条めぐる。底部外面には、底を貫通しない小孔を多く穿る。Ⅱ群に属する。

SK34、SK35 出土土器 (PL. 8-167 ~ 175、38)

この二つの土壌からは土器の出土は非常に少ない。SK34より土師器杯CⅢ(167)、甗(168)、須恵器杯B(171)、杯B蓋(169・170)、甕(172)などが出土する。SK35より土師器皿A(173)、須恵器杯AⅣ(175)、杯B蓋(174)などである。

土師器 杯CⅢは、口縁部外面にヨコナデをし、底部は指先で押さえた痕跡をとどめる。内面はやや粗い放射暗文を施す。ⅢAは、口縁端部は丸く終り、口縁部外面をヨコナデ、底部外面に指頭痕をとどめる。甗は、体部内面をナデ仕上げした小形のものである。

須恵器 杯AⅣは、ほぼ直立する口縁をもつ浅い器形である。口径13.0cm、高さ3.2cm。杯Bは、底部だけの破片で、短い台形を呈する高台を有する。杯B蓋は、天井部に扁平な宝珠つまみがつくかえりのないものである。口径14.6cm～16.4cm、高さ3.2cm～4.2cm。甕は口縁端部がやや内方に傾斜する面をもつ口縁部の破片である。

ii 平安時代の土器

調査区において確認した遺構は、平安時代に属するものがいちばん多く、そこから出土した土器群も全体の約7割を占める。

SK23 出土土器 (PL. 9-176 ~ 211、39)

SK23より土師器194個体以上(約90%)、黒色土器2個体以上(1%)、須恵器13個体以上(6%)、緑釉陶器(約3%)などが出土し、土師器が圧倒的多数を占める。

土師器 杯A、杯B、皿AⅠ・AⅡ、皿C、高杯片、甕などがある。これらの大部分は、杯、皿などの浅い器種が占め、微砂粒を含むやや粗い胎土である。そのうち、茶灰色ない

土師器		個体数	比率 (%)	
食器	杯 A	66	34	
	杯 B	1	0.5	
	皿 A { I II	2	72	36.2
		70		
	皿 C	8	4.1	
高杯	1	0.5		
煮炊具	甕 A { I II	41	21.1	
		5	2.6	
計		194	100.0	

し茶褐色を呈するもの（Ⅰ群）が多数を占め、淡褐色を呈するもの（Ⅱ群）がこれに次ぐ。前者は、焼成もよく、堅緻なものが多く、後者はやや軟質である。

杯 A(176～187) は平らな底部と底部から斜め上方に開

	土師器	黒色土器	緑釉陶器	須恵器	計
食器	148(95.0) (76.3)	1(0.6) (50.0)	6(3.8) (100.0)	1(0.6) (7.7)	156 (72.5)
貯蔵器	0	0	0	12(100.0) (92.3)	12 (5.6)
煮炊具	46(97.9) (23.7)	1(2.1) (50.0)	0	0	47 (21.9)
計	194 (90.3)	2 (0.9)	13 (6.0)	6 (2.8)	215 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 5 SK23 出土土器の構成

く口縁部からなり、66 個体ある。口縁端部の形態は、口縁上部がやや外反し、端部がわずかに内側へ巻き込み上方へ突出するものと、口縁上部の外反はなく、端部がわずかに巻き込み丸く終るものがある。前者が多数を占める。外面の調整手法は、外面全体にヘラケズリを行うもの（c 手法、178・179、183～187）と、口縁部外面上部にヨコナデし、それ以下には、成形時の指頭痕をとどめるもの（e 手法、176・177・180～182）とがある。c 手法を施す杯の中で、口縁上部が外反するために、その部分だけヘラケズリのおよんでいないものもある（184～187）。c 手法と e 手法の比率は 41:59 である。口径 12.6cm～15.8cm、高さ 2.8cm～3.8cm。

杯 B(188) は、外側に開く口縁部と低い高台をつける底部からなり、口縁端部はやや上方に突出する。c 手法をもちいる。Ⅰ群に属する。口径 19.0cm、高さ 4.8cm。

皿 A(189～200) は器形から、皿 A I (200、口径 19.2cm、高さ 2.1cm) と A II (189～

199、口径 13.8cm～16.0cm、高さ 1.4cm～2.3cm) とがある。A I は、口縁端部が内側へ肥厚し平坦面をもつ c 手法の皿である。A II は口縁端部がやや上方に突出するもの (190～193、195～198) と、端部が丸く終るもの (189、194)、端部が内側へやや肥厚し、平坦面をもつ c 手法のもの (199) とがある。前者は c 手法と e 手法のものでその比率は 39:61 である。後者は e 手法である。

皿 C (201・202) は、小形で手づくねで作られたやや厚手のもので、端部は丸く終る。口径 8.0cm～9.8cm、高さ 1.4cm。

甕 (203～208) はやや丸みをおびた体部に外反する口縁からなる。口縁端部は、端部を内側にやや肥厚し外方に傾斜する面をもつものと、端部が上方に突出するもの (206) とがある。^{註6}前者が大部分を占める。口縁内外面はヨコナデを施し、体部外面は無文で、粗い平行線、綾杉文などの叩き板で成形した痕跡をとどめる。体部内面には、川原石のようなものであて板に代用した痕跡があり、そのうちナデによりその痕跡を消去したものもある。口径 20.0cm～22.8cm。

黒色土器 杯片、甕などが各々 1 個体ずつ出土しただけである。甕 (209) は、丸い体部に外反する短い口縁部からなり、端部は丸く終る。口縁部内外面はヨコナデを行い、体部内外面には粗いヘラミガキを施す。口径 18.8cm。

須恵器 須恵器壺 E (210・211)、杯片など少量出土するのみである。壺 E は、口縁部を欠損する小形の筒状を呈する体部からなる。全体にロクロ挽きの痕跡をとどめ、底部外面には明瞭に糸切り痕をとどめる。

SK21 出土土器 (PL. 10-212～242、39)

SK21 より、土師器 190 個体以上 (約 86%)、黒色土器 6 個体以上 (約 3%)、須恵器 19 個体以上 (約 8%)、緑釉陶器片、灰釉陶器片などが出土する。この遺構も発掘区内で約半分ほど確認しただけで、遺構全体の出土数ではないが、その内容はうかがえられよう。

土師器 杯 A (212～219)、杯 B I (220)、皿 A (221～223)、皿 B (224)、甕 (225・226)、高杯片などがある。杯 A には、c 手法 (218) と e 手法 (212～217・219) とがあり、形態の特徴は SK23 と共通し、色調、胎土も I 群に属するものが多い。しかし、外面の調整をみると、c、e 手法の比率は 16:84 で、e 手法が多数を占める。口径 13.2cm～14.6cm、高さ 2.8cm～3.4cm。杯 B I は c 手法で、やや大形である。口径 22.2cm、高さ 6.7cm。皿 A も、杯 A 同様 c、e 手法の比は、26:74 で同じような結果を示す。I 群に属するものが多い。口径 14.0cm～16.2cm、高さ 1.6cm～2.5cm。皿 B は平らな底部と短い口縁部か

土師器		個体数	比率 (%)	須恵器		個体数	比率 (%)		
食器	杯 A	84	} 131	44.1	食器	杯 B	3	} 5	15.8
	杯 B	2		1.1		蓋 A	2		10.5
	皿 A	42		22.1	貯蔵器	壺 A	5	} 14	26.3
	皿 B	1		0.5		壺 E	7		36.9
	高杯	2		1.1		鉢	2		10.5
煮炊具	甕	59	31.1	計	19	100.0			
計		190	100.0						

	土師器	黒色土器	緑釉陶器	灰釉陶器	須恵器	計
食器	131 (89.7) (68.9)	3 (2.1) (50.0)	6 (4.1) (100.0)	1 (0.7) (50.0)	5 (3.4) (26.3)	146 (65.5)
貯蔵器	0	0	0	1 (6.7) (50.0)	14 (93.3) (73.7)	15 (6.7)
煮炊具	59 (95.2) (31.1)	3 (4.8) (50.0)	0	0	0	62 (27.8)
計	190 (85.2)	6 (2.7)	6 (2.7)	2 (0.9)	19 (8.5)	223 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 6 SK21 出土土器の構成

らなり、口縁端部はやや外反して丸く終る。高台は高く、ハの字状に開く。e手法である。淡橙色を呈し、密な胎土である。口径 15.7cm。高さ 3.3cm。

甕は、SK23 出土の甕の場合と顕著な違いはないが、体部内外面に荒いハケメを加えるものもある。口径 22.0cm ~ 23.2cm。

黒色土器 杯 A、甕などがある。

杯 A (227) は、平らな底部と内湾気味に外側に開く口縁部からなり、端部は丸く終る。外面は口縁端部を除く外面にヘラケズリを施し、内面は横方向に丁寧なヘラミガキを行う。口縁部内面は、ほぼ 4 等分する位置に渦状暗文が認められる。黒色土器 A である。口径 19.9cm、高さ 5.2cm。

甕 (228・229) には小形のもの (228、口径 11.8cm) と大形のもの (229、口径 15.6cm、高さ 14.7cm) とがある。前者は、口縁端部が丸く終り、後者は、口縁部が外反した後、上半部がやや内湾し、端部は少し内側へ肥厚する。調整は、ともに口縁部内外面をヨコナデ、体部外面はヘラケズリを行う。内外面ともヘラミガキを粗く施す。

緑釉陶器 杯(230)の口縁部だけを残す破片である。内湾気味に立ち上がる口縁部で、口縁端部は、少し外反して丸く終る。口縁部内面はヘラミガキを行う。胎土は、灰白色を呈し、いわゆる軟陶と呼ばれるもので、淡緑色の釉が施される。口径13.6cm。

灰釉陶器 皿^{註7}D、瓶Cなどがある。皿D(231)は口縁部の上半部内外面に段をつけるいわゆる段皿と呼ばれるものである。口縁部外面下半はロクロによるヘラケズリをし、内面および口縁部外面上半部にロクロナデを行う。底部内面には三叉トチンの痕跡がみられる。胎土は灰白色を呈し、やや粗い胎土で、内面全面に施釉する。口径19.6cm。瓶C(232)は、体部と把手下端を残す破片である。体部外面には、把手下端より下側に並行する3本の沈線がめぐる。体部内外面はロクロナデを施す。灰白色を呈し、堅緻な胎土で、外面に淡緑色の釉を施す。

須恵器 杯B、蓋A、鉢D、壺C、壺Eなどがある。

杯B(235)は底部だけを残す破片である。高台は低い台形状を呈し、底部外面はヘラキリの痕跡をとどめる。

蓋A(233・234)は平坦な頂部に屈曲する縁部からなり、縁端部は外側に開いて丸く終る。つまみはつかない。頂部外面はヘラキリの後ナデを行い、縁部と内面はロクロナデを施す。青灰色を呈し、堅緻なものである。口径13.6cm～15.0cm、高さ1.9cm～2.1cm。

鉢D(242)は外反する短い口縁部とやや肩の張る体部とからなる。口縁端部は外方に傾斜する凹面をもち、端部上端がわずかに突出する。体部内外面はロクロナデで、口縁部内外面をヨコナデする。灰白色を呈する堅緻な胎土である。口径18.6cm。

壺C(236・238・239)は短い直立する口縁部と肩が張る体部とからなる。底部には、断面台形を呈する高台がつく。口縁部および体部内外面にロクロナデを行う。236は肩部に双耳をつけたもので、肩部に灰がかぶる。淡灰色を呈し、微砂粒を含むやや粗い胎土である。口径9.4cm～15.4cm。237は、体部下半を残す破片で壺Hと考えられる。

壺E(240・241)は完形で、口縁端部が上方に突出するものと外方に傾斜する面をもつものがある。底部外面はともに糸切り痕をとどめる。前者(240)は青灰色を呈し、砂粒を含む粗い胎土の土器であるのに対し、後者(241)は青灰色を呈する堅緻なものである。口径4.1cm～4.6cm、高さ10.5cm～11.0cm。

SK20 出土土器 (PL. 11-243～272、12-275～304、40、41)

SK20より、土師器483個体(約83%)、黒色土器7個体(約1%)、緑釉陶器29個体(5%)、灰釉陶器5個体(約1%)、須恵器57個体(約10%)が焼土とともに出土した。

土師器		個体数	比率 (%)
食器	杯 A	203	42.1
	杯 B	5	1
	皿 A	193	40
	皿 C	3	0.6
	高杯	5	1
計		409	84.7
煮炊具	甕	74	15.3
	計	483	100

須恵器		個体数	比率 (%)
食器	杯 B	2	3.5
	蓋 A	5	8.7
	皿 A	3	5.3
	高杯	1	1.8
計		11	19.3
貯蔵器	壺 A	3	5.3
	壺 E	38	66.6
	甕	2	3.5
	鉢	3	5.3
計		46	80.7
計		57	100.0

黒色土器		個体数	比率 (%)
食器	杯 A	2	28.6
	杯 B	1	14.2
計		3	42.8
煮炊具	甕	2	28.6
その他	硯	2	28.6
計		7	100.0

	土師器	黒色土器	緑釉陶器	灰釉陶器	須恵器	計
食器	409 (89.5) (84.7)	3 (0.7) (42.8)	29 (6.3) (100.0)	5 (1.1) (100.0)	11 (2.4) (19.3)	457 (78.7)
貯蔵器	0	0	0	0	46 (80.7)	46 (7.9)
煮炊具	74 (15.3)	2 (28.6)	0	0	0	76 (13.1)
その他	0	2 (28.6)	0	0	0	2 (0.3)
計	483 (83.1)	7 (1.2)	29 (5.0)	5 (0.9)	57 (9.8)	581 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 7 SK20 出土土器の構成

土師器 杯 A、杯 B、皿 A、皿 C 片、高杯片、甕などである。

杯 A (243 ~ 252) は SK23、SK21 出土杯 A と形態、特徴は共通し、I 群に属するものが多い。その中で、平らな底部と斜め上方に開く口縁部と、端部が外反して丸く終るもの (246) が

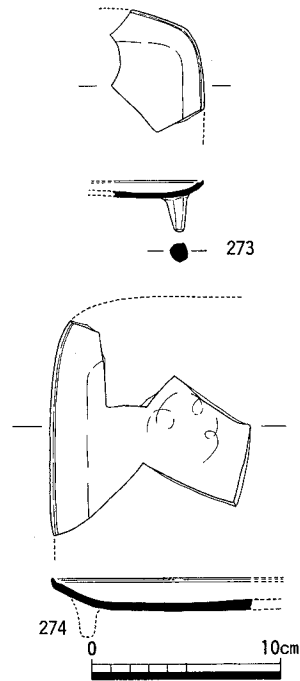
ある。これは色調、胎土も異なり、淡茶灰色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土である。調整はc手法(252)とe手法(243～251)とがあるが、その比率は7:93で、c手法の消滅を感じさせる。口径12.8cm～15.8cm、高さ2.5～3.0cm。

杯B I (253) はI群の色調、胎土に属するc手法の土器である。口径22.6cm、高さ5.2cm。皿A(254～259)もその形態、特徴は、SK23、SK21出土皿Aと共通する。調整は、c手法(257・259)、e手法(254～256・258)とがあり、その比率は3:97と杯A同様c手法がほとんど消滅する。259は口縁部が外反し、丸く終るものである。口径13.6cm～17.2cm、高さ1.4cm～2.1cm。

高杯(260)は、脚部上半を残す破片である。脚部と杯部の接合は、芯棒によるもので、脚部外面は丁寧にヘラケズリを行い、断面7角形を呈する。色調、胎土はI群に属する。

甕(261～267)も、SK23、SK21出土甕と共通する調整、特徴をもつ。口縁部はほとんどが外反するが、265のように内湾して端部がやや内側に肥厚するものもある。体部外面には、成形時の平行線および無文の叩き板の痕跡がみられ、ハケメを加えるもの(267)もある。また、内面に同心円文をとどめるもの(266)がある。口径20.6cm～23.4cm。

黒色土器 杯、甕、風字硯がある。



杯(268～270)はいずれも口縁部の破片である。口縁部外面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキを施す。内面は横方向の丁寧なヘラミガキを行い、渦状暗文を加える。268は、外面ヘラケズリを施すだけである。茶褐色を呈し、堅緻な胎土である。黒色土器A。口径15.0cm～20.2cm。

甕(271・272)は小形のもの(271、口径12.6cm)と大形のもの(272、口径17.6cm)とがある。いずれも黒色土器A。

風字硯(273・274)は、陸部だけの破片である。平らな底にやや外側に開く縁部からなり、硯面と外堤との境は不明瞭で、器壁は薄い。縁端部内側には浅い沈線をめぐらす。全面に丁寧なヘラミガキを施し、内外面とも鉛黒色を呈する。273にはヘラケズリした柱状を呈する脚部が残る。黒色土器B。

緑釉陶器 杯B、蓋がある。

杯B(275～283)は、平らな底部と内湾気味に外側に開く口

fig. 13 黒色土器硯(1:4)

縁部からなる。高台の形態により、杯 B a、杯 B b、杯 B c、杯 B d の 4 種類に分けられる。^{註 8}

杯 B a (277・279・280・283) は、283 がほぼ完形で、ほかは破片である。口縁端部はやや外反し、内面は丁寧なヘラミガキを施す。軟陶。283 は口径 16.8cm、高さ 4.0cm。杯 B b (276・281) は軟陶である。杯 B c (278) も破片で硬陶である。275、282 は口縁部だけの破片で、前者は口縁端部内側に沈線をめぐらした硬陶、後者は端部が外反し丸く終る軟陶である。

蓋 (292) は、平たい頂部と垂直に下方にのびる口縁部からなり、端部は内方に傾斜する面をもつ。灰白色を呈し、硬陶で、淡緑色の釉がかかる。口径 11.2cm。

灰釉陶器 杯 B、皿 B、皿 D がある。

杯 B (284～287) は、やや内湾する口縁部からなる高台のつくもので、口縁端部は外反する。底部外面および口縁部外面下半にロクロヘラケズリを施し、内面および口縁部外面上部にロクロナデを行う。高台は張り付け高台で、断面三角形を呈する。284 は淡灰色を呈し、粗い胎土で内面全面に施釉する。口径 14.0cm、高さ 4.8cm。285、286 は灰白色を呈し堅緻なもので、内面および口縁外面に施釉する。287 は、灰白色を呈し、堅緻な胎土で、口縁部内外面に施釉する。口径 19.0cm、高さ 5.0cm。

皿 D (288) は、底部と口縁部の接するところに内側にだけ段をつけるものである。高台は三角形を呈する。灰白色を呈し、極めて緻密な胎土で、内面全面に施釉する。底部外面に「鶴室」の墨書がある。口径 14.6cm、高さ 2.8cm。

289、290 は底部の破片で、台形を呈する高台がつく。灰白色を呈する緻密な胎土である。289 の底部外面にも墨書がみられるが、破片のため不明である。

須恵器 杯 B 片、蓋、高杯、壺片、壺 E、甕、鉢などがある。壺 E が 38 個体で須恵器の約 70% を占める。

蓋 (291・293) は縁部の破片であるが異なる形態、調整をもつ。291 は縁部が直立し、端部は丸く終るもので、いわゆる蓋 B である。口径 11.2cm。293 は平らな頂部に屈曲する縁部からなる。頂部外面はヘラキリの痕跡をとどめ、縁部外面と内面はロクロナデを施す。口径 14.3cm、高さ 2.2cm。

高杯 (294) は、杯部だけを残す破片で、平らな底部に内湾気味に開き、上半部が外反する口縁からなる。口縁端部は上方に突出し、下方にやや肥厚する。底部外面はロクロケズリを行い、口縁部内外面および底部内面にロクロナデを行う。淡灰色で微砂粒を含む硬質

な胎土である。底部内面はよく摩滅し、墨の付着が認められるため、硯に転用したものと考えられる。口径 16.2cm。

壺 E(295 ~ 299) は小形のものやや大形のものがある。口縁端部が上方に突出し、垂直な端面をもつものが多い。299 は完形で口径 4.8cm、高さ 11.8cm である。

甕 (300) は平行線の叩き板で成形する体部に、外反する短い口縁部からなる。口縁端部は、端部右端が外側にのび、凹状の端面をなす。口径 15.6cm。

鉢 D(301 ~ 303) は、肩がやや張る体部と短く外反する口縁部からなり、口縁端部は外方に傾斜する面をもつ。口径 21.8cm ~ 22.5cm。

304 は体部だけの破片で、口縁部が欠損しているが、盤と考えられる器形である。体部内外面にロクロナデを施す。

SD13 出土土器 (PL. 13-305 ~ 329、14-330 ~ 361、41、42)

調査区東南部で一部分を検出した東西方向の溝で、この溝の第 4 層から比較的保存状態の良い多量の土器が出土した。土師器 318 個体以上 (約 81%)、黒色土器 9 個体以上 (約 2%)、緑釉陶器 13 個体以上 (約 3%)、灰釉陶器 15 個体以上 (約 4%)、須恵器 40 個体以上 (約 10%) がある。

土師器		個体数	比率 (%)	須恵器		個体数	比率 (%)			
食器	杯 A	177	} 71.1	55.7	食器	杯 B	2	} 4	5	} 10
	杯 B	6		1.9		蓋 A	2		5	
	皿 A	40		12.6	貯蔵器	壺 A	2	} 36	5	} 90
	高杯	3		0.9		壺 E	30		75	
煮炊具	甕	92	28.9	鉢	4	10				
計		318	100.0	計		40	100.0			

	土師器	黒色土器	緑釉陶器	灰釉陶器	須恵器	計
食器	226(84.6) (71.1)	9(3.4) (100.0)	13(4.9) (100.0)	15(5.6) (100.0)	4(1.5) (10.0)	267 (67.6)
貯蔵器	0	0	0	0	36(100.0) (90.0)	36 (9.1)
煮炊具	92(100.0) (28.9)	0	0	0	0	92 (23.3)
計	318 (80.5)	9 (2.3)	13 (3.3)	15 (3.8)	40 (10.1)	395 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 8 SD13 第 4 層出土土器の構成

土師器 杯A、杯B、皿A、高杯、甕などがある。

杯A(305～313、315)は、SK20出土の杯Aと共通するものがあるほか、器壁が薄く、口縁部上半の外反が顕著になるものがある。これは新しい要素をもつ土器と考えられる。調整は、わずかなc手法のものを除いて、すべてe手法を行う。色調、胎土はI群に属するものが多い。口径13.0cm～15.9cm、高さ2.6cm～3.3cm。杯B(314)は、口縁部下半および底部の破片で、断面三角形を呈する低い高台がつく。c手法である。皿A(316～322)も、杯A同様に器壁が薄く、口縁部の外反が顕著なもの含まれ、口径、高さも小形化する傾向がある。調整はすべてe手法で、c手法のものは含まない。色調、胎土はI群に属するものが多い。口径13.0cm～16.0cm、高さ1.3cm～2.1cm。甕(323～333)は、SK20出土の甕と共通する形態、成形をもつ。口径20.2cm～23.8cm。

黒色土器(334～336) すべて杯の破片である。黒色土器Aである。

緑釉陶器(337～344) 杯および皿、蓋片などがある。完形に近いもの(344)を除いたほかは破片である。高台の形態より、338は杯B a、341～343は杯B cに属する。口縁部は、外反するもの(337)、やや外反するもの(340)、口縁端部の内側に凹線をめぐらすもの(339)がある。337、339、340、342が硬陶で、340が暗灰色を呈するのに対し、ほかは灰白色の緻密な胎土のものである。338、341、343は黄灰色を呈する軟陶である。344は皿B cで、黄灰色を呈する軟陶である。口径15.4cm、高さ2.8cm。

灰釉陶器(345～350) 杯B、皿がある。杯B(345～347)は、やや内側に屈曲する高台をつけ、口縁端部は外反して丸く終るものである。345、347は、内面全面に施釉するもので、淡灰色の緻密な胎土をもつ。346は内面および口縁部外面に施釉し、灰白色の緻密なものである。348は断面台形を呈する低い高台をもつ杯Bである。口径12.2cm～16.8cm、高さ4.2～5.1cm。349、350は口縁上半の内外面に段をつけたいわゆる段皿である。内面と口縁部外面に施釉し、底部内面には重ね焼きの痕跡をとどめる。350の口径18.0cm、高さ3.3cm。

須恵器(351～361) 杯B、蓋、壺E、壺L、鉢などがある。器形の形態および調整の特徴は、SK20出土須恵器などと共通する点が認められるが、鉢(360)は、口縁部の外反があまり顕著でなく、特徴が異なるものである。

SD12出土土器(PL. 15-362～401、43)

SD12より土師器105個体(約62.5%)、黒色土器3個体(2%)、緑釉陶器9個体(約5%)、灰釉陶器15個体(9%)、須恵器36個体(21.4%)がある。

土師器 杯A(362～368)、杯B(370)、椀(369)、皿A(371～375)、皿C(376、377)、高杯(378・

土師器		個体数	比率 (%)
食器	杯 A	23	21.9
	杯 B	1	0.9
	椀	1	0.9
	皿 A	37	35.3
	皿 C	3	2.9
	高杯	7	6.7
計		105	100.0

須恵器		個体数	比率 (%)
食器	杯 B	3	8.3
	蓋 A	3	8.3
貯蔵器	壺 A	5	13.9
	壺 E	21	58.4
	甕	4	11.1
計		36	100.0

灰釉陶器		個体数	比率 (%)
食器	杯	12	80
	皿	1	6.7
貯蔵器	水注	2	13.3
計		15	100.0

	土師器	黒色土器	緑釉陶器	灰釉陶器	須恵器	計
食器	72 (71.3) (68.6)	1 (1.0) (33.3)	9 (8.9) (100.0)	13 (12.9) (86.7)	6 (5.9) (16.6)	101 (60.2)
貯蔵器	0	0	0	2 (13.3)	30 (83.4)	32 (19.0)
煮炊具	33 (31.4)	2 (66.7)	0	0	0	35 (20.8)
計	105 (62.5)	3 (1.8)	9 (5.4)	15 (8.9)	36 (21.4)	168 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 9 SD20 出土土器の構成

379)、甕 (380 ~ 383) などがある。杯 A は c 手法、e 手法があり、後者が多数を占める。e 手法の土器のうち、器壁が薄く口縁上半の外反が顕著なものが含まれる。I 群に属するものが多い。口径 13.9cm ~ 16.0cm、高さ 3cm 前後。杯 B は、三角形を呈する低い高台がつく。c 手法であるが口縁部上半までヘラケズリがおよんでいない。口径 16.8cm、高さ 3.7cm。椀は、この遺構にのみ出土したもので、e 手法による小形のものである。口径 9.9cm、高さ 2.3cm。皿 A は小形のもの (371 ~ 373、口径 14.6cm ~ 15.0cm、高さ 1.8cm ~ 2.6cm) と大形のもの (374、375、口径 19.8cm、高さ 2.8cm) とがあり、前者は e 手法、後者は c 手法である。杯 A 同様、薄手で、口縁部の外反が顕著なものを含む。高杯は、芯棒接合に

よるもので、脚部のヘラケズリはやや粗く、断面 11 角形を呈する。378 は口縁部の破片で外面には縦方向のヘラケズリが認められる。口径 22.2cm。甕 (380～383) は、口縁部内面および体部内面に粗い横方向のおよびのものがある。口径 18.5cm～24.0cm。

黒色土器 杯 B(384)、甕 (385) がある。杯 B は、完形で底部外面および口縁部外面にヘラケズリし、口縁部外面上半に粗いヘラミガキを施す。黒色土器 A。口径 18.0cm、高さ 4.8cm。甕は、小形のものである。黒色土器 A。口径 12.2cm。

緑釉陶器 杯 B、皿 B があるが破片である。高台の形態から杯 B a (387)、杯 B b (388)、杯 B d (389) があり、387 が軟陶でほかは硬陶である。

灰釉陶器 杯 B(390・391) と小形の水注 (392) とがある。杯 B は淡灰色を呈し、やや密であるのに対し、水注は灰白色を呈する緻密な胎土をもつ。

須恵器 杯 B(395)、蓋 (393・394)、壺 E(396～399)、壺片 (400)、甕 (401) などがある。壺 E の中に、球形の体部に断面台形を呈する高台がつくもの (396) があり、ほかの壺 E とは形態が異なる。甕は、やや外反する口縁部からなり、端部は凹面をもつ。青灰色の砂粒を含む胎土である。口径 13.0cm。

SK18 出土土器 (PL. 16-402～419、43)

土師器		個体数	比率 (%)
食器	杯 A	53	99 } 88.4
	皿 A	40	
	高杯	6	
煮炊具	甕	13	11.6
	計	112	100

SK18 より土師器 112 個体 (約 93%)、黒色土器 1 個体 (1%)、緑釉陶器 5 個体 (4%)、須恵器 2 個体 (2%) がある。

土師器 杯 A(402～409)、皿 A(410～413)、高杯 (414・415)、甕 (416・417) がある。杯 A、皿 A は c 手法を少し含み、e 手法が多数を占める。形態や調整は SD13 と共通し、あまり違いは

	土師器	黒色土器	緑釉陶器	須恵器	計
食器	99 (95.2) (88.4)	1 (1.0) (100.0)	4 (3.8) (80.0)	0	104 (86.7)
貯蔵器	0	0	1 (33.3) (20.0)	2 (66.7) (100.0)	3 (2.5)
煮炊具	13 (100.0) (11.6)	0	0	0	13 (10.8)
計	112 (93.3)	1 (0.8)	5 (4.2)	2 (1.7)	120 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 10 SK18 出土土器の構成

ない。杯A(口径13.6cm～14.8cm、高さ2.6cm～3.1cm)。皿A(口径13.3cm～14.4cm、高さ1.5cm～2.0cm)。高杯は、杯部外面に縦方向の粗いヘラケズリを行う。脚部は粗いヘラケズリを行い、断面7角形を呈する。415は脚部中央に直径8mmの小孔を穿っている。

緑釉陶器 杯B a (418)、皿B a (419)があり、各々黄灰色を呈する軟陶である。418(口径16.4cm、高さ4.5cm)、419(口径14.4cm、高さ2.6cm)。

SD14出土土器(PL.16-420～439、17-440～466、44、45)

SD12に合流する南北方向の溝SD14からは多量の土器が出土した。土師器295個体(約82.5%)、黒色土器5個体(約1%)、緑釉陶器7個体(2%)、灰釉陶器6個体(約2%)、須恵器44個体(約12.3%)、磁器などがある。

土師器 杯A、杯B、皿A、高杯、甕、土釜などがある。杯A(420～428)の調整は、c手法とe手法の比率が、2:98とSK20と同様である。また杯AにはSD12と同様な特徴をもつものがある。その中で428のように口径19.8cm、高さ4.4cmを測るc手法の杯A Iと考えられるものも含む。I群に属する。口径13.8cm～16.0cm、高さ2.5cm～3.4cm。杯B(429)は、c手法で調整した完形のものである。底部中央に径6mmの円形の小孔を穿っている。I群に属する。口径21.9cm、高さ5.3cm。皿A(430～437)もc手法とe手法の比は3:97でe手法が圧倒的多数を占める。また皿Aの形態、調整もSD12と共通する。I群に属するものが多い。口径12.0cm～15.0cm、高さ1.1cm～2.3cm。高杯(438、439)も芯棒接合によるもので、脚部を丁寧にヘラケズリする断面8角形を呈するものである。438の杯部内面にはハケメの痕跡をとどめる。口径26.0cm。甕(440～443)には、ほかの遺構出土の甕と形態、調整は共通する。口径21.6cm～25.6cm。土釜(444)は、筒形をした体部に直立する口縁部からなり、口縁端部よりやや下に幅2cmの鏝をつける。口縁端部は水平な平坦面をもつ。口縁部および鏝部はヨコナデシ、体部内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメを施す。淡褐色を呈し、微砂粒を含む。口径23.0cm。

黒色土器 杯(445、446、口径15.2cm～15.8cm、高さ3.6cm)、と甕(447、448、口径15.0cm～15.4cm)とがある。ともに黒色土器A。

緑釉陶器 杯B、皿B、瓶などがある。杯B(449～452)は、口縁端部が外反するもの(449、450)、口縁端部の内側に凹線をめぐらすもの(451)、やや外反するもの(452)とがある。449は杯Baで軟陶である。口径13.4cm、高さ4.2cm。451も杯Baで軟陶である。口径16.0cm、高さ5.3cm。皿B c (453)は厚い底部と外側に開く口縁部からなり、端部は丸く終る。青灰色を呈する胎土で硬陶である。口径14.6cm、高さ2.8cm。瓶(454)は口縁

土師器		個体数	比率 (%)
食器	杯 A	182	} 91.2
	杯 B	10	
	皿 A	74	
	高杯	3	
煮炊具	甕	23	} 8.8
	釜	3	
計		295	100.0

須恵器		個体数	比率 (%)
食器	杯 A	2	} 29.5
	杯 B	4	
	蓋 A	7	
貯蔵器	壺 A	2	} 70.5
	壺 E	20	
	甕	7	
	鉢	2	
計		44	100.0

緑釉陶器		個体数	比率 (%)
食器	杯	5	} 85.7
	皿	1	
貯蔵器	壺	1	14.3
計		7	100

灰釉陶器		個体数	比率 (%)
食器	杯	3	} 66.7
	皿	1	
貯蔵器	壺	2	33.3
計		6	100

	土師器	黒色土器	緑釉陶器	灰釉陶器	須恵器	輸入陶磁器	計
食器	269 (91.2)	3 (1.0)	6 (2.0)	4 (1.4)	13 (4.4)	0	295 (82.4)
貯蔵器	0	0	1 (2.9)	2 (5.7)	31 (88.5)	1 (2.9)	35 (9.8)
煮炊具	26 (92.9)	2 (7.1)	0	0	0	0	28 (7.8)
計	295 (82.4)	5 (1.4)	7 (1.9)	6 (1.7)	44 (12.3)	1 (0.3)	358 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 11 SD14 出土土器の構成

部だけの破片で軟陶である。

灰釉陶器 杯 B(455 ~ 457)、皿 B(458) はそれぞれ破片である。455 は、内面だけ施釉し灰白色を呈するやや密な胎土のものである。456, 457 は、内外面とも施釉し、灰白色を呈する緻密なものである。後者は、底部内面に重ね焼きの痕跡をとどめる。皿 B は段皿で、内面だけを施釉し、灰白色の密な胎土である。

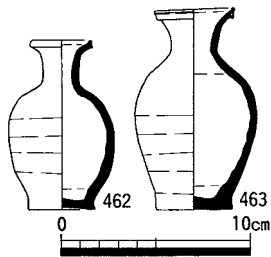


fig. 14 須恵器壺 (1:4)

須恵器 (459 ~ 465) 杯 A(460)、杯 B 片、蓋 (459)、壺 E(461 ~ 463)、鉢 (465)、壺片 (464)、甕がある。杯 A は、飛鳥時代の杯 A の混入と考えられる。鉢は、外側に大きく開く体部からなり、肩部で屈曲し、口縁端部は球形に肥厚する。青灰色の緻密な胎土である。口径 21.6cm。

磁器 (466) 体部および底部の破片であり、壺と考えられる。体部外面中央に縦に沈線を施し分割している。

体部内外面はロクロナデを施す。施釉の仕方は内外面全面に灰緑色の釉がかかり、極めて緻密な胎土である。越州窯系青磁である。

ピットおよおよび 22 出土遺物 (PL. 43)

トレンチおよびのピットから緑釉陶器と灰釉陶器が出土した。緑釉陶器杯 B d (467) は、ほぼ完形で平らな底部と内湾して上方にのびる口縁部からなり、口縁端部はやや外反する。高台は、やや高い張り付け高台で、底部外面には糸切り痕をとどめる。また底部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。青灰色を呈する硬陶で、濃緑色の釉を全面に施す。口径 14.0cm、高さ 5.2cm。灰釉陶器皿 B(468) もほぼ完形で、断面台形を呈する低い高台をもつ。底部外面には「×」印のヘラ記号があり、底部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。灰白色を呈する緻密な胎土で、内面にのみ施釉がみられる。口径 15.4cm、高さ 2.7cm。

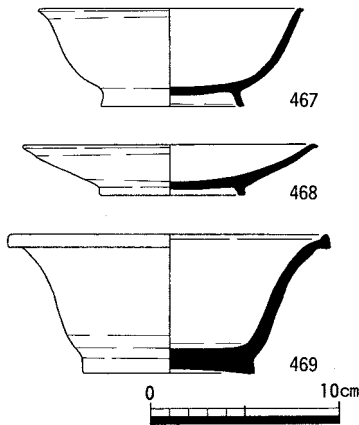


fig. 15 陶器 (1:4)

SK22 より少量の土師器と須恵器が出土した。須恵器鉢 (469) は完形に近いもので、平たい底部から内

湾気味に立ち上がり、途中で外反する口縁部からなる。口縁端部は上方に突出し、外方に傾斜する端面を有する。高台は円盤高台で、外面に糸切り痕をとどめる。内面および口縁部外面はロクロナデを行う。淡灰色を呈し、砂粒を含む軟質のものである。口径 16.8cm、高さ 7.4cm。

第 2 層出土土器 (PL. 18)

第 2 層から出土したのは、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、二彩陶器、須恵器、磁器、瓦

器碗などがある。そのうち土師器が全体の半数以上を占める。

土師器 杯 B、皿 A、甕、土釜などがある。皿 A は、形態、大きさにより皿 A I (484 ~ 489、口径 14.6cm ~ 17.8cm、高さ 1.7cm ~ 3.6cm)、皿 A II (479 ~ 482、口径 10.4cm ~ 12.8cm、高さ 0.9cm ~ 1.3cm)、皿 A III (470 ~ 478, 483、口径 9.0cm ~ 10.8cm、高さ 1.0cm ~ 1.6cm) の 3 種類に大別できる。皿 A I は、平らな底に内湾して立ち上がる口縁部からなる。口縁部の形態より、口縁部上半が強く外反し、端部を上方に突出するもの (a 類、484・485)、口縁部上半が直立し、端部が水平な平坦面をなすもの (b 類、486)、口縁部上半がやや外反し、端部が丸く終るもの (c 類、487 ~ 489) とがある。a、b、c 類とも口縁部をヨコナデし、底部外面には指頭痕をとどめるものであり、a 類は e 手法の形態に近いが、器壁は非常に薄く、堅緻な胎土をもつものである。また b 類、c 類は口縁端部をもう一度ヨコナデするものである。淡褐色を呈し、微砂粒を含む。a 類、b 類、c 類の比率は、7:35:58 で c 類が半数以上を占める。皿 A II は、平らな底部に外反する口縁部からなり、口縁端部が上方に突出するもの (480) と、大きく外反し、端部が内傾して外方に傾斜する面をもつもの (479・481・482) とがある。ともに淡褐色を呈し、微砂粒を含む胎土である。前者と後者の比は 37:63 と後者が多い。皿 A III は平らな底部に外反する口縁部からなる小形のもので、口縁端部は上方に突出する。色調、胎土は皿 A I、A II と同じである。

杯 B (490) は、底部の破片で、断面台形状の高台をもつ。

土釜 (491) は、筒型の体部に幅の広い鏝がつくもので、口縁端部は内側に張り出す。体部外面は縦方向のハケメで、内面はナデを行う。口径 18.2cm。甕 (492) は口縁部の破片である。口径 24.0cm。

緑釉陶器 (493 ~ 500) 杯 B (493 ~ 497)、皿 E (500) がある。493、494 は口縁部の破片で、端部はやや外反する。495 ~ 497 は、底部の破片で底部外面は糸切り痕をとどめ、高台の内側に段を有する杯 B d である。底部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。底部外面は施釉しない。493 が淡灰色の胎土に淡緑色の釉が施されるほかは、青灰色の胎土に濃緑色の釉が施される。498、499 は、底部内面にヘラ描きの花卉文を施すものである。淡灰色の胎土に淡緑色の釉が施される。硬陶。皿 D は口縁を折り曲げたもので、高台は切り高台で糸切り痕を残す。内面および口縁部外面はロクロナデを行う。底部外面以外は濃緑色の釉が施される。硬陶。

二彩陶器 (501) 口縁部の破片で、五口壺の一部と考えられる。外反する口縁部に口縁端部の上端が突出し、垂直で幅広の端面をもつ。内外面とも二彩が施されガラス質である。

胎土は黄灰色を呈する軟陶である。

灰釉陶器 (502～504) 杯B、皿Bがある。杯B(502・503)のうち、502には口縁端部に数カ所輪花が認められる。503は、底部内面に重ね焼きの痕跡をとどめる。

磁器 白磁碗(505・506)などがある。口縁端部に小さい玉縁をもつ。灰白色の密な胎土で、内外面に施釉する。口径16.6cm。

須恵器 杯、鉢、甕などがある。杯(507)は、外側に開く口縁部からなり、端部はやや外反して丸く終る。内外面ロクロナデを行う。淡灰色を呈し、硬質である。口径20.0cm。鉢(508)は、外方に開く体部で、口縁端部上端はやや上方にのび、外方に傾斜する面をもつ。内外面にロクロナデを施し、端部はヨコナデする。青灰色を呈し、砂粒を含むやや粗い胎土である。硬質。口径25.0cm。

iii 室町時代の土器

SK01 出土土器 (PL. 19-509～521、46)

SK01は不定形な土壌で、多量の土器が出土した。土師器140個体(約91%)、瓦器6個体(約4%)、須恵器1個体(1%)、青磁6個体(約4%)がある。土師器、瓦器は完形に近いものが多いが、ほかの土器は破片である。

土師器 皿(509～519)と高杯(520)がある。土師器皿の形態、色調、胎土より、淡褐色ないし淡灰色を呈し、微砂粒を含むものをI群、茶褐色系を呈し、比較的硬質なものをII群に分類した。

I群土器(509・510・513～519)の皿は、平たい底と外側に開く口縁部からなり、口縁部上半はやや外反して、端部は上方に少し突出する。形態、大きさより皿A I(518、519、口径13.8cm～16.2cm、高さ2.6cm～3.4cm)、皿A II(517、口径12.2cm～13.0cm、高さ2.4cm～2.8cm)、皿A III(515、516、口径9.8～10.8cm、高さ2.1cm～2.6cm)、皿A IV(513、514、口径8.0cm～9.0cm、高さ2.0cm～2.5cm)、皿G(509、510、口径6.6cm～7.6cm、高さ1.7cm～2.5cm)とに分かれる。皿Gは、いわゆる「ヘソ皿」と呼ばれているもので、底部外面中央部を指先で上方へ押し上げたものである。いずれも、内面は右回りにナデて、口縁部外面にヨコナデを施す。底部外面は未調整である。

II群土器(511・512)は、平たい底と大きく外反する口縁部からなり、端部は丸く終る。内面および口縁部上半をヨコナデし、底部外面および口縁部下半を指先で押さえた痕跡をとどめる。形態、大きさにより皿H I(512、口径10.4cm、高さ2.2cm)、皿H II(511、口

土師器		個体数	比率 (%)	瓦器		個体数	比率 (%)		
食	皿 A	I	50	} 113	}	80.7	}		
		II	19					35.7	
		III	24					13.6	
		IV	20					17.1	
器	皿 G		20	}	}	4.3	}		
		皿 H	I					4	14.3
			II					2	2.9
高杯		1	0.7						
計			140				100		

煮炊具	鍋	3	50
	釜	3	50
計		6	100

	土師器	瓦器	須恵器	輸入陶磁器	計
食器	140 (95.9)	0	0	6 (4.1)	146 (95.4)
貯蔵器	0	0	1 (100.0)	0	1 (0.7)
煮炊具	0	6 (100.0)	0	0	6 (3.9)
計	140 (91.5)	6 (3.9)	1 (0.7)	6 (3.9)	153 (100.0)

() 内はパーセント

Tab. 12 SK01 出土土器の構成

径 7cm、高さ 1.6cm) とがある。I 群土器に比べ出土数は少なく、全体の約 4%を占めるだけである。

高杯 (520) は、短い脚部の破片で、杯部と脚部は芯棒接合による。脚部外面は粗い縦方向のヘラケズリを行う。色調、胎土は I 群に属する。

瓦器 鍋 (521) の口縁部および体部上半の破片である。口縁端部は、逆「く」字状に屈曲して短く立ち上がり、外方に傾斜する端面を有する。体部外面は成形時に指先で押さえた痕跡をとどめ、内面はヨコナデする。淡灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。体部外面にはかなりすすが付着する。口径 33.2cm。

SD04 出土土器 (PL. 19-522 ~ 531、46)

SD04 の底部付近に多量の土器が出土した。土師器 117 個体 (96%)、瓦器鍋片、輸入陶磁器、陶器などがある。土師器が圧倒的多数を占める。

土師器 (522 ~ 529) 形態、調整、大きさなど SK01 出土土師器皿と共通する。I 群土器と II 群土器の比は 98:2 と II 群のものはごくわずかである。皿 A I (528・529) 34 個体、

土師器		個体数	比率 (%)			
食器	皿 A	I	34	} 29.1		
		II	47		} 40.2	
		III	9			} 7.7
		IV	3			
	皿 G	22	} 18.8			
	皿 H	I		1	} 0.8	
II		1	} 0.8			
計		117		100.0		

皿 A II (526・527)47 個体、皿 A III (524・525)9 個体、皿 A IV 3 個体、皿 G(522・523)22 個体ある。

輸入陶磁器 青磁皿 (530) は、平たい底にやや外反する口縁部からなる。底部内面に櫛によるジグザグ文様を施す。同安窯系青磁と考えられる。口径 10.0cm、高さ 2.3cm。

国産陶磁器 天目茶碗 (531) が 1 個体出土した。平らな小さい底と内湾気味に

	土師器	瓦器	国産陶磁器	輸入陶磁器	計
食器	117(96.7)	0	1(0.8)	3(2.5)	121(99.2)
貯蔵器	0	0	0	0	0
煮炊具	0	1(100.0)	0	0	1(0.8)
計	117(96.0)	1(0.8)	1(0.8)	3(2.4)	122(100.0)

() 内はパーセント

Tab. 13 SD04 出土土器の構成

立ち上がる口縁部からなり、口縁部上半はやや外反して、端部は丸く終る。高台はケズリ出しの円盤高台である。内面および口縁部外面上半はロクロナデを行い、下半はロクロケズリの痕跡とどめる。黄灰色の砂粒を含む粗い胎土で、内面および口縁部外面に黒褐色の鉄釉を施す。口径 11.7cm、高さ 6.3cm。

SX08 出土土器 (PL. 19-532 ~ 543、46)

SX08 下層より土師器、須恵質甕片、瓦器、鍋、釜、火舎、陶器片などが出土した。

土師器 SK01、SD04 出土土師器と共通する形態、大きさ、特徴をもつ。皿 A I (539・540)9 個体、皿 A II (536 ~ 538)8 個体、皿 A III (535)7 個体、皿 A IV (533・534)4 個体、皿 G(532)4 個体、皿 H I 2 個体、皿 H II 1 個体がある。皿 A I のうち 540(口径 18.0cm、高さ 3.0cm) は 1 個体が出土した。皿 A I より大形の一群に含まれるものと考えられる。

瓦器 釜 (541) は、やや丸味をおびる底と垂直に立ち上がる体部からなる。口縁部は短く、口縁端部左半部が内側にのび、やや外方に傾斜する面を有する。鏝は幅が短い。体部内面、口縁部および鏝部はヨコナデを行い、底部と体部の外面は指先でオサエた痕跡

土師器		個体数	比率 (%)	瓦器		個体数	比率 (%)	
食器	皿 A	I	9	25.7	煮炊具	鍋釜	1	20
		II	8	22.9			2	
		III	7	20	その他	火舎	2	40
		IV	4	11.4			計	
	皿 G		4	11.4				
	皿 H	I	2	5.7				
		II	1	2.9				
計		35	100.0					

	土師器	瓦器	国産陶磁器	計
食器	35(100.0)	0	0	35(74.5)
貯蔵器	0	0	7(100.0)	7(14.9)
煮炊具	0	3(100.0) (60.0)	0	3(6.4)
その他	0	2(100.0) (40.0)	0	2(4.2)
計	35 (74.5)	5(10.6)	7(14.9)	47(100.0)

()内はパーセント

Tab. 14 SX08 出土土器の構成

をとどめる。灰白色を呈する密な胎土で、外面にはススが付着する。口径 17.0cm、高さ 11.0cm。

火舎 (542・543) は、それぞれ形態を異にする。542 は、口縁部が欠損しただけの完形に近いもので、平たい底に内湾する体部からなる。底部には 3 足の獣脚がつく。体部上半には複弁の蓮華文、下半には 4 弁の花弁を 2 個 1 組とする連接刻印の紋飾を施す。内面はヨコナデを施す。灰黒色を呈する砂粒を含む胎土である。543 は平たい底に内湾する体部からなり、口縁端部が内側へのび、水平な平坦面を有する。底部外面には 3 足を配する。体部内面はヨコナデし、外面および口縁上端部はヘラミガキを施す。黒灰色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土である。口径 39.2cm、高さ 13.6cm。

註

- 1 杯 X とは、杯 A・C・G・H に属さない一群の仮称である。
- 2 杯 G と胎土が異なる点は、杯 H に角閃石および金雲母が含まれないことである。
- 3 近江・山城系の甕の分類については、奈良国立文化財研究所学報 31 報「飛鳥藤原宮

発掘調査報告Ⅱ」1978、P. 53 の分類に従う。

- 4 同上
- 5 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報 3」1973 坂田寺池 SG100 に皿 B の類例がある。
- 6 奈良国立文化財研究所学報第 26 冊「平城宮発掘調査報告Ⅵ」1975 報告内の甕 B に同様な口縁端部をもつものがある。今回出土したものは、体部下半が欠損しているため、甕 B と断言できないが、可能性はある。
- 7 奈良国立文化財研究所第 26 冊「平城宮発掘調査報告Ⅵ」による。
- 8 同上。P. 64 の分類に従った。杯 Ba は切り高台、杯 B b は蛇の目高台、杯 B c は杯 B b と同じであるが、挟りの部分が広く、高台の断面が台形を呈する。杯 B d は貼り付け高台としている。

2 瓦甄類

今回の調査で出土した瓦類は、軒先瓦、丸瓦、平瓦、文字瓦、甄である。これらは、調査区のほぼ全域にわたって認められ、特に SD38 上層、SD37、SK20、SD12、SD14、第 2 層、SD04 などから多量に出土する。瓦の時期は、飛鳥時代から鎌倉時代に至るが、飛鳥・白鳳時代と平安時代のものが多数を占める。出土瓦は、完形は非常に少なく、大部分が破片である。以下、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、文字瓦、甄の順に述べる。

i 軒丸瓦 (PL. 20-T01 ~ T09、21-T10 ~ T20、47、48)

軒丸瓦は総数 42 個体出土した。そのうち小破片のため型式の判別が不可能なものを除く 35 個体については、瓦当文様により分類した。その結果、17 型式に分けられる。

T01・T02 素弁十葉蓮華文軒丸瓦^{註1}

T01 は、SD13 第 1 層暗褐色泥土より出土したもので、瓦当面上半部を残す。T02 は、SD38 上層より出土し、瓦当上半部 3 分の 1 を残す。ともに丸瓦は瓦当面との接合部よりはずれ、残存しない。内区文様は素弁十葉の蓮華文で、肉の薄い花卉に弁端が中央で反転するような桜花弁状の切り込みがつけられている。やや小さな中房は突出し、大きな蓮子を 1 + 6 配する。内区と周縁との間には、浅く細い凹線がめぐる。範の押し込みは深く鮮明である。瓦当部と丸瓦の接合は、瓦当裏面上部に幅のやや狭い溝をつけ、そこに丸瓦をはめこむ接着法と呼ばれる技法をとる。橙色ないし茶褐色を呈し、砂粒を含む。

T03・T04 単弁八葉蓮花文軒丸瓦

T03 は SD37 より出土し、ほぼ完形のものである。T04 も同遺構より出土し、瓦当面下半が破損する。内区文様は単弁八葉の蓮花文で、肉の薄い花卉は弁端が桜花弁状になり、やや細長の子葉をおく。やや大きな中房は高く突出し、小さな蓮子を 1 + 6 配する。内区と周縁の間には、やや太い圏線がめぐり、周縁は、直立縁で 2 重の太い圏線がめぐり、その間に珠文と長形文とを交互に配する特異なものである。範は押し込みが深く文様は鮮明である。青灰色を呈するものと淡茶灰色を呈するものがあり、前者は硬質で後者はやや軟質である。ともに砂粒を含むやや粗い胎土である。SD37-2 個体、SK34-1 個体、SD12-1 個体、SD14-2 個体、第 2 層 -5 個体出土する。

T05 軒丸瓦

T05 は SK20 より出土。外区および周縁を残す破片である。周縁は、傾斜縁をなし、その面に線鋸歯文を配する。周縁頂部には凹線を 1 条めぐらす。以前の調査の出土例^{註2}より複弁八葉蓮花文軒丸瓦の破片と考えられる。灰黒色を呈し、比較的密な胎土である。

T06・T07 複弁八葉蓮花文軒丸瓦

T06 は第 2 層より出土。瓦当面右半部を残す。T07 は SD12 より出土。瓦当面下半部を残す。内区文様は複弁八葉の蓮花文で、ややふくらみのある花卉は、一重の細い輪郭線で区切られる。弁間文は、細い凸線で先端が二つに分かれる。大きな中房は 1 + 6 の蓮子を配し、圏線によって囲まれる。外区の珠文は大きく 12 個配する。瓦当裏面の調整は、下半部には横方向のヘラケズリを行い、上半部は指で押さえた痕跡をとどめる。範は押し込みが深く、文様は鮮明である。淡黄灰色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土で硬質である。『平安京古瓦図録』の 35 と同範で西賀茂角社西群瓦窯の製品^{註3}である。

T08 単弁二十二葉蓮花文軒丸瓦

SD12 より出土。瓦当面右半部を残す。内区文様は単弁の二十二葉の蓮花文で、花卉は細長く平坦であり、花卉の輪郭線はつながる。中房は、大きな蓮子を 1 + 6 配し、圏線により囲まれる。内区と外区を分ける圏線はなく、外区に大きな珠文を 16 個配する。範の押し込みは深く、文様も鮮明である。暗灰色を呈し砂粒を多く含む粗い胎土で硬質である。『平安京古瓦図録』53 と同範である。

T09 単弁十二葉蓮花文軒丸瓦

SD12 より出土。一部破損しているがほぼ完形である。内区文様は、単弁十二葉の蓮花文で、花卉は大きく盛り上がり、太い輪郭線がまわる。中房は太い圏線で区切られ、蓮子を 1 + 4 配する。内区と外区を区切る圏線はなく、珠文もない。瓦当裏面下半部は縦方向

のヘラケズリを施す。上半部には指で押さえた痕跡をとどめる。淡褐色を呈し、砂粒を含むやや粗い胎土で硬質である。ほかに1個体、SD14からも1個体出土する。

T10 単弁十六葉蓮花文軒丸瓦

SD12より出土。瓦当面上部4分の1を残す。内区文様は、単弁十六葉の蓮花文で花卉は小さく、強く反っている。花卉は密に配す。中房はやや太い圏線をめぐらしている。内区と外区を分ける圏線も太く、外区の珠文も大きい。淡灰色の密な胎土で表面が黒灰色を呈する。硬質である。『平安京古瓦図録』62に近いモチーフをとるものである。

T11 単弁十六葉蓮花文軒丸瓦

SK24より出土。完形に近いものである。内区文様は単弁十六葉の蓮花文で、花卉は小さく、T10に比べて反りは強くない。中房はやや突出し、蓮子は1+5を配する。内区と外区を分ける圏線は強い。珠文は大きく密に配し、珠文の外側にも圏線を配す。瓦当裏面は指頭圧痕が認められる。淡灰色の砂粒を含む胎土で、表面は黒灰色を呈する。硬質。

T12 単弁十四葉蓮花文軒丸瓦

SD14より出土で、瓦当面の一部を残す破片である。内区文様は単弁十四葉の蓮花文で、花卉は細長く、あまり反らない。中房は圏線で囲まれる。内区と外区を分ける圏線はやや細い。珠文は小さい。範の掘り込みは深く文様も鮮明である。淡黄灰色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土で硬質である。ほかにSD13から1個体、SD14から1個体、第2層より2個体出土する。『平安京古瓦図録』52と同範で西賀茂角社西群瓦窯^{註4}の製品である。

T13 複弁八葉蓮花文軒丸瓦

SD14より出土。瓦当面の一部を残す。内区文様は複弁八葉の蓮華文で、花卉は太い輪郭線で囲まれる。内区と外区を分ける圏線は細く、やや大きな珠文を配する。範は掘り込みが深く、文様も鮮明である。瓦当裏面には布目を残す一本造りの軒丸瓦である。淡黄灰色を呈し、砂粒を含む胎土である。

T14 単弁十二葉蓮花文軒丸瓦

SK19より出土。瓦当面4分の1ほどを残す。内区文様は単弁十二葉の蓮花文で、花卉はやや長く、反りがある。太い輪郭線で囲まれる。中房は細い圏線をめぐらし、蓮子数は破損しているため不明である。内区と外区を分ける圏線は細い。珠文は小さく平坦であり、珠文の外側にも圏線をめぐらす。暗灰色を呈する密な胎土で硬質である。長岡宮 No. 56に近いモチーフをとる。

T15 単弁八葉蓮花文軒丸瓦

第2層より出土。瓦当面右上半部を残す。内区文様は、単弁八葉の蓮花文で花卉は大きく平坦であり、細い輪郭線がめぐる。中房は、細い圏線で囲まれ、中央部がややふくらむ。瓦当裏面には、粗い布目痕が認められる一本造りの軒丸瓦である。灰黒色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土でやや軟質である。『平安京古瓦図録』107に近いモチーフをとる。

T16 複弁四葉蓮花文軒丸瓦

SD14より出土。瓦当面右上4分の1を残す。内区文様は、複弁四葉の蓮花文である。花卉は、反りをもった大きな複弁で細い輪郭線がめぐる。複弁間には、大きな撥形の弁間文を配する。中房は破損して不明である。内区と外区を分ける圏線は細く、花卉端の切り込みに対応する部分が内側にくびれる。珠文は13個配し、右側複弁の外側の珠文間に「界」とも読みとれる文字あるいは記号がある。范は外区の珠文までを含めた文様区だけに押し込む。淡黄灰色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土で硬質である。『平安京古瓦図録』67と近いモチーフをとる。

T17 単弁八葉蓮花文軒丸瓦

第2層より出土。瓦当面の一部を残す破片である。花卉は平坦で輪郭線はなく、撥形の弁間文を配する。内区と外区を分ける圏線はなく、珠文は小さい。淡灰色を呈し、密な胎土で硬質である。

T18 複弁四葉蓮花文軒丸瓦

第2層より出土。瓦当面をわずかに残す破片である。花卉は小さいが太く、細い輪郭線がまわる。内区と外区を分ける圏線はやや太く、珠文が密に配される。その外側にも太い圏線がめぐり、周縁との間に右回りに巻く唐草文を配す。淡灰色を呈し、砂粒を含む胎土で硬質である。『平安京古瓦図録』234と同范と考えられる。

T19 複弁八葉蓮花文軒丸瓦

第2層より出土。瓦当面下半部の一部を残す。花卉は大きく、平坦で太い輪郭線がまわる。弁間文はない。中房は段をつけ、窪む。内区と外区を分ける圏線は太く、珠文は配さない。瓦当裏面下部はナデを行う。淡青灰色を呈し密な胎土である。

T20 単弁八葉蓮花文軒丸瓦

第2層より出土。ほぼ完形である。花卉は大きく平坦であり、細い輪郭線がめぐる。中房は花菱形を呈し、蓮子は1+4を配する。瓦当面の摩滅が著しいため不明瞭であるが、中央の蓮子と周囲の蓮子3個は凸線で結ばれている。外区と内区を分ける圏線は細く、花卉端と接する。外区の珠文は小さく平坦である。周縁は不明である。淡青灰色を呈し、密

な胎土で軟質である。『平安京古瓦図録』208と同範である。

ii 軒平瓦 (PL. 22-T101 ~ T116、49)

軒平瓦は、総数23個体出土した。そのうち型式の判別が不可能なものを除く20個体を分類した結果、14形式に分けられる。

T101・T102 有郭重弧文軒平瓦

T101はSD14より出土。瓦当面右側を残す。T102はSD13より出土した破片である。内区の郭は断面がやや丸みをおび、中央部が太く端へ行くに従い細くなる。顎は直線顎である。瓦当面上外周は横方向のヘラケズリ、下外周はヨコナデを行う。平瓦部凹面は縦方向にヘラケズリし、凸面には縄目叩きの痕跡をとどめる。側面は狭端面から瓦当面に向かってヘラケズリする。淡青灰色を呈する緻密な胎土で表面は灰黒色を呈する。硬質なものである。平城宮 6572 型式^{註5}である。

T103 有郭重弧文軒平瓦

第2層より出土。瓦当面右半部を残す。郭の断面は台形を呈し、1条の角張った太い凸線を配する。顎は直線顎である。瓦当面上外周、下外周および側面はヘラケズリを行う。瓦当面は筈ずれが認められる。淡青灰色を呈し密な胎土で硬質である。平城宮 6574 型式^{註6}と考えられる。

T104 均整唐草文軒平瓦

SK20より出土。瓦当面右上端部を残す破片である。外区は2重の細い圏線がめぐり、その間に楕円形の細長い珠文を配する。側面はヘラケズリを施す。淡青灰色の砂粒を多く含む粗い胎土で表面は暗灰色を呈する。硬質。第2層よりもう1個体出土する。

T105 均整唐草文軒平瓦

SD14より出土。瓦当面3分の2ほど残す。中心には対向C字形を配し、中心飾りは破損のため不明である。中心飾りの下から三葉蕨手が左右に5転する。内区と外区を分ける圏線はやや細く、狭い外区に珠文はやや粗に配する。瓦当上外周は横方向のヘラケズリをし、側面もヘラケズリを行う。淡灰色の緻密な胎土で、表面は暗灰色を呈する。硬質。平城宮 6721 型式^{註7}に近いモチーフである。

T106 均整唐草文軒平瓦

調査区中央部南側柱穴より出土。瓦当面中心部を残す。中心には、対向C字形を配し、中心飾りは帆かけ船状の文様をおく。中心飾り下部より2葉蕨手を配する。内区と外区を

分ける圏線はやや太く、珠文はやや粗く配する。瓦当面上外周はヘラケズリを施す。淡黄灰色の比較的密な胎土で硬質である。長岡 7757 型式^{註8}である。

T107 均整唐草文軒平瓦

第2層より出土。瓦当面上左端だけを残す破片である。蕨手は先端がやや肥厚し、小さな枝葉がみられる。内区と外区を分ける圏線は細く、珠文はやや外側にやや粗に配す。淡黄灰色の砂粒を含む胎土でやや軟質である。

T108 均整唐草文軒平瓦

SD14より出土。瓦当面上左側3分の1を残す。2葉の蕨手が3転半する。内区と外区を分ける圏線は細く、小さな珠文は粗く配す。瓦当面上外周および下外周は横方向のヘラケズリを施す。平瓦部凹面および側面に目の粗い布目痕が認められる。淡青灰色の砂粒を含む粗い胎土で表面は暗灰色を呈する。やや軟質である。『平安京古瓦図録』356の同範である。

T109 均整唐草文軒平瓦

SD14より出土。瓦当面の中央部をわずかに残す破片である。中心飾りは対向C字形を配し、その上下に「I」形の文様をおく。中心飾りの下より蕨手が反転する。内区と外区を分ける圏線は細く、珠文を粗く配する。淡茶褐色の比較的密な胎土で、表面は暗灰色を呈する。硬質である。

T110・T111 均整唐草文軒平瓦

T110はSD14より出土。瓦当面上右側3分の1を残す。T111はSD12より出土。瓦当面中央部右側を残す破片である。中心飾りの下より蕨手が反転する。蕨手は巻き込みが緩やかで、先端部は肥厚する。瓦当面上外周および下外周は横方向のヘラケズリを施し、側面もヘラケズリする。平瓦部凹面には布目痕が認められ、凸面には朱が付着する。淡灰色の砂粒を多く含む粗い胎土で表面は暗灰色を呈する。ほかに第2層から2個体出土する。『平安京古瓦図録』337、338と同範である。

T112 均整唐草文軒平瓦

第2層より出土。瓦当面上左側3分の1を残す。蕨手は複線風で左右に4転し、蕨手の先端は巻き込みが強い。子葉も複線で表現される。内区と外区を分ける圏線は極めて細く、珠文もやや間隔をおいて配する。瓦当部外周は横方向のヘラケズリを行い、平瓦部凹面には粗い布目痕をとどめる。凸面には頸部までを縦方向のヘラケズリし、頸部端より3cmくらいまでをナデる。灰白色の砂粒を含む胎土で、硬質である。

T113 均整唐草文軒平瓦

第2層より出土。瓦当面左側3分の1を残す。やや細い蕨手は左右に2転半する。内区と外区を分ける圏線は細く、珠文をやや密に配す。脇区には珠文を4個配する。淡黄灰色の砂粒を多く含む粗い胎土で硬質である。ほかにSD13より1個体出土する。『平安京古瓦図録』315、325と同範で西賀茂角社西郡瓦窯^{註9}の製品である。

T114 剣頭文軒平瓦

第2層より出土。瓦当面右端を残す。内区文様は、窪んだ剣頭文を配する。剣頭文の割り付けはa^{註10}類である。瓦当は折り曲げで平瓦部とは鈍角をなす。瓦当部上外周および下外周は横方向のヘラケズリを行い、瓦当部裏面から平瓦部凸面にかけて縦方向のナデを施す。淡黄灰色の砂粒を含む胎土で、やや軟質である。

T115 剣頭文軒平瓦

SD04より出土。瓦当面右側一部を残す。内区文様は、剣頭文を凸面により表現する。剣頭文の割り付けはa^{註11}類である。平面凹面の細い布目痕は瓦当部までとどめる。頸部から平瓦凸面にかけて横方向のナデを行う。淡灰色の砂粒を含む胎土で表面は暗灰色を呈する。やや軟質である。

T116 唐草文軒平瓦

第2層上面より出土。瓦当面右側一部を残す。蕨手は太く、主枝に1つだけ副葉がつく。瓦当部上外周および下外周は横方向のヘラケズリを行い、頸部にもヘラケズリを施す。淡青灰色の比較的密な胎土で表面は暗灰色を呈する。やや軟質である。

iii 丸瓦 (PL. 23-T301 ~ T304、27)

丸瓦は完形になるものはほとんどなく破片である。丸瓦の成形は、1次成形が粘土板巻きつけによるものと思われ、種々の叩き板による2次成形を施す。丸瓦の場合、叩き目の痕跡を、ナデ、ハケメ、ヘラケズリなどの調整で磨き消してしまう場合が多く、叩き目による分類は、困難である。今回の報告では、凸面の調整手法による分類を行い、叩き目の痕跡を残すものも加えた。なお、側縁および端縁の調整手法に関しては「平安京大極殿跡の発掘調査」(財団法人古代学協会 昭和51年P.39)によるa、b、c^{註12}の分類に従い、分割断面と破面の凹凸をそのまま残すものをdとする。

1 丸瓦 I (PL. 23-T304)

凸面にナデにより叩き目を摩り消すもの(V01)で、行基葺に使用される丸瓦である。黄灰色ないし青灰色を呈し、砂粒をやや含む胎土で、前者は軟質、後者は硬質である。硬質

なものの一部には自然釉の吹き出しが認められる。側縁および端縁の調整は、c手法をもちいるが、狭端面において、端縁を面取りしないものが普通である。凹面は比較的密な布目痕をとどめ、厚さは1.5cm～1.8cmほどである。このタイプの瓦は、後述するV02、即ち玉縁が付き叩き目を摩り消す丸瓦と小破片にては区別をつけることは困難である。

2 丸瓦Ⅱ (PL. 27)

凸面にハケメの調整を行うもので、すべて行基葺に使用される丸瓦である。ハケメの方向より2種類に分けられる。

W01 端面に対して平行にハケメを施すもので、ハケメの後、部分的にナデを加えるものもある。側縁および端縁の調整はc手法をもちいる。凹面には比較的密な布目痕をとどめる。厚さ1.8cm～2.1cm位である。狭端面には、ワラ状の圧痕を数カ所認められることがある。青灰色の砂粒をやや多く含む胎土で、硬質である。

X01 端面に対して縦方向にハケメを施すものである。側縁および端縁の調整はc手法をとるものが圧倒的に多い。色調、胎土はW01と共通し、凹面には密な布目痕をとどめる。

3 丸瓦Ⅲ (PL. 23-T303、27)

凸面に縦方向のヘラケズリにより叩き目を摩り消してしまうもの(Y01)で、行基葺に使用される丸瓦である。側縁および端縁の調整はc手法をとる場合が圧倒的に多い。ただヘラケズリは側面および端面において粗雑なものが多い。凹面には、密な布目痕をとどめる。厚さは、1.6cm～1.8cmである。色調胎土は丸瓦Ⅱ類と類似する。

4 丸瓦Ⅳ (PL. 23-T301)

凸面にナデにより叩き目を摩り消してしまうもの(V01)で、一部分縄目叩きの痕跡をとどめるものもある。玉縁のつく丸瓦である。側面および端面の調整は、b手法が圧倒的多数を占める。凹面は、ほとんど布目痕をとどめており、布目は乱れているものが多い。布のあわせ目を残すものが数例あり、そのほとんどは側縁に近いところで認められる。玉縁の形態は、玉縁と丸瓦部との段差が大きく、やや直線的に下がるものである。玉縁との段から丸瓦部にかけては横方向のナデを施す。玉縁の側縁の調整は、やや斜めにケズる場合がある(T301)。厚さは、1.8cm～2.4cmである。黄灰色の砂粒を多く含む胎土で表面は灰黒色を呈するものが多い。

5 丸瓦Ⅴ (PL. 23-T302)

凸面にナデを施すものであるが、比較的縄目叩きの痕跡をとどめるもの(Z01)がある。縄目はやや粗く、叩きは深い。玉縁のつく丸瓦である。側縁および端縁の調整はb手法を

とるものが圧倒的である。玉縁の形態は丸瓦Ⅳ類と異なり、玉縁と丸瓦部の段差は小さく、玉縁も短い。数量としては少ない。玉縁部の側縁の調整は、丸瓦部の側縁から通してケズる場合が多い。凹面にはやや乱れた布目痕をとどめる。厚さは1.8cm～2.1cmである。青灰色の砂粒を含む胎土で硬質なものが多い。

iv 平瓦 (PL. 24、25、26、27)

平瓦は、完形のものではなく、すべて破片である。また、長さおよび幅の大きさを計測できるものもほとんどなかった。平瓦の成形は、1次成形として、粘土板巻きつけ技法によるものが圧倒的多数を占めるが、粘土紐巻きつけによると思われるものも少量ある。今回の報告においては、第2次成形技法としてのタタキメによる分類を行った。なお叩き板による2次成形の後にナデ、ハケメの調整手法をもちいたものも含める。また、側縁および端縁の調整手法は、丸瓦と同様、a、b、c、dに分け、それ以外のものは、個々に述べることにする。

1 平瓦A類 (PL. 24、26)

凸面に正格子目状のタタキメをもつものである。また、格子目に数本の凸線を対角線状に配するものも含める。凹面には細い布目痕が残り布のと同じ合わせ痕をとどめる。幅4.5cm～6cmの枠板の痕跡をとどめるものもある。桶巻造りの平瓦である。以下格子目の大きさにより分類し述べて行く。

A01 格子の大きさが非常に小さいものである。側縁の調整はc手法をもちいているが、面取りの幅は狭い。厚さ1.0cm～1.5cmの薄い平瓦である。淡褐色の砂粒を含む胎土で軟質なものが多い。A07とほぼ格子の大きさは同じである。

A02～A04 (PL. 24-T403、PL. 25-T407) 格子の大きさがA01よりやや大きいものである。叩き板による2次成形の後、凸面広端部より幅約7cmほどをヨコナデあるいはハケによる調整を行うものである。側縁の調整はa手法によるものが多く、c、d手法のものもある。広端縁においては、c手法によるものが多い。厚さは1.5cm～2.8cmである。黄灰色ないし青灰色で砂粒を含む胎土である。前者は軟質で後者は硬質である。

A05 (PL. 24-T401) 格子の大きさはやや大きい。A02～A04と同様、叩き板による二次成形の後、広端面を狭い幅でハケメを施すものである。側縁の調整は、分割断面をそのままとどめるd手法が多く、a手法もある。広端縁はc手法をもちいる。黄灰色の比較的密な胎土で硬質である。二次的な火を受けたものもある。厚さは1.8cm前後。

A06(PL. 24-T405) 正格子がいちばん大きいものである。凸面の広端面部をヘラケズリする。凹面狭端部幅 5cm で布目痕がない。これはナデ、ハケなどにより消されたものではなく、粘土の凹面狭端部まで布目が巻かれていなかったことによる。この部分は、桶の杵板痕を明瞭にとどめる。側縁には、やや粗い c 手法を行い、端縁は a 手法である。淡青灰色の砂粒を含む胎土で硬質である。厚さ 2cm 前後。

A07、A08(PL. 24-T402) 正格子に対角線を入れるものである。A07 は側縁は比較的丁寧な c 手法を行う。淡黄灰色の密な胎土で硬質である。A08 は、淡茶灰色の砂粒を含む胎土でやや軟質である。

2 平瓦 B 類 (PL. 26)

凸面に斜格子状のタタキメをもつものである。凹面には、平瓦 A 類と同様、比較的密な布目痕を残し、布のとじ合わせ痕をとどめる。また、桶の杵板痕をとどめるものもある。桶巻造りの平瓦である。以下平瓦 A 類と同様の格子の大きさにより分け、述べて行く。

B01 斜格子の最も小さいものである。側縁は、やや粗い c 手法をもちいる。青灰色を呈するものが多く、砂粒を含む胎土で、硬質のものが多い。厚さ 1.5cm 前後の薄手である。

B02 B03、B01 と比べ、やや大きな斜格子の叩きをもつものである。側縁の調整は c 手法をもちいるが、破面に粗いヘラケズリをし、破面の凹部と分割断面が残るものもある^{註13}。黄灰色を呈し、密な胎土で硬質なものが多い。厚さ 1.5cm ～ 2.3cm である。

B04、B05 斜格子がやや大きいものである。側縁の調整は a 手法のものと c 手法のものがある。また分割断面をとどめる d 手法のものも含む。狭端面は、概して粗い c 手法をとる場合が多い。灰青色ないし淡黄灰色を呈し、砂粒を含む胎土で硬質である。厚さ約 2cm 前後である。

B06 斜格子の最も大きいと思われるものである。出土点数はあまりない。黄灰色を呈し、やや砂粒を多く含む胎土で軟質のものが多い。厚さ 2.0cm 前後である。

B07 B04、B05 と斜格子の大きさは、ほぼ共通するが、斜格子内に細い平行する凸線がみられるものである。これは A07、A08 とは違い、叩き板の摩滅により板の年輪の夏材部が残ったため凸線状に表われていると考えられる。淡黄灰色の密な胎土であるがやや軟質である。厚さ 2.0cm 前後である。

B08 B02、B03 と斜格子の大きさは、ほぼ共通するが、斜格子の内に、細長い平行四辺形状の格子を含む。側縁は c 手法をとるものが多い。淡黄灰色の砂粒を含む胎土で軟質なものが多い。厚さ 2.0cm 前後である。

3. 平瓦 C 類 (PL. 24、26)

凸面に、菱形ないしは平行四辺形状の格子タタキをもつものである。出土点数は、平瓦 A 類、B 類に比べて少ない。凹面には、細い布目痕を残し、布のとじ合わせ痕を認める。桶の杵板痕をとどめるものもある。桶巻き作りの平瓦である。以下格子の大きさにより分け、述べる。

C01 (PL. 24-T404、26) 菱形状の叩き目を行うものである。叩き板原体の大きさは 7.5cm 以上×9cm 位の小形のもので、叩き締めの方は広端面右下から左上へ叩きこんでいる。側縁および狭端縁は、凸面部だけを粗くヘラケズリする b 手法をとる。凹面には布の継目痕をとどめる。青灰色の密な胎土で硬質であるが、2 次的な火を受け、赤褐色となっているものもある。厚さ 2cm 前後。

C02 平行四辺形状のやや小形の格子タタキを行うものである。側縁の調整は a 手法をもちいる。黄灰色を呈し、砂粒を含む胎土でやや軟質である。厚さ 1.8cm 前後である。

C03 平行四辺形状のやや大きい格子叩きを行うものである。側縁の調整は、粗い c 手法をもちいる。茶褐色を呈し、砂粒を含む胎土で軟質である。厚さ 1.5cm 前後である。

4 平瓦 D 類 (PL. 26)

長方形の格子叩きを行うものである。凹面には、細い布目痕が認められ、桶の杵板痕をとどめるものもある。桶巻き作りの平瓦と考えられる。

D01 非常に小さな長方形の格子タタキを行うものである。小破片のため、広端縁および狭端縁の調整は不明であるが、側縁は a 手法をもちいるものが多い。黄灰色の砂粒を含む胎土でやや軟質である。厚さ 1.5cm 前後である。

D02 やや大きい長方形の格子叩きをもちいるものである。原体の大きさは不明であるが、原体すべてに格子を施すものではなく、周縁をめぐらし、その内に格子を施すものと考えられる。側縁の調整は a 手法をもつものが多い。茶褐色を呈し、砂粒を含む胎土で軟質である。厚さ 1.8cm 前後。

5 平瓦 E 類 (PL. 26)

凸面に平行条の叩きを行うものである。凹面には細い布目を残し、布のとじ合わせ痕が認められる。また桶の杵板痕をとどめるものもある。

E01 やや太い平行条のタタキを行うものである。破片のために叩き板の全体を復原しようものはない。凹面狭端部約 10cm ほどには布目痕が認められない。このことは、A06 で認められたものと共通し、幅 4.5cm 前後の桶の杵板痕をとどめる。狭端縁の調整は、凹

面側だけをへらケズリする b 手法をもちいる。側縁の調整は、分割截面をとどめる d 手法である。青灰色の砂粒を多く含む胎土で硬質なものが多い。厚さ 1.8cm 前後。

E02 やや細い平行条のタタキをもちいるものである。凸面広端部幅 10cm ほど叩きの後、ヨコナデを行う。広端縁および側縁の調整は、凹面側を粗くへらケズリする b 手法である。また凹面布目痕を一部ナデにより摩り消した痕跡がある。灰青色ないし淡灰色の砂粒を多く含む胎土で硬質のものが多い。厚さ 1.7cm ～ 2.3cm。

E03 やや間隔が広く、細い平行条の叩きを行うものである。側縁の調整は、分割截面および破面の凹凸をそのまま残すものである。淡灰色の砂粒を含む胎土で硬質である。厚さ 1.6cm 前後。

6 平瓦 F 類 (PL. 26)

綾杉状のタタキを行うものである。綾杉文を組み合わせ、その中心には雷文のような文様をもつものを含む。凹面には比較的細い布目痕をとどめ、桶の杵板痕が認められるものもある。桶巻き作りの平瓦と考えられる。出土点数は、ほかの平瓦類と比べると少ない。

F01 やや幅が広く大きな綾杉文のタタキを行うものである。タタキメは深く、文様は明瞭である。側縁の調整は c 手法で、分割截面をとどめるものもある。淡茶灰色の砂粒を含む胎土でやや軟質である。厚さ 1.8cm 前後。

F02 やや幅の狭い枝をもつ綾杉文のタタキを行うものである。茶褐色を呈し、砂粒を含む胎土でやや軟質である。厚さ約 2 cm 前後。

F03 綾杉文状のものを組み合わせ、中心に菱形状のものを配する。叩き板の大きさは、重複するため、確認できないが約 8cm × 9cm 以上の小さなものと考えられる。また文様は、E02 と類似し、E02 は F03 に含まれる可能性もある。側縁の調整は a 手法である。茶褐色系の砂粒を含む胎土でやや軟質である。厚さ 1.5cm 前後である。

F04 幹をもつ綾杉状の叩きを行うものである。文様は浅く、明瞭ではない。灰青色の比較的密な胎土で硬質である。厚さ 1.8cm 前後。

7 平瓦 G 類 (PL. 25、27)

縄目タタキを行うものである。凹面の布目痕は G01 ～ 03 が細くて密であるのに対し、G04 ～ 07 は、比較的粗いものが多い。後者においては、凹面に糸切り痕をとどめる場合が多い。前者は、桶巻き作りの平瓦と考えられ、後者は 1 枚作りの平瓦と考えられる。出土点数は、格子叩きの平瓦より少ない。

G01 縄目はやや細く、縄間の非常に密なものである。凹面には桶の杵板痕を残すものが

ある。瓦の中で、広端面の両端を約6cmほどカットしているものがある。狭端縁の調整はa手法で、側縁はc手法をとる。灰青色の密な胎土で硬質である。厚さ1.5cm前後。

G02 縄目は細く、縄間は密である。凹面には桶の杵板痕をとどめるものもある。側面の調整はc手法が多い。灰青色の砂粒を含む胎土で硬質である。厚さ2.2～2.5cm。

G03 縄目はやや細く、縄間は密である。G01同様広端面の両端をカットしたものがあ^{註14}る。叩き板の大きさは6cm×9cm前後の小形のもので、叩き締め^{註14}の方向は不明である。狭端縁は凹面側のみをヘラケズリするb手法をとる場合が多く、側縁も同様にb手法である。灰青色の砂粒を含む胎土で硬質である。厚さ1.5cm前後。

G04(PL. 25-T406、27) 縄目はやや太く、縄間は密なものである。凸面には細かいハナレ砂が認められる。狭端縁の調整はa手法で、側縁は凹面側にヘラケズリするb手法を行う。凹面布目痕の一部を縦方向にナデを行うものがある。灰褐色の砂粒を含む胎土でやや軟質である。厚さ1.8cm前後。

G05(PL. 25-T410、27) 縄目は太く、縄間がやや密なものである。凸面にハナレ砂の認められるものが多い。狭端縁はa手法で、側縁の調整はc手法である。灰褐色の砂粒を含む胎土で軟質である。厚さ2.0cm前後。

G06(PL. 25-T408) 縄目は太く、縄間はやや粗いものである。凸面にはハナレ砂が認められる。狭端縁の調整はa手法で、側縁は凹面側だけをヘラケズリするb手法である。淡褐色の砂粒を含む胎土で、表面は灰黒色を呈する。やや軟質。厚さ2.1cm～2.4cm。

G07 縄目は太く、縄間は粗いものである。凸面にはハナレ砂が認められる。狭端縁の調整はa手法で、側縁の調整は凹面部をヘラケズリするb手法である。淡灰褐色の砂粒を含む胎土でやや軟質である。厚さ1.5cm前後の比較的薄手の瓦である。

8 平瓦H類 (PL. 27)

横方向にハケメを施すものである。凸面広端部幅9cmほどをハケメの後、ヨコナデする。凹面には細くて密な布目痕をとどめ、幅4.5cm前後の桶の杵板痕を残す。広端縁の調整はa手法で、側縁(面)はa手法、あるいは分割断面および破面の凹凸をとどめるものもある。青灰色の砂粒を含む胎土で硬質である。厚さ1.5cm前後。桶巻き作りの瓦である。

9 平瓦I類 (PL. 27)

凸面に三角形を組み合わせたような幾何学文のタタキを行うものである。破片が多く原体の大きさは不明である。凹面には、細くて密な布目痕を残し、幅4cm～4.5cmほどの桶の杵板痕をとどめるものもある。側縁の調整はやや粗いヘラケズリを行うc手法である。

淡黄灰色のやや密な胎土で硬質である。桶巻き作りの瓦である。

10 平瓦J類 (PL. 27)

凸面に雷文のような幾何学文のタタキを行うものである。凹面には細くて密な布目痕をとどめ、布のとじ合わせ痕が認められる。側縁の調整はc手法である。茶褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土で軟質である。厚さ2.6cm前後。桶巻き作りの瓦である。

11 平瓦K類 (PL. 25、27)

2種類の叩きによる成形を行ったもので桶巻き作りの瓦である。

K01(PL25-T409、27) 凸面に正格子の叩き(A02～04)と太くて幅の広い平行条の叩きを行うものである。表面の摩滅が著しいため、叩き締め順序は不明である。またタタキの2次成形の後、凸面広端部幅約8cmをヨコナデする。凹面には、細くて密な布目痕があり、布のとじ合わせ痕が残る。広端縁の調整はc手法である。また側縁は、分割截面をとどめるd手法である。青灰色の砂粒を含む胎土で硬質である。厚さ約1.5cm。

K02 凸面にやや小さい格子タタキ(A02～04)と縄め叩き(G02)を行うものである。これも破片のため叩き締め順序は不明であるが、縄目が格子目により押しつぶされていることから、縄目タタキの後に格子タタキが施されている。凹面には細くて密な布目痕を残し、幅5cm前後の桶の梓板痕をとどめる。狭端縁の調整はa手法で、側縁の調整は、c手法を行うものが多い。端灰色の砂粒を含む胎土で表面は灰黒色を呈する。硬質である。厚さ約1.5cm～2cmである。

12 平瓦L類 (PL. 27)

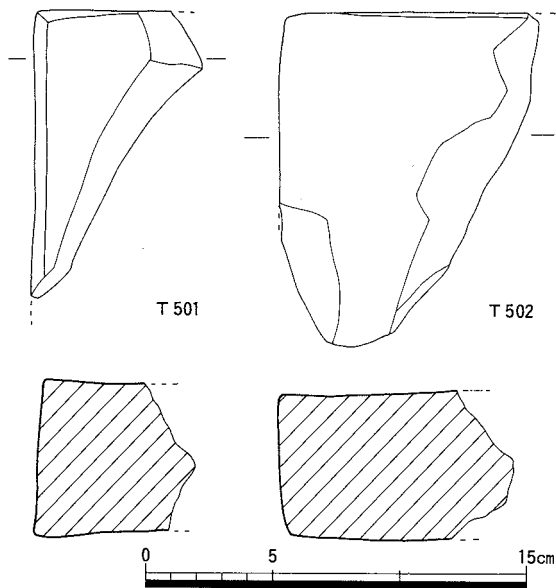
凹面に縄目タタキと布目痕が認められるものである。出土点数は非常に少ない。破片のために布目痕と縄目タタキの関係は不明である。淡灰色の砂粒を含む胎土でやや軟質である。表面の摩滅は著しい。厚さ2cm前後である。

v 文字瓦 (PL. 49)

今回の調査において、文字瓦は2点出土しただけである。

1 「■」文字か記号かは不明である。丸瓦玉縁部凸面に陽刻されたものである。印の形は隅丸方形で、縦、横1.7cmである。類例は、豊楽院頭陽堂跡および朝堂院^{註15}で出土する。

2 「■」方の字だけを残すもので、「坊」と考えられるものである。陽刻されたもので、平瓦凹面部に押捺されている。類例は、朝堂院跡などで出土している^{註16}。



vi 甃

甃は2個体出土するものである。両方とも破片のため、全体を知り得るものはない。表面は、丁寧なヘラケズリなどの調整を行っている。厚さは、ともに5.7cmである。淡灰色の砂粒を含む胎土で、表面は灰黒色を呈する。硬質である。

註

1. この軒丸瓦の窯は、幡枝稻荷1号窯（横山浩一、吉本堯俊「京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯」日本考古学協会 昭和38年度大会研究発表

fig. 16 甃 (1:3)

要旨)とされている。

2. 藤沢一夫「山城北野廃寺」考古学 9-2 1938、井本正三郎「山城北野廃寺南遺跡の研究」考古学 11-6 1941
3. 平安京跡研究調査報告第4輯「西賀茂瓦窯跡」財団法人考古学協会 昭和53年 その中ではNS153型式としている。
4. 同上
5. 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ 瓦編2」
6. 平城宮 6574 型式
7. 平城宮 6721 型式
8. 京都府教育委員会「長岡京跡昭和42年発掘調査概要」埋蔵文化財発掘調査概報 1968年
9. 3に同じ
10. 平安博物館編『平安京古瓦図録』559における剣頭文の単位文様割り付けの分類による
11. 同上
12. a～c類とは「側面（または端面）だけの1面を削るものをa、側面（または端面）

と凹面側の側縁（または端縁）の2面を削るものをb、側面（または端面）と凹面側および凸面側の側縁（または端縁）の3面を削るものをcとする」である。

13. 佐原真「平瓦桶巻作り」考古学雑誌 第58巻第2号 昭和47年
14. 今調査ではなかったが、今までの調査で出土している。六勝寺研究会「北野廃寺跡発掘調査報告」1978年4月 六勝寺研究会
15. 平安博物館編『平安京古瓦図録』756による
16. 平安博物館編『平安京古瓦図録』746による

3 その他の遺物

i 鉄製品 (PL. 28-1 ~ 48、50)

鉄製品の主なものは、建造物に使用された釘で、総数360個体と多量に出土した。これらの釘は、検出した遺構のほとんどから認められた。特に、SK07から120個体以上と非常に多く、第2層、SK01、SD04、SD13なども多い。鉄製品の保存状態は、さびの付着が著しく、その形態をよくとどめているものは少ない。

すべて鍛造されたものと考えられ、先端部へ徐々に細くなり、断面方形を呈する角釘である。頭部の形態より、頭部先端が折れ曲がり、やや扁平化した頭部をもつ折曲頭形のもの(A群)、頭部先端を扁平に叩き、強く内側へ巻き込む巻頭形のもの(B群)、頭部端面が平坦面をなす方頭形のもの(C群)、頭部が鉞状を呈する鉞頭形のもの(D群)、頭部が円形の傘状を呈する傘頭系のもの(E群)がある。^{註1}

A群(1~13)は、飛鳥時代から室町時代にかけて平均して出土している。形態はほぼ同じであり、その長さより22.4cm(13)、8.4cm(7)、4.5cm(3)の大きく3型式に分けられる。また芯部や折曲部の断面が大きいもの(12)や、折曲部がかなり長いもの(12)もある。12は、ほかのものと形態がやや異なるためA群でない可能性が強い。

B群(14~22)は、室町時代の遺構より、出土している。A群に比べて、長さの異なるものは少なく、全長が7cm前後の小形のものである。

C群(23~32、35、40)は、すべての遺構から出土し、特に第2層および室町時代の遺構から多く出土する。頭部の形態より、方形を呈するものと長方形を呈するものがある。芯部中央付近から折れ曲がったものが多く、長さ6.6cm~10.0cm前後のものである。

形態 遺構名	A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	鍔	その他	不明	計 (%)
SD38	2 〈5〉	0	3 〈22・ 29・40〉	0	0	0	0	5	10(2.8)
SK26	0	0	0	0	0	0	0	1	1(0.3)
SK25	0	0	0	0	0	0	0	1	1(0.3)
SK23	0	0	1 〈30〉	0	0	0	0	2	3(0.8)
SK20	1 〈13〉	0	1	0	0	0	0	0	2(0.6)
SK18	2 〈7・ 8〉	0	0	0	0	0	0	2	4(1.1)
SD14	0	0	2 〈28〉	0	1 〈43〉	0	1 〈46〉	6	10(2.8)
SD13	3 〈12〉	0	3 〈23・ 27・31〉	1	2 〈42・ 44〉	0	0	11 〈36・38〉	20(5.6)
SD12	0	0	1 〈33〉	0	0	0	0	9	10(2.8)
第2層	4 〈6・ 9・10〉	0	6 〈32〉	1 〈41〉	2	1 〈45〉	0	47 〈34・39〉	61(16.9)
SX08	1	1 〈14〉	0	0	0	0	0	12	14(3.9)
SK07	3 〈2・ 4〉	8 〈15～ 21〉	7	2	0	0	1 〈47〉	101	122(33.7)
SK06	1	1	2 〈24〉	0	0	0	0	11	15(4.1)
SD04	3 〈1・ 3〉	2	2 〈25・ 26〉	0	0	0	0	32	39(10.8)
SK02	0	0	0	0	0	0	0	8	8(2.2)
SK01	0	0	3 〈35〉	0	0	0	0	28	31(8.5)
柱穴	2 〈11〉	1	0	0	0	1	0	6	10(2.8)
計 (%)	22 (6.1)	13 (3.6)	31 (8.6)	4 (1.1)	5 (1.4)	2 (0.6)	2 (0.6)	282 (78.0)	361 (100.0)

〈 〉内は番号

Tab. 15 鉄製品一覧表

D群(41)は、SD13および第2層から1個体ずつ、SK07より2個体出土するだけである。頭部は1辺1.2cmの方形を呈し、復原全長約5.5cmと考えられる。

E群(42～44)は、SD13、第2層より2個体ずつ、SD14より1個体出土する。頭部の直径が3.3cmくらい(42、43)と2.7cmくらい(44)の2型式ある。44の復原全長12.3cm。

鏃(45)は第2層および室町時代のピットより1個体ずつ出土する。

不明鉄製品(46、47)の46はSD14より出土した。双方またはハサミ状を呈したもので、全長10.5cm、芯部幅1.8cmの小形のものである。47はSK07より出土。S字状を呈し、全長9cm、芯部幅6mmの断面方形を呈するものである。

ii 銭貨

銭貨はSK20より、富壽神寶2枚、承和昌寶2枚が紙のような繊維に包まれて出土し、SD13第4層より富壽神寶が1枚出土した。これらの銭貨は、保存状態が悪い。

富壽神寶は、周縁が幅広いものと、そうでないものがある。文字はさびの付着のために、

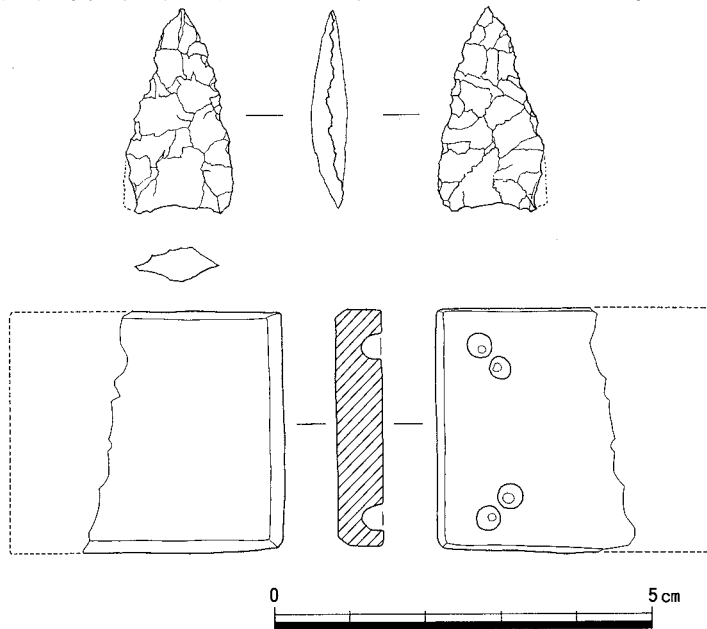


fig. 17 石製品 (1:1)

個々に充分分析することはできないが、型式としては、富壽神寶B類と富壽神寶C類^{註2}に属するものと考えられる。

承和昌寶は小形のものである。さびの付着のため、個々の文字の分析は難しい。

iii 石製品

石鏃 SD38 下層よりほぼ完形で出土した。長さ2.7cm、最大幅1.3cmで、先端の一部がかけ、また逆刺の一部が欠損する。材質は赤チャートである。

石? SD14より出土した破片である。片方だけの破片であるが2孔を1対とする潜り孔をあけたものである。縦幅3.1cm、厚さ0.6cmを測る。黒色の泥岩系の材質である。

註

- 1 この分類は、法隆寺国宝保存委員会「国宝法隆寺五重塔修理工事報告」法隆寺国宝保存工事報告書第13冊 昭和30年3月などをもとに行った。
- 2 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告VI」P.100の錢貨の分類による

第V章 考察

1 土器の年代

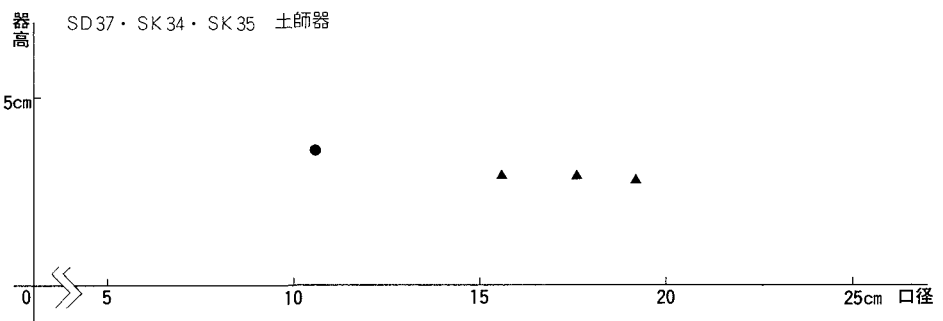
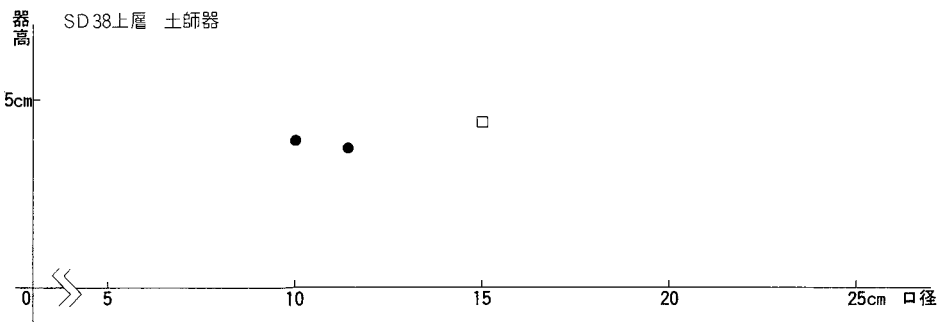
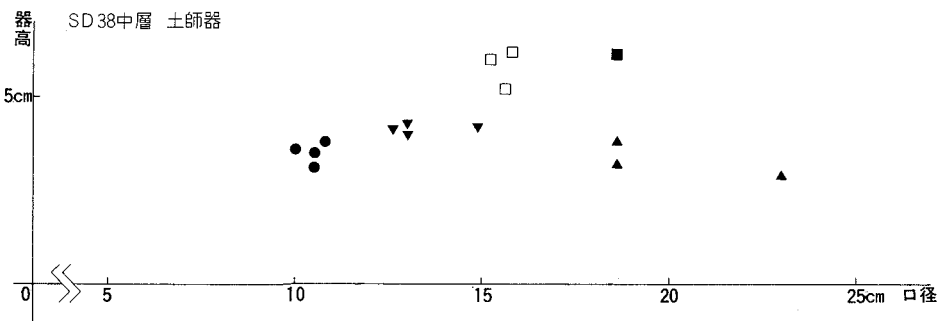
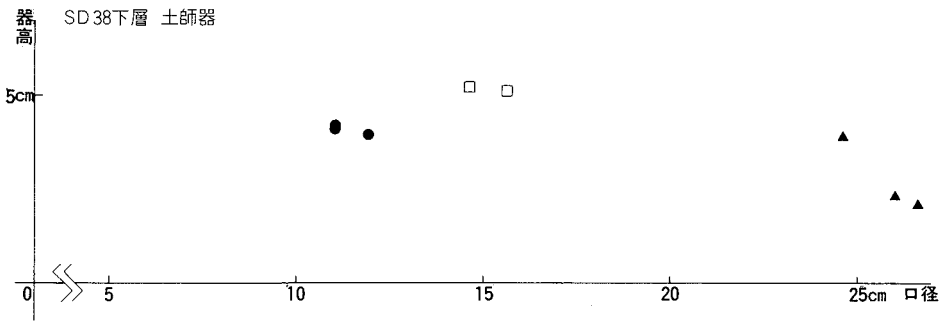
今回の調査区内における各遺構から出土した土器は、多量かつ多種類で、その時期が多時期にわたることは上述したとおりである。出土したこれらの資料中に、絶対年代を決定しうるものはみい出せなかった。そのため、土器の形態、手法、法量の差異などの分析を行い、それぞれの遺構出土の土器の相対的年代を考えてみたい。

SD38 出土土器

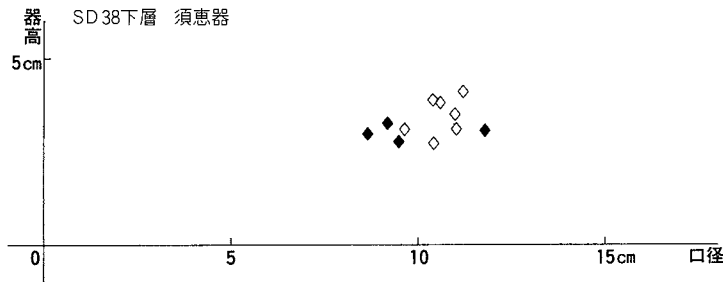
SD38からは多量の土師器、須恵器が出土し、その溝の層位に基づいて下層、中層、上層に分層し、事実報告を行った。これらの土器群にみられる形態、手法、法量における相違は識別することが可能である。特に比較的变化の認められる供繕形態の土器について述べる。

土師器 下層出土の土師器は、杯Cが確実に存在し、杯CⅠ、CⅢと法量による器種分化が認められる。杯Cは、外面を丁寧にヘラミガキし、径高指数39の深い器形をなすものである。また、この杯Cとともにヨコナデや底部外面をヘラケズリする杯Xが存在する。内面の放射文、外面のヘラミガキは施されない。この杯Xも法量による器種分化が認められるが、古い要素を受け継ぐ土器群と考えられる。杯Cと杯Xとの出土比率は70:30で杯Cが多数を占める。

中層出土の土師器は、杯CにおいてもCⅠ、CⅡ、CⅢが認められる。杯CⅠはその法量において下層出土杯CⅠと共通するが、杯CⅡおよびCⅢの径高指数が33前後と小形化する傾向をもつ。また、杯Cの外面のヘラミガキが粗くなり、CⅢにおいては省略されるものも含まれる。次に、下層においては認められなかった杯Aが存在することである。内面に二段の放射文を配し、外面には丁寧にヘラミガキを施し、径高指数33を測るものである。杯C、杯X、杯Aの出土比率をみると84:8:8と杯Cが圧倒的多数を占め、杯Xはほとんど消滅する傾向をもつ。また皿Aにおいても、杯C同様小形化する傾向を示し、外

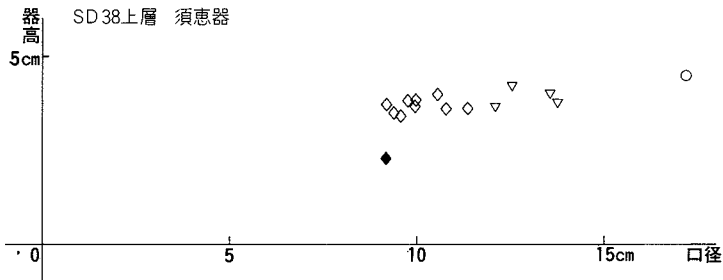
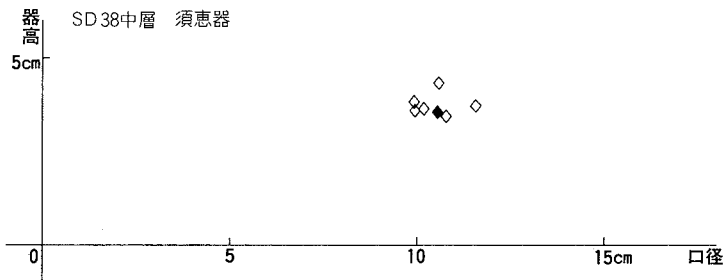


tab. 16 土器法量表 (1)



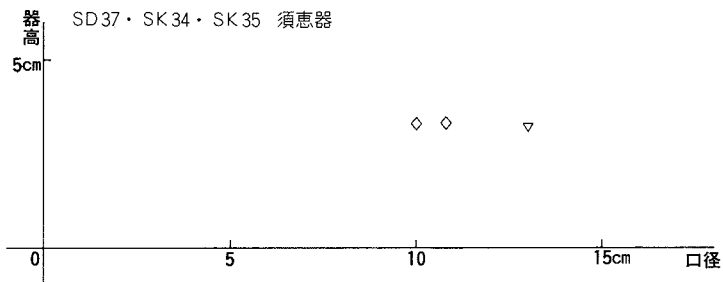
面のヘラミガキも粗くなる。一方、下層にはみられなかった皿Bが1点だけ出土する。

上層出土の土師器では、杯Cは中層に比べて小形化する傾向がさらに促進し、外面のヘラミガキはより粗くなり、C Iにおいては省略されるものもある。また、杯Xの出土は認められなかった。



須恵器 下層出土の須恵器は、杯Hとともに明らかに杯Gが共存していることである。杯Hは、口径8.6cm～11.8cm、高さ2.8cm～3.3cmと小形のものである。また杯Gも口径9.6cm～11.0cm、高さ3.1cm～4.1cm、径高指数33と小形である。杯Gと杯Hとの比率は、37:63と杯H

が多数を占める。杯G蓋も小形のもので、かえりの先端が口縁端



- | | | | | |
|-----|----------|--------|-----|------|
| 土師器 | □ 杯C I | ■ 杯A I | 須恵器 | ◇ 杯G |
| | ▼ 杯C II | ▲ 皿A | | ◆ 杯H |
| | ● 杯C III | | | ○ 杯B |
| | | | | ▽ 杯A |

tab. 17 土器法量表 (2)

部より下方に張り出すものである。一方、杯Bおよび椀が各々1点ずつ出土しているが、これは多分に中層の遺物が混入している可能性がある。

中層出土の須恵器は、杯Gと杯Hとの比率が69:31と下層に比べ杯Gが逆転して多数を占める。杯Gは、口径10.0cm～11.7cm、高さ3.4cm～4.3cm、径高指数36とやや大形化し、法量拡大の傾向を示す。杯G蓋には、口径がやや大きく、高さの低いものや、かえりの先端が口縁端部より下方に張り出さないものがあり、やや大形化してかえりの縮小化傾向を示す。杯Bが中層において明らかに存在する。

上層出土の須恵器は、杯Hがほぼ消滅し、杯Gと杯Bが多数を占める。杯Gは口径9.2cm～10.8cm、高さ3.6cm～4.0cm、径高指数37前後と、中層出土杯Gとあまり大きな変化はない。また、形態、手法は杯Gと共通するが、口径12.6cm～13.8cm、高さ3.7cm～4.2cmのやや大形で、蓋を伴わない杯Aと考えられるものが存在する。

以上のことから、現在7世紀の土器編年が確立している飛鳥藤原宮の調査報告と比較し、SD38溝の相対年代を検討してみる。

まず、SD38下層においては、土師器杯Cの出現および器種分化、須恵器杯Gおよび杯Hの比率、その形態、調整については上述したとおりである。飛鳥Ⅰ期の標準資料としては、小墾田宮推定地の溝SD050^{註1}と池SG070^{註2}があり、土師器杯Cには、口径15.9cm～17.1cm、高さ6.2cm～7.2cm、径高指数41前後の深い器形のもので出現する。また須恵器においては杯Gと杯Hの比率で杯Hが圧倒的多数を占め、杯Gが少数であることが報告されている。次に、飛鳥Ⅱ期の標準資料として坂田寺跡池SG100^{註3}があり、土師器杯Cは、口径16.3cm、高さ5.2cm前後、径高指数32とやや浅くなる傾向を示す。須恵器杯G、杯Hは小形になりその出土比率は相半ばし、杯Gが増加する傾向を示すと報告されている^{註4}。このことからSD38下層出土の土器は、飛鳥Ⅰ期とⅡ期の間期的な形態を示していることがうかがえる。

中層出土の土器は、土師器杯Cの径高指数33前後で、また杯Aの出現に関して飛鳥Ⅱ期と共通する特徴を示す。しかしながら杯Aが径高指数33とやや浅くなるのと、須恵器杯Gと杯Hの比率拡大の傾向をもつことから、飛鳥Ⅲ期の標準資料として大官大寺下層遺構SE116・SK121の土器群に近い形態をもつものと考えられる。

上層出土の土器は、出土数の少ない土師器より、多量の須恵器に変化が認められる。杯Gは、中層出土杯Gと形態、調整に大きな変化はない。杯Gと杯Aの比率は、半数以上杯Gが占める。飛鳥Ⅳ期の標準資料として雷丘東方遺跡の溝SD110^{註5}上ノ井出遺跡溝SD015^{註6}の土器群がある。その中で須恵器杯Gは少数で消滅する傾向があり、杯A、杯Bが多数を占め、

器種分化が認められる。このことから、上層出土の土器群の時期は、飛鳥Ⅳ期よりやや古い時期を示すものと考えられる。

以上のことより溝 SD38 は、飛鳥Ⅰ期とⅡ期の間にはすでに存在し、その廃絶は飛鳥Ⅳ期に近い時期と考えられる。

SD37・SK34・SK35 出土土器

SD37、SK34、SK35 より出土した土器は、各々少量のため個々の器種変化をたどれるものは少ない。しかし、須恵器杯 B 蓋は、SD38 上層出土のようにかえりの付くものは少量で、消滅したものがほとんどである。また、杯 A、杯 B の形態などからほぼ飛鳥Ⅴ期^{註7}ないし奈良前期と並行するものと考えられる。これらの遺構は、堆積状況、遺物の出土などから、短い時期に存在していたものと考えられる。これらの遺構は、堆積状況、遺物の出土などから、短い時期に存在していたものと考えられる。

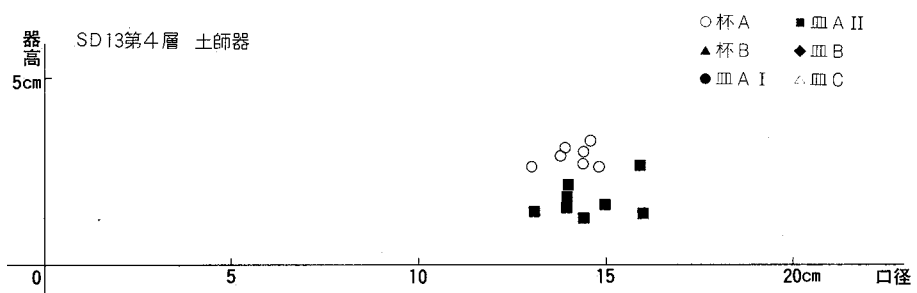
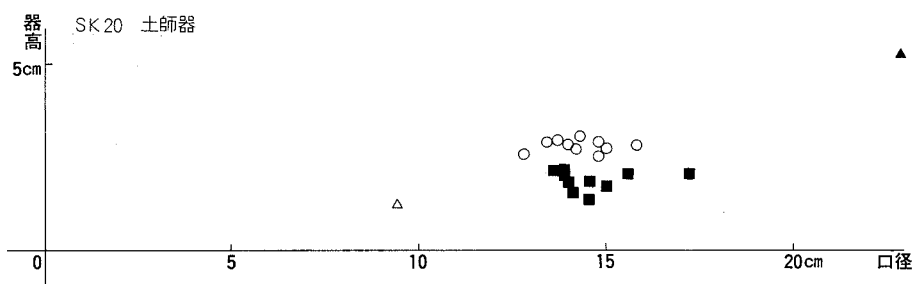
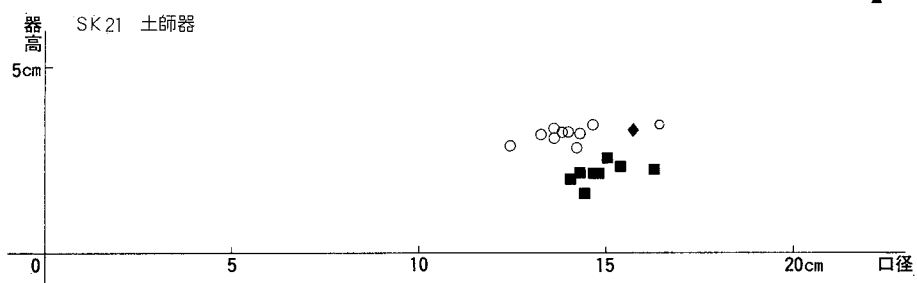
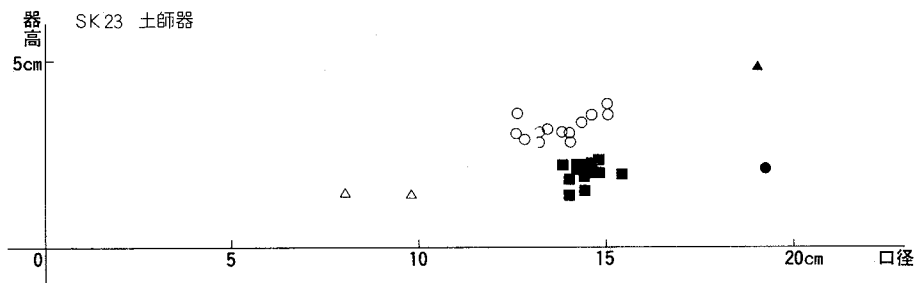
SK23 出土土器

SK23 からは、土師器、黒色土器、緑釉陶器、須恵器が出土し、土師器が圧倒的多数を占める。器種の構成は、杯 A、皿 A の供膳形態の食器が最も多い。調整手法は、杯 B、高杯にみられるような外面のヘラミガキ手法はまったくみられない。杯 A の調整手法としての c 手法と e 手法の比率は 41:59 と e 手法が過半を占める。皿 A も同様 39:61 とほぼ同じ傾向を示す。法量においては、杯 A が口径 12.6cm～15.8cm、高さ 2.8cm～3.8cm、径高指数 23 である。皿 A では口径 13.8cm～16.0cm、高さ 1.4cm～2.3cm、径高指数 14 前後である。また、甕類においては、体部外面にハケメ調整を施すものはほとんどなく、外面の種々の叩きを行った後、粗いハケメを施すものが圧倒的に多い。

以上のことより平城京跡 SD650A 出土の土器と比較すると、杯 A・皿 A の調整手法は c 手法と e 手法の比率が 77:23 で、c 手法が多数を占め、SK23 出土土器では、e 手法が多数を占め、e 手法がより増加していることがうかがえる。また法量においても SD650A 出土土器では口径 12.4cm～17.8cm、高さ 2.4cm～3.9cm であるのに対し、やや小形化する傾向をもつ。以上のことより SD650A 土器と比べ、e 手法が著しく増加し、また器形においては、より小形化が進行する傾向を示している。

SK21 出土土器

SK21 からは、土師器、黒色土器、須恵器、少量の緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。SK20 同様土師器が圧倒的多数を占める。器種の構成も SK20 とあまり大きな変化はない。杯 A の調整手法である c 手法と e 手法の比率は 16:84 と e 手法が圧倒的多数を占める。皿



tab. 18 土器法量表 (3)

Aも同様 26:74と同じ傾向を示し、SK23 出土土器に比べ c 手法がより消滅して行く傾向がうかがえる。法量においても、杯 A では口径 13.2cm～14.6cm、高さ 2.8cm～3.4cm、径高指数 22 と小形化がより促進する。

SK20 出土土器

SK20 には土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器があり、土師器が圧倒的多数を占める。なかでも杯 A、皿 A がほとんどを占めることは SK23、SK21 と共通する。器種の構成は、SK23、SK21 に比べ、須恵器の器種が多い。杯 A の調整手法として c 手法と e 手法の比は、7:93 とほとんど e 手法であり、皿 A においても 3:97 と同じで、c 手法がほぼ消滅する。法量においても杯 A が口径 12.8cm～15.8cm、高さ 2.5cm～3.0cm、径高指数 20 前後と、平城宮 SE311B 以後小形化する傾向が著しく促進したものと考えられる。皿 A も同様、口径 13.6cm～17.2cm、高さ 1.4cm～2.1cm、径高指数 12 前後で、SK23、SK21 に比べ、かなり小形化する。一方、杯 B においては、まだ c 手法を行うものがほとんどである。

黒色土器における変化は認められないが、緑釉陶器の杯、皿においては SK23、SK21 では軟陶で淡緑色の施釉がほとんどであったのに対し、須恵器の色調、胎土を有し、濃緑色の施釉が認められる硬陶のものが出現する。また、灰釉陶器においても、底部内面に三叉トチンを残すもののほかに、重ね焼きの痕跡が認められるものがある。

SD13 第 4 層出土土器

SD13 第 4 層には、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器などがあり、ほかの遺構と同様に土師器が圧倒的多数を占める。その中で、ほかの遺構においては、杯 A と皿 A がほぼ相半ばするのに対し、この層では、比率が 8:2 と杯 A が多数をしめる。杯 A と皿 A の調整手法は、ほとんどが e 手法で、杯 A に少数の c 手法のものがあるだけである。法量においては、杯 A が口径 13.0cm～15.9cm、高さ 2.6cm～3.3cm、径高指数 20 前後、皿 A が口径 13.0cm～16.0cm、高さ 1.3cm～2.1cm、径高指数 12 前後と、SK20 までみられた小形化する傾向がとまり、ほぼ一定する。一方、土器の形態において、口縁部上半部が著しく外反し、薄い器壁をもつものが出現する。

また緑釉陶器においては SK20 でみられた濃緑色の施釉が認められる硬陶が多くなり、高台の形式も、円盤高台や蛇ノ目高台のほかにケズリ出しの輪高台のものがみられる。

以上のことより、これら遺構出土土器群の相対的年代を考える上で、SK20 出土の土器群が重要な意味をもつと考えられる。即ち、北野廃寺における文献資料中に、野寺常住寺

が元慶8年(884)に塔に落雷があり、出火して七堂伽藍が灰塵に帰した記録がある。SK20には、火災の際に焼けたと思われる瓦や焼土を含み、土器の器種構成も豊富なことなどから、SK23、SK21とは性格が異なり、884年直後に廃棄された土壙と考えられる。このように、SK20出土の土器群は9世紀の後半から末の一括資料と考えられ、遺構の切り合い関係および土器の型式差などよりSK23、SK21がSK20よりも古く、SD13第4層土器群はそれより新しいものと考えられる。また、SK23土器は、形態、調整、法量から平城宮Ⅶ(820年頃)の標準資料であるSE311-Bより新しい要素をもつことから、9世紀の中頃から後半と考えられる。SK21土器は、SK20土器とほぼ共通する特徴をもつことから、SK23土器よりもSK20土器に近似する時期が考えられる。一方SD13第4層土器は、SK20土器にみられない新しい要素が出現することなどから9世紀末から10世紀前半の時期が想定される。SD12土器、SD14土器は、溝出土により、形態、調整、法量もほぼSK23土器からSD13第4層土器までの特徴をもち、9世紀の中頃から10世紀前半までの時期が考えられる。

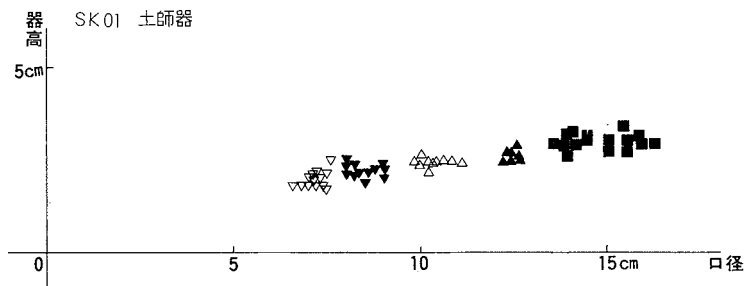
第2層出土土器

第2層より土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、磁器などが出土し、土師器が多数を占める。器種の構成は、土師器皿AⅠ、AⅡ、AⅢなどの供膳形態の土器が多数を占める。調整手法も大きくa群、b群、c群が含まれている。また瓦器碗片、玉縁の口縁をもつ白磁片など種々なものを含んでおり、かなり時期的な幅がある。平安京四条一坊井戸出土の寛治5年(1091)の墨書銘をもつ須恵器に伴う土器群^{註10}や、鳥羽離宮田中殿跡出土の土器群^{註11}に共通する土器を含むことから、中心となる時期は、12世紀代を想定することができる。なお、緑釉陶器、灰釉陶器、二彩陶器などは、12世紀代よりも古い時期の混入遺物と考えられる。

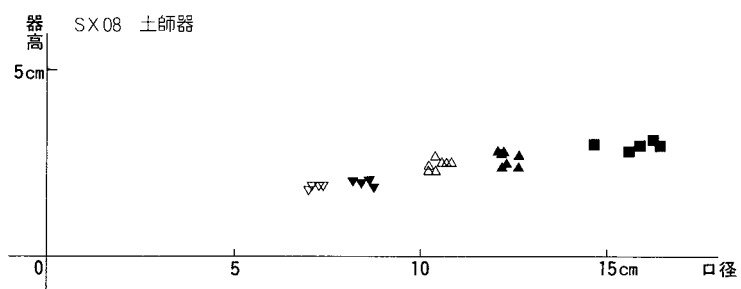
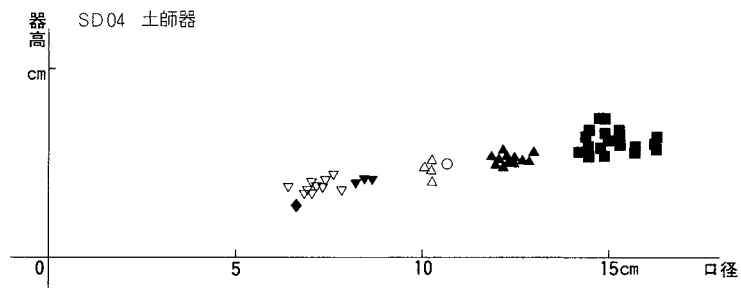
SK01、SD04、SX08 出土土器

SK01、SD04、SX08の各遺構から出土した土器群は、土師器皿の形態、調整、法量などから、ほぼ同型式で、ほとんど時期差のない土器群と考えられる。これらの土器群の器種構成は、各々の違いはあるが、圧倒的に土師器皿が多数を占める。これらの遺構からは瓦器の碗が1点の出土もなく、瓦器碗消滅以降の土器群と考えられる。現在、瓦器碗の消滅に関しては、橋本久和氏^{註12}、白石太郎氏^{註13}、尾上実氏^{註14}の研究などによりほぼ15世紀初頭前後の時期があげられている。また、これらの土器群と相似する土器群として、吉田近衛町遺跡SK02～04、臨川寺旧境内遺跡SK06、19、20がある。前者は、土師器皿の口縁端部の形態、法量などが異なり、古い様相を示している。後者は、形態は類似するが、やや深い器形がある

ことから、これも古い様相を示している。以上のことから、土器群は15世紀の前半よりやや下る時期が考えられる。



2



- 皿A I ▽ 皿G
- ▲ 皿A II ○ 皿H I
- △ 皿A III ◆ 皿H II
- ▼ 皿A IV

tab. 19 土器法量表 (4)

土器の使用形態

SD38 土器

SD38 は、北野廃寺創建時の東限を界する南北溝である。ここから出土した土器群は、寺で使用され廃棄されたものであろう。

まず SD38 下層土器を用途別にみると、土師器では、食器 44.6%、煮炊具 55.4%、須恵器では食器 69.8%、貯蔵器 30.2%である。土師器、須恵器の両者をあわせると食器が全体の約半数を占める。食器のうち、土師器と須恵器の比率は 3:2 で土師器の占める割合が高い。食器としては、盤などの大きな器種を含むが、土師器杯 C・杯 X、須恵器杯 G・杯 H の類が多数を占める。皿類は少量にすぎないが、高杯は土師器、須恵器ともに多い。しかし、食器が 52.5% とほぼ半数であることは、平城宮出土例などの比率に比べてかなり少ない。

一方、煮炊具が食器と同数出土し、平城宮跡出土に比べて多いことがある。特に甕が多数を占め、大形小形とも多い。このように煮炊具が比較的多いということは平城宮 SD485 や船橋遺跡の場合とほぼ共通する。

SD38 中層土器は、土師器として食器 61.7%、煮炊具 38.3%、須恵器として食器 84.7%、貯蔵器 15.3%である。土師器、須恵器とも食器が過半数を占め、両者をあわせると全出土量の 71.5% が食器である。このことは下層土器に比べ食器が増加する傾向を示す。食器のうち、土師器と須恵器の比率は 1:1 と下層土器より須恵器が増加する。食器は下層で認められた盤などの大形の器種はなく、土師器では杯 C、杯 X 類と伴に皿が増す傾向がある。須恵器では杯 G、杯 H が多数を占め、皿が出現する。しかし、土師器では杯 X がほぼ消滅する傾向をもつのに対し、杯 C I、C II、C III と器種分化が確立し、その量も増加する傾向をもつ。須恵器も杯 H が減少するのに対し、杯 G が増加し、杯 B も出現する。下層土器と比べ、器種構成もかなり変化する傾向を示す。しかし、高杯の出土数は依然として多い。

一方、煮炊具の土器はやや少なくなる傾向をもつ。特に、小型の器種が著しく減少する。このことは、小形の甕による煮炊を行う必要性が減少したことを物語っていると考えられる。貯蔵器は下層土器と同様に少ない。

SD38 上層土器は、土師器が食器 21.6%、煮炊具 78.4%、須恵器が食器 88.9%、貯蔵器 11.1% で、土師器では煮炊具が圧倒的多数を占め、須恵器では食器が圧倒的に多い。土師

器、須恵器の両者をあわせると食器が過半数以上を占める。食器のうち土師器と須恵器の比率は1:9とほとんどを須恵器が占める。このことは、下層、中層では土師器が過半数以上を占めるのに対し、まったくその内容が異なり、須恵器が食器の多数を占める特異な状態である。食器の構成をみると、土師器は中層と同様に杯C類が多数を占め、杯A類がそれに次ぐ。須恵器は、杯Hがほとんど消滅し、杯Gが多数を占める。しかし杯Gと同じ器形で蓋を伴わない杯Aが出現することや、杯Bが多くなる傾向をもつ。また、下層、中層でみられた高杯が上層ではまったく認められない。このように食器の器種構成の上で、中層に比べて大きく変化していることがうかがえる。

煮炊具としては土師器がすべてを占め、全出土数の24.6%である。このことは、下層、中層同様、比較的煮炊具の割合が高い。また煮炊具の中では甕が多数を占めるが、中層と同様、小形の甕が減少する傾向を示す。貯蔵器は、全出土数の7.6%と下層、中層同様、その占める比率は少ない。

以上のことから、SD38 土器は、食器の器種構成は下層、中層、上層と各々相違が認められるが、全体として煮炊具は平城宮跡 SK219^{註17}、SK820^{註18}などと比べて多いといえる。煮炊具が多いということは、平城宮 SD485^{註19} および船橋遺跡の器種構成に類似し、多人数の食器を使用する給食や法要などの行事で使用された器種構成と異なり、寺の厨房などで使用された土器群の性格が強いと考えられる。

SK23 出土土器

SK23 では土師器 90.3%、黒色土器 0.9%、緑釉陶器 2.8%、須恵器 6.0%で土師器が最も多い。黒色土器、緑釉陶器、須恵器の占める割合は極めて低い。このSK23には、灰釉陶器が一片も含まれていない。SK23の使用形態の内容は、食器 72.5%、貯蔵器 5.6%、煮炊具 21.9%である。

食器には、土師器 95.0%、黒色土器 0.6%、緑釉陶器 3.8%、須恵器 0.6%で、土師器が多数を占める。食器の器種構成は大形の器形はなく、杯B、高杯も少量で、ほとんどを杯A、皿Aが占める。貯蔵器は須恵器だけである。この須恵器の構成は、大形貯蔵の甕をまったく含まず、壺Eの食器に準じる小形貯蔵器が占める。

このようにSK23出土の土器は、豊富な器種で構成されているのではなく、極めて単純な器種で占められるものである。

SK21 出土土器

SK21 では、土師器 85.2%、黒色土器 2.7%、緑釉陶器 2.7%、灰釉陶器 0.9%、須恵器

8.5%の比率で出土し、土師器が圧倒的多数を占める。黒色土器、緑釉陶器などの比率は依然として低いがSK23に比べてやや増加する傾向をもつ。ここでは、わずかながら灰釉陶器が含まれる。また使用形態の内容は、食器65.5%、貯蔵器6.7%、煮炊具27.8%と、食器が多数を占める。

食器では、土師器89.7%、黒色土器2.1%、緑釉陶器4.1%、灰釉陶器0.7%、須恵器3.4%で、土師器が多数である。その器種構成は、SK23同様、杯B、高杯などは少量で、杯A、皿Aが主流を占める。貯蔵器は、須恵器と少量の灰釉陶器だけである。器種構成は、壺Eなどの小形貯蔵器が多数を占め、やや大形の貯蔵器も含む。煮炊具としては、土師器甕がほとんどを占め、やや小形の煮沸器として黒色土器の甕が少量ある。

このようにSK21土器の使用形態は、各々の差はあるが、SK23土器と共通する特徴をもつ。
SK20 出土土器

SK20では、土師器83.1%、黒色土器1.2%、緑釉陶器5.0%、灰釉陶器0.9%、須恵器9.8%の比率で出土している。黒色土器、灰釉陶器は少量であるが、緑釉陶器はSK23、SK21に比べて増加している。使用形態の内容は、食器78.7%、貯蔵器7.9%、煮炊具13.1%、ほかに黒色土器の風字硯を含む。

食器では、土師器89.5%、黒色土器0.7%、緑釉陶器6.3%、灰釉陶器1.1%、須恵器2.4%とSK23、SK21同様土師器が圧倒的多数を占め、緑釉陶器はやや増加する。器種構成は、杯A、皿Aが圧倒的多数でその主流を占める。貯蔵器は、須恵器だけで占められるが、SK23、SK21と同様に、壺Eなどの小形貯蔵器がほとんどを占め、甕などの大形貯蔵器は少量である。

SD13 第4層土器

SD13第4層では、土師器80.5%、黒色土器2.3%、緑釉陶器3.3%、灰釉陶器3.8%、須恵器10.1%と土師器が圧倒的多数を占め、黒色土器、灰釉陶器がやや増加する傾向がある。特に注目すべきことは、灰釉陶器が緑釉陶器と比べ、わずかであるが数量が逆転することである。使用形態の内容は、食器67.6%、貯蔵器9.1%、煮炊具2.3%と、食器が多数を占める。

食器では、土師器84.6%、黒色土器3.4%、緑釉陶器4.9%、灰釉陶器5.6%、須恵器1.5%と土師器が多数を占める。須恵器が食器としてほぼ消滅するのに対し、黒色土器、灰釉陶器がSK23、SK21、SK20に比べかなり増加する傾向をもつ。貯蔵器は、須恵器で占めているが、壺Eの小形貯蔵器が圧倒的に多く、大形貯蔵器は少量にすぎない。

このように、貯蔵器、煮炊具にほとんど変化はないが、食器において、黒色土器がやや増加する傾向をもち、緑釉陶器と灰釉陶器が数量的に逆転することは、平城宮 SD650B の状況と類似し、灰釉陶器の量産化の傾向をうかがわせるものである。

SD12 出土土器

SD12 では、土師器 62.5%、黒色土器 1.8%、緑釉陶器 5.4%、灰釉陶器 8.9%、須恵器 21.4%と土師器が半数以上を占め、須恵器がこれに次ぐ。ほかに比べて灰釉陶器が多く、黒色土器は少量である。使用形態の内容は、食器 60.2%、貯蔵器 19.0%、煮炊具 20.8%で、上述した遺構に比べ、食器がやや少なく、貯蔵器がいくらか多い。

食器では、土師器 71.3%、黒色土器 1.0%、緑釉陶器 8.9%、灰釉陶器 12.9%、須恵器 5.9%と土師器が圧倒的に多く、灰釉陶器が次ぐ。黒色土器、須恵器は少量である。ほかの遺構も同様であるが、黒色土器が少ないことは調査区内での平安時代の遺構の特徴とも考えられる。また器種においては、ほかの遺構と異なり、やや高杯が多い。貯蔵器には、須恵器 83.4%、灰釉陶器 13.3%と須恵器がほとんどを占める。甕などの大形貯蔵器はいくらかあるが壺 E・瓶などの小形貯蔵器が多数を占める。

SK18 出土土器

SK18 では、土師器 93.3%、黒色土器 0.8%、緑釉陶器 4.2%、須恵器 1.7%と土師器が圧倒的多数を占め、灰釉陶器は 1 点もなく、黒色土器、須恵器は少量である。使用形態の内容は食器 86.7%、貯蔵器 2.5%、煮炊具 10.8%と食器が多いが、貯蔵器はほかの遺構と比べ少量である。

食器では、土師器 95.2%、黒色土器 1.0%、緑釉陶器 3.8%と土師器が多数を占め、器種は杯 A、皿 A がほとんどである。貯蔵器は、須恵器と緑釉陶器で占め、すべて小形貯蔵器である。

SD14 出土土器

SD14 では、土師器 82.4%、黒色土器 1.4%、緑釉陶器 1.9%、灰釉陶器 1.7%、須恵器 12.3%、輸入陶磁器 0.3%の比率で出土した。この遺構では緑釉陶器と灰釉陶器がほぼ同じ比率で出土し、少量ではあるが中国磁器が出土することが注目される。使用形態の内容は、食器 82.4%、貯蔵器 9.8%、煮炊具 7.8%である。

食器では、土師器 91.2%、黒色土器 1.0%、緑釉陶器 2.0%、灰釉陶器 1.4%、須恵器 4.4%と土師器がほとんどを占め、器種としては杯 A、皿 A が主流を占める。貯蔵器としては、須恵器 88.5%、緑釉陶器 2.9%、灰釉陶器 5.7%、輸入陶磁器 2.9%の比率で出土し、壺 E、

瓶などの小形貯蔵器が占める。

以上、平安時代の遺構出土土器の使用形態について述べてきた。その特徴として、食器が圧倒的に多く、貯蔵器も壺Eなどの食器に準ずる小形貯蔵器が主流を占めるために、ほとんどが食器に使用される土器と考えられる。この食器を構成しているのは、土師器が基本となっているが、平城宮 SD650 に比べて黒色土器が少ない特徴がある。この反面、須恵器甕などの大形貯蔵器が少ないことも特徴としてあげられる。

SK01 出土土器

SK01 では、土師器 91.5%、瓦器 3.9%、須恵器 0.7%、輸入陶磁器 3.9%で土師器がそのほとんどを占める。使用形態の内容は食器 95.4%、貯蔵器 0.7%、煮炊具 3.9%と食器が圧倒的多数である。

食器では、土師器 95.9%、輸入陶磁器 4.1%である。その器種は少量の高杯を除いたほかは、皿類である。煮炊具としては瓦器がすべてである。

SD04 出土土器

SD04 では、土師器 96.0%、瓦器 0.8%、輸入陶磁器 2.4%、陶磁器 0.8%で SK01 よりも土師器がそのほとんどを占める。使用形態の内容は、食器 99.2%、煮炊具 0.8%とわずかな煮炊具を含むだけである。

食器では、土師器 96.7%、輸入陶磁器 2.5%、陶磁器 0.8%で、SK01 と同様、陶磁器が占める比率は極めて低い。

SX08 出土土器

SX08 では、土師器 74.5%、瓦器 10.6%、陶磁器 14.9%で土師器が主流を占め、輸入陶磁器は1点も含まれない。使用形態の内容は食器 74.5%、貯蔵器 14.9%、煮炊具 6.4%、その他 4.2%の比率である。

食器は、すべて土師器で、輸入陶磁器、陶磁器は1点もない。貯蔵器では陶磁器が占め、煮炊具では瓦器が占める。

以上のことから、室町時代の遺構より出土した土器は、食器が圧倒的多数を占める。その内容は土師器が基本となり、輸入陶磁器や国産陶磁器が占める比率は極めて低いことが指摘できる。

註

1. 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ」奈良国立文化財研究所学報第27冊 1976 P.28～P.32
2. 同上 P.32、P.33
3. 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査概報3」1973
4. 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財研究所学報第31冊 1978
5. 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査概報1」1971
6. 註3に同じ
7. 飛鳥Ⅴ期の資料としては、藤原宮東大溝SD105(奈良県教育委員会「藤原宮」1969)などがある。
8. 最近の調査において「野寺」という墨書土器が北野廃寺より出土した。この結果文献に書かれている野寺と北野廃寺が同一の寺であることが判明した。
9. 10世紀前半の土器を知るための具体的な絶対年代を決定する資料は現在のところ不明であるが、平安宮左兵衛府SD01(「平安宮左兵衛府跡」京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ)出土土器が10世紀中頃にあてられている。この土器群よりSD13第4層土器の方が型的に古く、時代もこれより以前と考えられる。
10. 田辺昭三ほか「平安宮発掘調査報告-左京四条一坊-」平安京調査会 1975
11. 「鳥羽離宮跡・史跡西寺跡」京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅳ
12. 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」高槻市文化財調査報告書第13冊 1980年2月 P.92
13. 白石太一郎「越智氏居館出土の瓦器」古代学研究85 1977
14. 尾上実ほか「狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 1978
15. 平良泰久ほか「吉田近衛町遺跡発掘調査概要」京都府教育委員会 1978
16. 「臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告」京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ 1978
17. 「平城宮発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財研究所学報第15冊 1962 P.63～P.68
18. 「平城宮発掘調査報告Ⅶ」奈良国立文化財研究所学報第26冊 1976 P.77～P.86
19. 「平城宮発掘調査報告Ⅵ」奈良国立文化財研究所 P.38
20. 原口正三ほか「船橋Ⅰ」平安学園考古学クラブ

第Ⅵ章 結 語

調査の結果、古墳時代から室町時代に至る各時期にわたる多くの遺構を検出した。それらの遺構から出土した多量の遺物は、各時期の相対年代を究明する上で重要な示唆を与えるものである。ここでその成果をまとめ、新たに問題となったことを整理して以下に述べる。

まず、古墳時代に属する竪穴住居を1棟だけであるが検出したことである。その床面出土の土器により6世紀の後半と考えられ、この時期にすでにこの周辺に人々が生活を営んでいたことを傍証する。昭和50年(1975)日本住宅公団花園鷹司団地の調査、昭和52年(1977)常盤仲之町の調査で発見された7世紀の竪穴住居群との関連など、古墳時代の葛野における集落構造を解明する上で重要な手がかりを得た。

次に、北野廃寺と関連する遺構の中で、最も古い時期の遺構として築地状遺構 SA55 とこれに伴う南北溝 SD38 がある。これらの遺構は、7世紀前半にはすでに造られており、そして後半には廃絶する。調査区が部分的であるため不明な点はあるが、仮にこれらの遺構が築地と側溝であるならば、この時代における北野廃寺の東限と考えられ、創建年代および寺域について重要な示唆を与えることになる。

これらの遺構が廃絶した後、SK34～36の土壙群とSD37の東西溝が造られる。出土遺物などから7世紀後半から8世紀初頭までの遺構群と考えられる。即ち築地状遺構や南北溝の廃絶後、あまり時を移さず造られ、短期間に廃絶する。SK34～36の土壙群は、規模、形式、埋土の堆積状況、少量の遺物しか含まないことなどから、遺物を投棄したような土壙ではない。

この後も建築物を示す遺構は確認されなかったが、SK20～23の土壙群およびSD12～14の溝に代表される遺構群がある。これらの遺構群は、9世紀中頃以降から10世紀前半くらいまで存続したものと考えられる。これらの遺構から出土する遺物の中で、特にSK20から出土した「鶺鴒室」墨書銘の灰釉陶器段皿の発見は、北野廃寺の実体を解明する上で貴重な手がかりである。また、東西溝SD12に南北溝SD14が合流することから、この時期における寺域内のある区画を示すものといえよう。

その後、15世紀前半と考えられるSB50・51・54の掘立柱建物群と附属する柵列、溝、土壙、落込などの遺構群がある。これらの遺構群のうち、SB50・51、SA52および南北溝SD04は、

一定の方位を基準として存在する。しかしながら、これらの遺構群は、古墳時代から平安時代の遺構群を整地した上に成立しており、北野廃寺とどのように関連するかは、今後の周辺調査や資料の増加を待つ必要がある。

以上、調査区において確認した遺構を整理し、その歴史的な変遷を復原することを試みた。一方、これらの遺構から出土した遺物は、その重複関係や層位関係により、とりわけ7世紀および9世紀中頃から10世紀前半における土器変遷過程を把握するための貴重な手がかりである。しかし、これらの成果が得られた反面、新たな問題を投げかけた。まず8世紀前半から9世紀前半にかけての遺構群および10世紀中頃以降の遺構群をまったく確認しなかったことである。即ち、これは調査区における特殊な状況であるのか、あるいは北野廃寺全体として一般的なことであるのか、北野廃寺および周辺の歴史的変遷を考える上で重要な問題である。今回の調査は、市街化された地域の中での限られた部分的な調査であるため、発見した遺構や遺物についても規模や性格が不明な点が多い。古墳時代の竪穴住居群の解明、遺跡全体の規模、各時期における内部構造の究明、葛野郡の地割と寺域との関係、よりミクロな土器の構造的分析など、今後の調査資料の増加によって解決しなければならない課題であろう。

	T01	T02	T03	T04	T05	T06	T07	T08	T09	T10	T11	T12	T13	T14	T15	T16	T17	T18	T19	T20	T101	T102	T103	T104	T105	T106	T107	T108	T109	T110	T111	T112	T113	T114	T115	T116			
SD38 下層																																							0
" 中層																																							0
" 上層		1																																				1	
SD37			1	1																																		2	
SK26																																						0	
SK25																																						0	
SK24																																						1	
小計	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4		
SK28																																						0	
SK27																																						0	
SK26																																						0	
SK25																																						0	
SK24																																						1	
SK23																																						0	
SK22																																						0	
SK21																																						0	
SK20																																						2	
SK19																																						1	
SK18																																						0	
SD14																																						12	
SD13																																						4	
SD12																																						7	
柱穴																																						1	
小計	1	0	0	3	1	0	1	1	3	1	1	3	1	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	0	0	0	28			
第2層																																						22	
SK08																																						0	
SK04																																						1	
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
計	1	1	1	10	1	1	1	1	3	1	1	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	55		

Tab. 20 軒瓦出土一覽表

付章1 墨書土器銘「鶇室」の文献学的考察

井上満郎

(1)

墨書銘の判読については、両字ともに筆政・筆勢は確かな楷書体であり、容易であるといえる。第1字が「鶇」、すなわち角偏に鳥旁であることは疑えない。問題は第2字である。字体の中心部が土器回転台の中心部にあたっており、その突起が墨書字を不明確にしている。それによって一見したところ「室」か「堂」かの判別に迷う。しかし字の上部は明らかにうかんむりの第1画と認められ、堂字のような第1画から第3画にかけての墨色はない。また中心部の突起にかかる部分も、室字の第5画であり、右上から左下に斜めに、さらに右方向へ明確に筆が運ばれており、堂字第6・7・8画の「口」にはならない。

以上のように、墨色・墨跡・書体からの検討によって、銘文は「鶇室」と判読されるのが正しい。

(2)

では、この「鶇室」なる文字は何を物語るものであろうか。文献学的にこれを考えてみる。第1字の「鶇」については、「いかるが。斑鳩。鳥の名。」というのが字義である（諸橋轍次氏『大漢和辞典』）。文献学的にもこれは確かめられる。『和名類聚抄』（20巻本巻18）には「鶇 崔禹？食経云鶇（胡岳反和名伊加流加）貌似鶇而白喙者也、兼名苑注云斑鳩（和名上同見日本紀私記）鶇大尾短者也」とあるし、また『伊呂波字類抄』（第1、伊動物門）には「鶇 貌似鶇而白喙也 イカルカ」とある。『和名類聚抄』・『伊呂波字類抄』ともに平安時代の成立であり、また前者は特に墨書土器の示す年代と重なり、「鶇」が「伊加流加」・「イカルカ」と読まれ、字の意味が鳥の一種であることは確かである。

しかし第1字の「鶇」が鳥そのものを示すことはありえないだろう。検出した遺跡が寺院であることは確実であるし、寺院内に鳥を飼育する一室が設けられていたとは考えられない。仮にそうしたものがあつたとしても、そこに灰釉のかかった高級な土器が使用されるということは歴史常識的にもありえない。だとするとこの「鶇」は、鳥以外の何かを示しているものとするほかない。

第2次の「室」については、さしたる意味はないだろう。字義は「へや。いへ。すま

ひ。一家。穴。巢」などであり（諸橋轍次氏『大漢和辞典』）、1個の建造物あるいはその一部分を指す文字である。類似語に、院（正倉院・穀倉院など）、舎（伏舎・身舎・淑景舎など）、殿（校書殿・春興殿など）、堂（金堂・講堂・明経道堂など）、坊（華芳坊・春宮坊など）、館（鴻臚館・客館など）、房（僧房・小子房など）や、また、所（進物所・藏人所など）、間（鬼ノ間・孔雀間など）、局（勘解由使局・侍従局など）、曹司（職曹司・弁官曹司など）がある。「室」はどちらかといえば後者に近く、建物の一室という意味合いが強い。

『和名類聚抄』（20巻本巻10）には「室（無戸附）白虎通云黄帝作室以避寒暑音七（和名無呂）日本紀云無戸室（和名字豆無呂）」とあり、音は「シチ」、訓は「ムロ」であることがわかる。したがって、湯桶読み・重箱読みを配慮しないとすれば、「鶺鴒室」は音読すれば「カクシチ」、訓読すれば「イカルカ（ノ）ムロ」ということになる。

「室」の実際の用例を文献の中に求めてみるとどのようなものがあるだろうか。まず『古事記』では、スサノオのかかわる説話の中に「蛇室」・「呉公与蜂室」・「八田間大室」などの例がみえる（上巻）。それぞれ、蛇のいる部屋・呉公（ムカデ）と蜂のいる部屋・「柱間の数の多い大きな室」（武田祐吉訳註角川文庫版『古事記』）といった意味である。またヤマトタケルの西征に関するものとして、「故到干熊曾建之家見者、於其家辺軍団三重作室以居、於是言動爲御室楽、設備食物」（中巻・真福寺本）という表現があり、ここでは「室」は「家」を守る施設として築かれている。また「御室楽」といういわば新築祝が行われており、独立した建造物のことをも示している。同じことは清寧記にも「山部連小楯任針間国之幸時、到其国之人民、各志自午之新室楽」（下巻・真福寺本）とあって、「新室」=新築家の祝いとして「楽」=宴が行われた。

『日本書紀』における最も多い用例は「宮室」である。『古事記』にもみえるが、天皇の居所としての建物のことを称している。「新室」の語もみえており、「謙干新室」（允恭7年紀）・「適会縮見屯倉首縦賞新室以夜継昼」（顕宗即位前紀）などの例がある。ほかに「産室」（神代紀）・「玄室」（欽明16年紀）などや、「災難波百濟客館堂与民家室」（皇2年3月紀）の例もあって、「室」が一家やあるいは一軒の家をも示している。

『万葉集』にも「新室」は庶民の新築家として表われ（2351）、また長屋王の佐保の新築家が「室」と称されてもいる（1637・1638）。「石室」（397）・「菴室」（886）などの用例もあるが、記紀と違いはない。

以上の簡単な考察からも知れるように、「室」字は古代において部屋・建物などを示す

語としてしばしばもちいられている。平安時代には僧侶の居室を示すものとしてもちいられるようになることは周知のところであるが、宇多法皇が延喜4年(904)に仁和寺内に設けた居室を「御室」と称することもよく知られている。

(3)

「室」が一室、あるいは小規模な建物を示すということになれば、「鶯室」は「鶯にかかわる居室」ということになる。このとき、字意の中心になるのは「鶯」の方である。

「鶯」は「イカルカ」であるが、ただちに想起される「鶯」(イカルカ)は「斑鶯」であり、「斑鶯」を名とする斑鶯寺、すなわち法隆寺のことであろう。この寺は法隆寺とも称するが、斑鶯の地に創建されたところから斑鶯寺とも呼ばれたことはいうまでもない。斑鶯寺の名は推古天皇14年紀・皇2年11月紀・天智8年冬紀などに散見している。また、この「斑鶯寺」が「イカルカ(ノ)テラ」と読まれたことは、「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」(『寧楽遺文』中巻)に「是以聖徳法王受賜而、此物_波私可用物_{亦波}非有_止爲而、伊河留我本寺・中宮尼寺・片岡僧寺・此三寺分爲而入賜_波、伊河留我寺地_{平波}…」とあることから「イカルガ」寺と称したことは明らかである。「ハンキウ」寺と音読することもあったようだが(『伊呂波字類抄』第1)、普通は「イカルガ」寺と呼ばれていたと考えてよいだろう。

この「斑鶯寺」が「鶯寺」と書かれることはいつごろからはじまるのか。管見によるかぎり天平10年のことである。「施山階寺食封一千戸、鶯寺食封二百戸、隅院食封一百戸、又限五年施觀世音寺食封一百戸」(『続日本紀』天平10年3月丙申条)とあって、山階寺(興福寺)・鶯寺・隅院(海竜王寺)・觀世音寺に食封が施入されたという記事である。ただしこの「鶯寺」の「鶯」は『新訂増補国史大系統日本紀』の底本となった谷森健男旧蔵本では「鶯」ではなく「觸」となっている。しかし「觸寺」という寺院は歴史上に存在せず、また金沢文庫本・堀正意本や『日本紀略』などは「鶯」としているため、新訂増補国史大系本では「鶯」字が採用される。異本との校合ばかりでなく、加えて「鶯寺食封二百戸」という2百個の食封は「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」にある「合食封二百戸、播磨国揖保郡林田郷五十戸、但馬国朝来郡枚田郷五十戸、相模国足下郡倭戸郷五十戸、上野国多胡郡山部郷五十戸、右天平十年歳次戊寅四月十二日納賜平城宮御宇天皇者」とも一致する。日付に3月と4月の違いがあるが、内容に違いはない。したがって、天平10年(738)において法隆寺すなわち斑鶯寺は「鶯寺」と表記することがすでに行われている。

墨書銘「鶯室」の「鶯」が法隆寺のことを示すとすれば、「鶯室」はどのような歴史的存

在であろうか。墨書土器の出土が野寺（常住寺）であるとすれば、「鵜室」とのかかわりはでてこない。野寺は「北野に建てられた寺」という意味であろうし、野という語そのものも街に対応するものであるが、北野という呼称も大内裏北の野の謂で、平安京成立後の語であろうことは疑いない。また「野寺者^{本名常住寺} 桓武天皇御宇 延暦5年移建常住寺野寺也、遷都之時、自南京移渡於此京、帝御本尊也」（『阿婆縛抄』巻第200「諸寺略記」上）とあり、この延暦5年は誤記・誤伝であろうが、少なくとも平安遷都の時に野寺が創立（移建）されたということは示しているといえよう。この野寺と法隆寺とのかかわり、あるいは法隆寺創建者の聖徳太子との関係を見出すことは困難である。

「鵜室」と出土地との関係を考える場合、いま一つ参照される必要があるのは、北野廃寺の問題である。北野廃寺（あるいは白梅廃寺）について、これを旧広隆寺であるとする説の存在は周知のところである。出土が北野廃寺の一部であり、それが旧広隆寺だとすると、すなわち「鵜室」が旧広隆寺であるとすれば、容易に墨書銘の解釈はつく。北野廃寺が飛鳥・白鳳・奈良・平安の各時代にわたって継続した寺院であることは、出土する古瓦の編年より明らかである。北野廃寺が広隆寺の移転後の平安時代にまで継続していることが難点となるが、広隆寺の本体が太秦の地に移ってから規模を縮小して法灯を護って行ったと理解すればよい。そうした例はいくつかある。たとえば、飛鳥寺がその一つである。この寺が法興寺・元興寺とも称され、最古の寺院であることはいままでもないが、平城京に移転後も寺は飛鳥の地に維持され、いまに至るも止利仏師の作になる釈迦如来像が安置されている。薬師寺もそうである。天武天皇によって創建された高市郡の薬師寺は、平城京造営に伴って現在地に移転した。養老2年（718）のことである。にもかかわらず旧寺は依然として維持されており、本薬師寺と呼ばれて平安時代にも盛んであったことは史料的に明らかである。したがって、広隆寺の場合も、太秦へ移建後の寺名は明らかではないけれども、元の地に受け継がれて行ったとしても不自然ではない。

広隆寺は、これまた周知のごとく、秦 河勝が聖徳太子より受けた仏像を安置するために造立した寺院である。また秦氏と聖徳太子との関係についても、蘇我氏と漢氏の関係に同じく密接であったことはよく知られている。広隆寺には今も聖徳太子像を本尊とする桂宮院があり、太子との関係は深い。最もこの場合は後世に太子信仰の広がりにつれて併置されたとも考えられるが、当初から太子を信仰する堂宇があっても不思議ではない。「鵜室」とは、広隆寺の移転後も旧地に継続した広隆寺後身の寺に設けられた聖徳太子を祀る施設・部屋である、としてよいのではなかろうか。推論に推論を重ねた箇所が多いが、くわしく

はなお追って論究したい。

参考文献

太田茂比佐「ムロ・ムロヤ・オホムロヤ」（『建築史研究』14号）

喜田貞吉「山城北部の条里を調査して太秦広隆寺の旧地に及ぶ」（『歴史地理』25-1・2）

石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』総説編・各論編・図版編

足立 康『薬師寺伽藍の研究』

藤田経世編『校刊美術資料』上 寺院編

井上満郎「山背瑠鳩と秦氏」（『日本の中の朝鮮文化』45号）

付章 2 北野廢寺に關連する文献史料

北野廢寺の正確な寺名、沿革については今だ不明である。しかし、この寺に關する論文は、喜田貞吉氏が「山城北部の條里を調査して太秦廣隆寺の舊地に及ぶ」（『歴史地理』第25卷第1・2号）を發表して以來、廣隆寺移建説、野寺常住寺説などを述べた論文が多数今日までに發表されている。ここで再度、従來の研究を踏まえながら北野白梅町付近にあったと考えられる寺院を、文献を参考にして検討してみる。

正史に野寺の名が最初にみえるのは、『日本後紀』卷5延曆15年(796)11月辛丑の条で始用_レ 新錢_レ、奉_レ 伊勢神宮、賀茂上下二社、松尾社_レ。亦施_レ 七大寺及野寺_レ。（下略）とある。七大寺とともに野寺をあげていることは、野寺が七大寺と同様に重要視されていることを物語っている。

また時期は前後するが、『日本靈異記』下卷第35の「假_レ 官勢_レ 非理爲_レ 政得_レ 惡報_レ 縁」の条に

（前略）天皇信悲 以_レ 延曆十五年三月朔七日_レ 始召_レ 經師四人_レ 爲_レ 古曆_レ 奉_レ 寫_レ 法花經一部_レ 宛_レ 經六萬九千三百八十四文字_レ 動_レ 率知識_レ 學_レ 皇太子大臣百官_レ 皆悉加_レ 入其知識_レ 也 天皇勸_レ 請善球大德_レ 爲_レ 二講師_レ 請_レ 施岐僧頭_レ 爲_レ 讀師_レ 於_レ 平城宮野寺_レ 備_レ 大法會_レ 爲_レ 講_レ 讀件經_レ 贈救_レ 彼靈之苦_レ 也（下略）

とあり、平安遷都直後の延曆15年に平城宮野寺で大法會が行われたことがみえる。しかし、この文献で問題とされたのは、延曆15年に「平城宮」と記載されていることである。これについては、福山敏男氏「野寺の位置について」（『史迹と美術』昭和13年2月号）の論文中に、「平城宮」は「平安宮」と同義語であり、これは「平安宮野寺」のことであると解釈されている。

この二つの文献以前に野寺に關する史書がないため、創建については不明であるが、延曆15年(796)に新錢を奉納したり、大法會が催されていることから、この時期には、すでに寺の様相や伽藍が整っていたことがうかがえよう。

この野寺が南京より移建されたとする文献が二つある。それは『伊呂波字類抄』に

常住寺本尊薬師佛、件寺桓武天皇遷都之時、南京令移渡此京云々本御持佛也
次に、弘安2年(1279)1月23日云々の奥書のある『諸寺略記』巻第769に
一野寺者。本名常住寺。桓武天皇御宇。延暦五年移建常住寺。野寺遷都之時。自南京移
渡於此京。帝御本尊也。(下略)

とあり、野寺の移建説がだされた。しかし移されたのは寺ではなく御持佛ではないかとい
う疑問や、史料的価値など不明瞭な点が多く、足立康氏「野寺移建説に就いて」(『史迹
と美術』昭和13年)、藤沢一夫氏「山城北野廃寺」(『考古学』第9巻-2 1938年)など、
野寺の移建に否定的見解が多い。

延暦15年の記載の次にその名がみえるのは、『叡山大師傳』の中である。

延暦廿四年八月廿七日上表云。(中略)復命以後。勅國子祭酒和氣朝臣弘世。今大唐
請益受法供奉大徳最澄闍梨所將來天台法文。方欲流布天下習學釋衆。宣爲七大寺書爲
七通。即給禁中上紙。仰圖書寮。令書寫既訖。詔道證。守尊。修圓。勤操。慈蘊。
慈完等法師。於野寺天台院。令受學披閱新寫天台法文矣。

最澄が大唐より天台宗を学び帰朝した頃、野寺の内に天台宗に関係する天台院の存在がみ
られることは、注目すべき点である。すなわち、野寺と最澄との関係をうかがわせるもの
であろう。

次に正史にみえる野寺および常住寺に関する文献をあげてみる。

『日本後紀』巻28 弘仁11年(820)閏1月丁卯

先レ是。鑄ニ銅四天王像於常住寺ニ。至レ是功成。遷ニ近江國梵釋寺ニ。

『日本後紀』巻36 天長5年(828)6月丁丑

幸ニ同範ニ。右衛門獻レ物。雷鳴雨降。山崩水溢。屈ニ清行僧卅人於野寺ニ。轉ニ誦
大般若經ニ。防ニ水害ニ也。

『續日本後紀』巻4 承和2年(835)12月丙戌

四天王寺十禪師准ニ梵釋常住兩寺僧ニ。每年一口預ニ宮中金光明會聽衆ニ。

『續日本後紀』巻6 承和4年(837)4月丁巳

(前略)亘レ令フ梵釋。崇福。東西兩寺。東大寺。興福。新薬。元興。大安。薬師。
西大寺。招提。本元興。弘福。法隆。四天王。延暦。神護。聖神。常住等廿ヶ寺。每
旬輪轉。自ニ五月上旬ニ。迄ニ八月上旬ニ。誓願薰修上。

『文徳実録』巻10 天安2年(858)1月庚申

常住寺西南別院火

『三代実録』卷10 貞觀7年(865)4月15日乙丑

(前略) 常住寺十禪師傳灯法師位延庭奉言。(下略)

『三代実録』卷45 元慶8年(884)3月15日丙子

夜大雷雨。震_レ 常住寺塔_一。火自_レ 第五層_一 起。延燒_レ 講堂。金堂。鐘樓。經藏。步廊。中門_一。一時蕩盡。

『三代実録』卷47 仁和元年(885)4月乙卯朔

(前略) 春澤申云。爲_レ 親母_一 欲_レ 修_レ 小善_一。向二常住寺_一。是燃灯之具。非_レ? 心_一 火之謀_一。因而置_レ 之。

般若経が輪転された記載などがみられるが、その中で『文徳実録』天安2年1月の記載と『三代実録』元慶8年3月15日の記載は、特に注目すべきものである。すなわち、常住寺の伽藍に関する文献が初めてみえ、しかも七堂伽藍を配して西南別院まであったことがうかがえる。そして、その伽藍は元慶8年3月15日の雷雨により塔の五層から出火し、ことごとく灰となったのである。その後、どのように復興、再建されたかは、文献にその記載がなく不明であるが、延長5年(927)撰の『延喜式』に次のように散見できる。

卷十二中務省

凡毎月十五日遣_下内舍人_一。勞_レ 問常住寺十禪師_一。兼奏_中 修法行事_上。

卷十五内藏寮

造_レ 五月五日昌蒲珮_一 所。(中略)

右料物送_レ 糸所_一 造備。但件昌蒲珮。供御并人給料外十五條。内堅爲_レ 使供_レ 諸寺_一。

東西。梵釋。崇福。常住。東名。出雲。嘉祥。聖神。法親。廣隆。東葉。珮珮。佐比。寶皇。

卷二十一玄蕃寮

御齋會

凡每年起_レ 正月八日_一。迄_レ 于十四日_一。於_レ 大極殿_一 設_レ 齋。講_レ 說金光明最勝王經_一。(中略) 聽衆者。均擇_レ 六宗學業有_レ 聞者_一 次第請之。天台宗僧及四天王。梵釋。常住等寺。十禪師各一人亦預之。前_レ 齋四日。錄_レ 名申_レ 省。省申_レ 官。

事見_二 儀式_一。

別当三綱

凡四天王。梵釋。常住。仁和寺等三綱。各以_レ 十僧内_一 補之。

常住寺供養

凡常住寺十禪師并從沙彌。童子等供養者。威儀師一人專_レ當其事_一。各令_レ本時毎月運送_一。

卷三十三大膳下

聖神寺季料 常住寺
准。此。（下略）

七寺孟蘭盆供養料。 東西寺、佐比寺、八坂寺、
野寺、出雲寺、聖神寺。（下略）

卷三十五大炊寮

聖神寺季料 常住寺
准。此。

卷三十六主殿寮

諸寺年料油（中略）

常住寺季料。三斗五升二合。

卷四十造酒司

（前略）聖神寺佛聖二座。一季供養料。酢二斗六升四合。 常住寺
准。此。並寺使來受。

卷四十主水司

（前略）常住寺佛聖二座季料米。并正月十五日七種粥。一同_レ聖神寺_一。

東西両寺、聖神寺などの諸大寺とともに記載されている。すなわち、元慶8年の火災で主要伽藍を焼失したにもかかわらず、その勢いが続いていることがうかがえよう。

延喜式の次にその名がみえるのは、藤原通憲編による『本朝世紀』第2巻に

天慶元年七月三日戊申。今日於_レ諸寺諸社_一披_レ下_下可奉_レ讀_一仁王經一万部_一宣旨_上。是依_レ地震未_レ休也。

とあり、後に元慶寺 仁和寺 醍醐寺 法性寺 勸修寺 海印寺 神護寺 極樂寺 禪林寺 安祥寺 常住寺 石清水 賀茂上社 同下社 平野社 松尾社 稻荷社 大原野社 廣隆寺感神院 大屋寺をあげ、各々十口ないしは七口の使者人数がかかれてあり、常住寺は十口とされている。このように天慶元年(938)においても、その勢いは保持されているようであるが、『本朝世紀』以降の平安時代の文献には、その名がみられない。

その後、文献上に名をみせなかった野寺もしくは常住寺の名が、室町時代前半の重要史料としての『師茂記』巻31 貞治3年(1364)7月の条に

延久建久文永初度被用御誦經寺之事

延久

依日次不宜臨時被立之

初七日

常住寺 仁和寺 廣隆寺 東寺 西寺 円成寺 円宗寺

建久

初七日

常住寺 仁和寺 東寺 西寺 延暦寺 法勝寺 蓮花王院

文永

依重日不被行之

初七日

常住寺 仁和寺 東寺 西寺 円宗寺 蓮花王院 淨金剛院

『師茂記』卷 45 応安 7 年 (1374) 2 月の条に

廿四日被立後光嚴院三七日御誦經寺院□七ヶ寺 常住寺 仁和寺 東寺 西寺
蓮花王院 泉涌寺 天龍寺

とあり、延久年間 (1069 ~ 1074)、建久年間 (1190 ~ 1199)、文永年間 (1264 ~ 1275)、
応安 7 年に御誦經寺院としてあげられている。このほかにも散見できる。

常住寺の名がみえる史書は『師茂記』が最後であるが、鎌倉時代中頃に成立したと考えられる『拾芥抄』下巻に、「廿一寺 公家恒例被_レ行_ニ 御讀經_ニ」として廣隆寺 上出寺 常住寺 珍皇寺 清水寺 八坂 聖神寺 東寺 西寺 延暦寺 法性寺 貞觀寺 極樂寺 元慶寺 仁和寺 下出雲 祇園 法成寺 鴨神宮寺 六角堂 佐井寺 を 21 寺にあげている。

また、諸寺の項に

野寺 常住寺、薬師
稲原、

と、野寺は常住寺と同一の寺とされている。

以上、野寺、常住寺に関する文献資料をあげてみた。そして、これらの文献からみて、野寺、常住寺は、延暦 15 年 (796) 以前にすでに成立していた寺であり、天安 2 年 (858) の西南別院の火災、元慶 8 年 (884) 七堂伽藍の消失にあいながらも、応安 7 年 (1374) までその歴史をたどることができた。この間伽藍の規模などが火災によりどのように変化したかは不明であるが、室町時代の前半まで歴史上に姿を現していたことは明確である。

このように野寺、常住寺について述べてきたが、一方、北野廃寺 - 広隆寺移建説の根拠となった文献がある。それは『朝野群載』卷 2 所収 承和 3 年 (836) の「廣隆寺縁起」に
(前略) 但本舊寺家地九條河原里一坪二坪十坪十一坪十三坪十四坪廿三坪廿四坪廿六坪卅四坪。同條荒見社里十坪十一坪十四坪十五坪合拾肆町也。而彼地頗狹隘也。仍遷
□□□五條荒蒔里八坪九坪十坪十五坪十六坪十七坪。■六ヶ坪之内。■施入陸地

肆拾肆町肆段壹陌玖拾貳歩也。(下略)

とあり、広隆寺の旧地が、はじめ九条河原里および同条荒見社里のあわせて14町であったが、非常に狭いため五条荒蒔里八坪九坪十坪十五坪十六坪十七坪のあわせて六ヶ坪の内
に遷して、四十四町四反百九十二歩を施入したと記載されている。この五条荒蒔里に関し
ては、現在の広隆寺地が五条にあたり、『平安遺文』所収「廣隆寺資財交替實録帳」の記
載と一致する。しかし、旧地である九条河原里、荒見社里に関して資財帳や交替實録帳に
はふれられてなく不明であるが、九条に係る文献がある。それは『類聚三代格』巻1
神社事に

太政官符

應_レ宛_ニ正一位平野神社地一町_ニ事

在_ニ山城國葛野郡上林郷九條荒見西河里廿四坪_ニ

四至 東限_ニ荒見河_ニ 南限_ニ典藥寮園_ニ
西限_ニ社前東道_ニ 北限_ニ禁野地_ニ

と、平野神社地が九条荒見西河里二十四坪にあることがうかがえる。すなわち、広隆寺の
旧地である九条河原里および荒見社里が九条荒見西河里に近接したところにあったと考え
られる。

このことから北野廃寺 - 本広隆寺説が提起されたが、葛野郡の条里が今だ不明であり、
北野廃寺と本広隆寺とを結びつける根拠も不十分であると考えられる。

以上、北野白梅町付近にあったと考えられる寺に関する史料をあげてきた。しかし、上
述した、『諸寺略記』や『拾芥抄』に記載されているように、野寺本名常住寺であることは、
これらの文献だけでは不十分であり、北野廃寺が野寺、常住寺であることも今だ不確証で
ある。これらの不十分な文献資料も発掘調査の成果により明らかにされて行くだろう。

PUBLICATIONS OF KYOTO ARCHAEOLOGICAL
RESEARCH INSTITUTE (INC.)

NO.7

EXCAVATION OF SITE OF THE KITANO-HAIJI (abandoned temple)
ENGLISH SUMMARY

KYOTO ARCHAEOLOGICAL RESEARCH INSTITUTE (INC.)

1983

EXCAVATION ON SITE OF THE KITANO-HAIJI (abandoned temple)

The survey area is the grounds belonged to Kitano-Hakubai-chō branch of Kyoto Shinyōkinko at no. 63 ~ 64, Kitano-Hakubai-chō, Kita-ku, Kyōto City. Excavation studies began on March 7th, 1977 and had been carried out until June 4th.

The survey area covered about three hundreds fifty square meters.

Survey on site of the Kitano-Haiji (abandoned temple) began on 1936 and it had been carried out until 1965 in the form of 11 times of surveys under construction and excavations around Kitano-Hakubai-chō.

In the result of that, a part of basement piled up with tiles, pits of abandoned tiles ditches and etc., were unearthed. Especially by means of the round roof-end-tiles with ten petals of lotus ornament of the Asuka “飛鳥” period were unearthed, it might be thought the oldest site of temples in Kyōto City.

In the meanwhile, a great many of treatises on Kitano-Haiji were published by the academic circles, for the history and relation to the literature. But, indistinct points are so many and then, it might be thought a blurred temple.

The above mentioned site locates on the hills rising 57 meters ~ 60 meters above the sea level among the terraces made by a lake easily descending from the west-north or the north of Kyoto basin to the south. The Hirano shrine, the Kitano shrine and the Daishōgun shrine etc., closely connected with the Imperial Court, are there dotted around the Kitano-Haiji. On the one hand, the Narabigaoka burial mounds, and the Uzumasa-umazuka, the Hebizuka and etc., so many sites connected with Hatauji “秦氏” who wielded power in Kyoto are there at Sagano. That is to say, the said ones locate at a corner of Sagano which was an advanced place of Kyoto before the Heian period. This fact is important to know the character of the said ones.

The distinct structural remains indicating a hall of the Kitano-Haiji were not unearthed by the current excavation. But residential remains at the end of the Kofun period, 16 lines of ditches from the Asuka period till the Muromachi period, 33 pits, structural remains in the shape of Tsuiji “築地” (mud wall with a roof), 2 lines of fences, 2 houses of Hottatebashira-type buildings and etc., were unearthed.

The Tateana-type dwelling-house site was only one unearthed at the west end of the excavation area. Plan is square with round corners, surrounded by ditches. 掘キモノク an important material か
A horseshoe-shaped oven was set on the north side. It might be thought that they 掘キモノク an important material か

belonged to the end of the Kofun period by means of a Haji-type pottery jar and Sue-type pottery unearthed. These residential remains are good enough to be an important materials for study in thinking of the structure of villages of the Kofun period at Sagano, with that of Hanazono-Takatsukasa housing estate of Japan Housing Public Corporation, the new campus of Hanazono University and Tokiwa-Nakano-chō dwelling-house site excavated in the recent years.

There are structural remains in the shape of Tsuiji and a ditch running in a south-north direction being almost parallel to each other and indicating the due north.

The structural remains of Tsuiji have a length of 12 shakus “尺” on an unit of beam and a length of 7 shakus on an unit of girder being 9 pillars ^{要チェック} ~~holes~~ _{digged} ^か unearthed in a south-north direction.

There are not so many pits remained, of which each one has been destroyed by the later structural remains. The shape of a hole digged was circular with a diameter of 70 centimeters ~ 1 meter and a depth of 60 centimeters. On the one hand, a ditch was U-shaped with a width of 2 meters and a depth of 1.5 meters. It might be thought that they had existed on the 7th century in view of a great deal of Haji-type potteries, Sue-type potteries and a kind of tile unearthed.

The ditch running in an east-west direction sways a bit in a west-south direction, but crosses to the due north straight. It has a width of 2 meters and 50 centimeters and a shallow depth of 60 centimeters. The pits are irregular-shaped of which the scales too are not fixed with a depth of nearly 80 centimeters. The unearthed relics are few, but it might be thought that they had existed from the second half of the 7th century till the end of that in view of unearthed Haji-type potteries and Sue-type potteries.

In the next place, there are ditches and pits ^{要チェック} ~~as~~ _{divided} ^か as the principal structural remains of the Heian period. Ditches are 4 lines of ones ^{要チェック} ~~running~~ _{divided} ^か in a south-north (including 3 lines of small ones) and 2 lines of ones running in an east-west direction.

The widths of them are ~~devided~~ ^{divided} into 60 centimeters and about 2 meters and 50 centimeters, and many of them are comparatively shallow. But a ditch unearthed in the south-east corner of the excavation area was only the north side, of which a width was 3 meters up and a depth 90 centimeters. By means of that piling with sand and gravel was seen, it might be thought to be a ditch pouring clean water of which the character was different from the other one.

Most of pits are irregular-shaped of which depth, too, is not fixed, but great deal of earthen wares **were** unearthed from them, who were for waste disposal. Most of bowls of

Haji-type potteries and a kind of plate among unearthen earthen wares were appropriated for lump use, in the temple.

These ditches and pits are roughly classified to 3 periods thinking of crossing each other, but most of structural remains had become extinct in the second half of the Heian period.

Structures of the Muromachi period were constructed by means of readjusting the land and raising the ground level on the ones of the Asuka period and the Heian period. Unearthed structural remains were a house in an east-west direction having a dimension of 4 kens “間” × 1 ken up, a house in a south-north direction of 1 ken × 3 kens up, a L-shaped fence surrounding these two houses, a ditch running in a south-north direction, pits and etc.

These structural remains are all Hottatebashira-type houses and seen to extend to the north and the south from the excavation area. The ditch running in a south-north direction on the east side of the L-shaped fence having a width of 60 centimeters ~ 1 meter and a depth of 60 centimeters might be thought to be the east limit of the Kitano abandoned temple. It does not bring to light whether these structural remains of the Muromachi period have direct relation to the Kitano-Haiji or not.

The principal relics unearthed by the current survey are a kind of tile, Haji-type pottery, Sue-type pottery, green glazed and grey glazed earthen wares and iron nails etc., belonging from the end of the Kofun period till the Muromachi period.

Many kinds of roof-end-tiles were unearthed, that is to say, 23 pieces of round roof-end-tiles and 19 pieces of flat roof-end-tiles including the round roof-end-tile of the Asuka period. Especially because the round roof-end-tile was made from the same kiln as no. 1 kiln of Hataeda-Inari, the relation between a producing place and consuming distinct brought to light. On the one hand, these were many kinds of flat tiles and round tiles, among which a lettered tile written Ubō “右坊” was unearthed, and then it brought to light that the tiles made from a kiln for the Heian place too had been appropriated.

Earthen wares too covered many periods, but a majority of Haji-type potteries and Sue-type potteries were unearthed from the structural remains seen to be from the beginning of foundation of the Kitano-Haiji. On the other hand, the most relics of the Heian period were unearthed by the current survey, but especially from the pits in which earthen wares were abandoned, relics written Ikaruga-no-Muro “鵜室” on the outside of the bottom of grey-glazed plate were unearthed. This is important to know the character of the Kitano-Haiji. Besides precious objects, for example apart of a two-colored vase with

five mouths, black earthenware, green-glazed pottery, Sue-type pottery and etc., too ware unearthed.

By means of these structural remains and relics, the time of the foundation of the Kitano-Haiji were confirmed and the early years of it brought to light to go back to the first half of the 7th century. These structural remains existed until the second half of the 7th century, which were abandoned at the end, and new structural remains came into existence.

And then several times of structural remains coming into existence in the Heian period give account of that the events related to the temple and the things for living a life were actively carried out. But structural remains become extremely scarce in the later Heian period and come into existence again in the Muromachi period.

By the current survey, foundation, prosperity, rise & fall and a part of history of the Kitano-Haiji were brought to light. There are yet many unclear points, for example, structural remains of the Nara period and the Kamakura period to be unable to confirm in this time, but this result might be suggestive and important data for the Kitano-Haiji.